



TITLE:

フランス産業革命期の農業思想に関する研究(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

坂本, 慶一

CITATION:

坂本, 慶一. フランス産業革命期の農業思想に関する研究. 京都大学, 1965, 農学博士

ISSUE DATE:

1965-09-28

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r564>

RIGHT:

フランス産業革命期の

農業思想に関する研究

坂本慶一

目次

| | | |
|-----|--------------------|----|
| 序説 | 研究課題と方法 | 1 |
| 第一章 | 産業革命期のフランス経済学と社会思想 | 6 |
| 第一節 | フランス経済学と社会思想の課題 | 6 |
| 第二節 | セーの産業主義経済学 | 11 |
| 第三節 | サン・シモンの産業革命思想 | 20 |
| 第四節 | シスモンディの福祉経済学 | 27 |
| 第五節 | フーリエの協同社会思想 | 34 |
| 第六節 | ブルードンの貧困の経済学 | 44 |
| 第二章 | サン・シモンの農業思想 | 53 |
| 課題 | | 53 |
| 第一節 | 産業社会の構想 | 55 |
| 第二節 | 企業的農業育成論 | 58 |
| 第三節 | 産業革命の主体と農業者 | 66 |
| 第四節 | 産業革命における農業 | 75 |
| 結語 | | 81 |
| 第三章 | シスモンディの農業思想 | 89 |
| 課題 | | 89 |

| | | |
|-----|---------------------|-----|
| 第一節 | 産業革命期のフランス農業の社会構造 | 91 |
| 第二節 | シスモンディ経済学における貧農問題 | 97 |
| 第三節 | 比較農業経営制度史論 | 101 |
| 第四節 | 自作農主義政策論 | 110 |
| 結語 | | 113 |
| 第四章 | フリーエの農業思想 | 121 |
| 第一節 | 産業革命期のフランス農業の生産構造 | 123 |
| 第二節 | フリーエの協同社会思想における農業問題 | 129 |
| 第三節 | 農業生産協同化論 | 135 |
| 第四節 | 農村社会計画論 | 140 |
| 結語 | | 143 |
| 総括 | | 149 |

序説 研究課題と方法

産業革命 (Industrial Revolution) は、自動機械の出現という生産技術の面における革新を契機としてひき起こされた、社会経済構造の全般的変革の過程である。この過程において、資本主義経済は一つの体制として不動の地位を確保する。世界史的にみて、この変革は、まずイギリスにおいてほぼ一七六〇年ごろに始まり、一八三〇年ごろに完了する。つづいてフランス産業革命が一八一五年ごろより始動し、一八三〇年代に本格的に展開し、おそくとも一八七〇年ごろには完了する。ドイツでは、一八四〇―一八七〇年、そして日本では一八九〇―一九一〇年が産業革命の時期にあたる。それぞれの国々は、産業革命を経過することによって、はじめて資本主義経済を体制として確立することになる。したがって、産業革命の在り方いかんがその国の資本主義を特質づけ、あるいはその国の資本主義の特質は、産業革命の在り方に表現されているといっても過言ではない。産業革命の研究は、それゆえ、資本主義経済の一般的発展法則の研究であるとともに、また、それぞれの国の資本主義の個性的、国民的性質の研究をも意味することになる。資本主義経済が大きく転換しようとしている今日、産業革命は、たんなる過去の関心からではなくて、現実の経済をより正確に認識し、未来の進むべき方向を正しく洞察しようとする見地に立って、精力的、集中的にとりあげられるべき、重要な研究対象である。

しかしながら、本研究が課題とするのは、経済史的事実としての産業革命そのものではなくて、産業革命の過程において変革を余儀なくされる農業を、この時期の社会経済思想家たちが、どのように認識し、その進むべき方向をどのように示したか、ということである。それぞれの国における資本主

義の特質を産業革命の過程のうちに探究し、このような変革期において、農業がどのようなメタモルフォーゼをなしとげるか、という経済の実態そのものの研究は、もとよりきわめて重要であり、論者もこの点に深い関心を寄せるものである。それにもかかわらず論者は、経済変革の実態そのものに対してよりも、ここでは、この変革を主体の側がどのように受け止めたか、ということに、より多くの関心を払っている。このことは、論者自身、農業に関する社会経済思想の研究を通じて、一つの農業観——農業に関する世界観——を確立したいとの意欲によるものである。では、農業経済学者たらんと願うものが、なぜ農業観を確立しなければならぬか。

農業経済の現実を認識しようとするばあい、われわれは、この現実を理論的装置をもって分析するよりも前に、まず農業経済の現実のいかなる側面を、なぜ取り上げるかという、問題選択の価値判断を迫られるはずである。ということとは、農業経済の現実認識は、あれこれの理論的分析装置をたんに利用すればことたりるものではなくて、研究者のいづく問題意識そのものが、認識の対象を限定し、あるいは分析の方法を選択する、ということである。このばあい研究者のいづく問題意識とは、かれが農業に対してどのような世界観をもって対面しているかを意味する。それゆえ、農業経済学者は、農業経済学者である前に、あるいは真の農業経済学者であるためには、何らかの明確な農業観、あるいは農業思想をもたなければならぬ。そうでなければ、かれは農業経済の現実のいかなる側面を、なぜ取り上げなければならぬかを、十分に納得し、あるいは説明することができないであろう。それゆえ農業観——農業思想の確立は、農業経済学者にとって必須の条件であり、これなくして、ひとは真に農業経済学者であることはできないし、またかれみずからの学問的發展も望みえないであろう。論者はシュムペーターとともに、つぎのように主張するものである。

「われわれのイデオロギーの源泉であるかの前科学的認識行為は、同様にわれわれの科学的研究の必要条件でもある。これなくしては如何なる科学においても新な発足は不可能である。この行為を通じてわれわれは、われわれの科学的行為の対象たる新しい素材を獲得し、そして、公式化し、弁護し、あるいは攻撃すべき何ものかを、獲得するのである。この過程においてわれわれの事実および分析要具の蓄積は増大し、また更新して行くのである。かくしてわれわれは、われわれのイデオロギーの故に、その前進は遅々たるものがあるにせよ、これなくしては全く前進することができないであろう。」

(1)

もちろん論者は、農業思想を研究対象とすることによって、たんに自らの農業観の形成に資そうとする意欲にとどまるものではない。産業革命という経済社会の変革期における農業思想の研究が、同じく変革期にある今日の日本農業の進路に、何らかの有効な暗示をあたえてくれることを期待するものである。とくに、小農国フランスにおける産業革命期の農業思想の動向は、同じく家族的小農経営の国である日本に、大きな歴史の教訓をあたえてくれるのではないかと考えるものである。もちろん、問題は、たんにこのこと自体にもとどまらない。

イギリス産業革命の研究にくらべて、フランス、あるいは総じて後進資本主義諸国の産業革命の研究―資本主義の発展法則と国民的経済秩序の認識―は、なお学界において大きな空白を残している分野である。本研究が、フランス産業革命期の農業問題を思想的側面からとらえることによって、この分野の研究に何らかの寄与をなさんとするものであることは、ひとりの研究者として、当然の念願であらう。

「フランス産業革命期の農業思想」を研究課題とする論者の問題意識とその研究の意義は、以上においてのべたとおりである。そこでつぎに、本研究の具体的プランを、あらかじめ要約的に提示して

おきたい。

第一章では、フランス産業革命期、とくにその始動期である一八一五年以降より、その本格的展開期である一八四〇年代までにおける、主要な経済思想と社会思想、すなわち、セー、サン・シモン、シスモンディ、フリーエおよびブルードンのそれを概観し、その科学的、イデオロギー的特徴を抽出する。そのさい、イギリス古典経済学、とくにアダム・スミスの経済学に対するそれぞれの思想家の反応を明らかにし、これによってかれらの経済学および社会思想の課題と性格を問うとともに、それぞれの諸思想の相互連関関係を明らかにする。

第二章以下では、前章における理解を前提として、それぞれの思想家の農業思想の課題と内容を個別的に解明する。このばあい、サン・シモン、シスモンディおよびフリーエの農業思想に焦点をすえ、セーおよびブルードンの農業思想については論及しない。もちろん、かれらの農業思想も、それ自体、研究に値するものであるが、ここでかれらを省略したのは、つぎの理由によるものである。

第一章での概観をつうじて、この時期のフランスの経済学と社会思想には、産業主義と反産業主義の二つの流れが認められる。前者はスミースリカードウらのイギリス経済学のフランスにおける継承と発展を示すものであって、この立場はセーとサン・シモンにみられる。かれらの立場は、細部においてはもちろん相異なるのであるが、産業主義の経済学であり、社会思想である点は同一である。そして、かれらの農業思想は、スミースリカードウのそれと同様、企業的農業の育成を課題とするものである。この点にかんがみ、ここではセー経済学を発展・純化させたサン・シモンの農業思想をもって、フランスにおける産業主義の農業思想を代表させることにする。

反産業主義の立場、すなわち、イギリス古典経済学の批判的継承の立場は、シスモンディ、フリー

エおよびブルードンにおいて表明されている。農業思想の面からみれば、かれらの反産業主義の立場は、国民経済における農業重視の立場——農業主義——として表われる。これはケネーよりスミス——その産業主義思想にもかかわらず、フィジオクラートの影響はなお濃厚である——への線につながるものといつてよい。シスモンディは、サン・シスモンの企業的大農論に対比される家族的小農経営を重視する自作農主義の立場を堅持し、またフリーエはそれと対照的に、農業生産の協同化にもとづく協同組合的大農制を主張した。ブルードンの農業思想は、協同組合によつて有機的に組織された家族的小農経営を育成しようとする立場であり、この点でかれの農業思想は、シスモンディとフリーエの農業思想を折衷させたものである。それゆえここでは、反産業主義の農業思想は、シスモンディとフリーエにおいて対照的な形で表明されているという意味で、ブルードンの農業思想を省略することにする。

要するに、第二章においては、産業主義の立場を代表するサン・シモンの農業思想をとりあげ、第三章および第四章では、反産業主義の立場をそれぞれ対局的に代表する、シスモンディとフリーエの農業思想について考察する。

(註)

- (1) シュムペーター「科学とイデオロギー」『思想』一九四九年九月、頁三〇三

第一章 産業革命期のフランス経済学と社会思想

第一節 フランス経済学と社会思想の課題

一、スミスとフランス経済学

「アダム・スミスを批判することは、一九世紀の学説史を前もって叙述することになるだろう。……この世紀の経済思想史は、かれの著書にしがみついているかのようであった。敵も味方も等しくスミスの著書をかれらの思索の出発点として受け取った。あるものはそれらを発展させ、継承し、修正し、他のものはその主要な理論をきびしく批判している。」⁽¹⁾

シャルル・リスト (Ch. Rist, 1874~1955) が指摘している以上の事実は、そのまま産業革命期のフランス経済学の主題を構成するといえる。少なくともここで扱おうとするセー (J.-B. Say, 1767~1832)、サンーシモン (C.-H. de Saint-Simon, 1760~1825)、シスモンディ (J.-C.-L. S. de Sismondi, 1773~1842)、フリーエ (F.-M.-C. Fourtier, 1772~1837) およびブルードン (P.-J. Proudhon, 1809~1865) はすべて、スミス (A. Smith, 1723~1790) をかれらの思想形成の出発点としつつ、あるいはスミス経済学の継承、発展、純化を企て (セー、サンーシモン)、あるいはスミスとその後継者であるリカードウ (D. Ricardo, 1772~1823) やセーの理論を、経済的事実への不適合という視角から批判しようとする (シスモンディ、フリーエ、ブルードン)。

つまり、スミスを中心とするイギリス古典経済学の有効性が、一九世紀初頭のフランスの社会的、経済的風土のもとで検証されるのである。そして、このこと自体、当時におけるフランス資本主義の

後進性ないしは過渡的性格を物語るものである。

フランス経済の現状をどう認識するか、その資本主義発展の未来像をどう描くかによって、イギリス古典経済学は、フランス経済にとって、なおも有効であるかあるいはすでに無効である。経済の実態はただ一つであるとしても、これを認識する主体にとっては無限の多様性をもちうる。特に、一つの経済体制から他の経済体制への移行期においては、経済の実態は、古いものと新しいものとの混交によって、きわだった多様性を示す。ここから主体の側における現実認識の多様性が生まれてくる。それゆえ市民革命より産業革命にいたるまでのフランス経済学および社会思想の多様性は、この時期におけるフランス経済そのものの過渡的性格と多様性を反映するものといえよう。

二、フランス経済の過渡的性格

フランス革命は、アンシャン・レジームと近代社会との間に打ち込まれた一つのくさびである。それは、政治的側面からみれば、領主体制の廃棄と市民的人権の宣言とによって、世界史上、類例をみない一大変革であり、まさに「市民革命の典型」とよばれるにふさわしい。革命とともに封建社会は終演の幕を閉じ、同時に、輝かしい近代市民社会の開幕が告げられるのである。だが、それにもかかわらず、経済的側面からすれば、革命はフランス産業の全面的開花をただちにもたらすものではなかった。産業革命への道は、フランス産業にとって、なお峻険をきわめた——土地改革の不徹底による貴族の大土地所有の残存、革命が創出した農民的小土地所有の固定化と小農経営の存続、革命が手をふれることのできなかった商工業における家内的小営業の生存、さらに、ナポレオン (Napoleon I, 1769~1821) によって一七九三年より一八一四年までになされた数々の戦争による国内資源の枯渇と海外貿易の断絶、そして戦後の深刻な不況……

もちろん、この間に、ナポレオンがとった経済政策、特に「大陸制度」(Système continental, 1806~1812年)に表象される保護政策が、フランス国内産業の培養・育成によって、産業革命への道を準備した事実を見落すことはできない。⁽²⁾ だが、それにもかかわらず、一般的にいつて、ナポレオン体制下におけるフランス資本主義の発展の緩慢さは、まぎれもない事実であり、さらに、つづくブルボン復古王政下(1815~1830年)においても、事態の本質には大きな変化が認められず、アンリイ・セエ(H. See, 1864~1936)の表現を借りれば、「資本主義はまだ控え目にしか現われていなかった。」⁽³⁾ セエがいうように、王政復古期は、たしかに「古い経済から新しい経済への移行期」をなしていたといえよう。

以上のような経済の過渡的状况を反映して、この時期の階級構成もきわめて複雑である。ジャン・ロナム(J. Lhomme)によれば、一八三〇年の七月革命前夜における階級構成は、支配階級である土地貴族を頂点とし、被支配階級である農民と労働者を底辺とし、大ブルジョワジーと中産階級を中間にはさんだ形態をとっている。⁽⁴⁾ 大ブルジョアジーが土地貴族を打倒して政治的権力を獲得するのは、ロナムによれば一八三〇年の七月革命によってであり、したがってこの階級が産業の将師(capitaines d'industrie)としてフランス産業革命の本格的展開を企てるのは、一八三〇年以降であり、セエによればさらにおくれで一八四〇年代以降である。

そのころ、海峡のかなたでは、すでに産業革命を完了し、工場制大工業と借地制大農経営を両翼とする資本主義的生産様式を確立する。

革命以後、一九世紀初頭におけるフランス経済の以上のような過渡的性格と、イギリスに対するその後進性は、この時期におけるフランス経済学に独特の課題を提供することとなる。

三、フランス経済学の課題

フランス経済学の以上のような過渡的性格は、革命の理念が、一九世紀初頭においてもなおその経済的裏付けを獲得していないこと、したがってフランス革命は実質的にまだ完成していないことを示す。ここから革命後におけるフランス資本主義の課題が生まれる。すなわち、革命が法的に確認した封建制の完全廃棄と、そのことによって予定される産業資本の展開に実質的内容をあたえること、いかにすれば、一方では貴族的大土地所有に表象される封建遺制を徹底的に排除すること、他方では市民的自由の名のもとに、産業資本の蓄積を強行すること。そして、それらを基礎として産業革命を推進し、資本主義経済を一つの体制として確立すること。

フランス資本主義の課題が以上のとおりだとすれば、それはなお、スミス経済学の完全な有効性を主張することができた。われわれは、かかる意味でのフランス資本主義のイデオログを、「大陸のアダム・スミス」といわれる「*Adam Smith*」の経済学にみることができる。セー経済学の課題は、フランス資本主義を、先進国イギリスの経済発展の路線上に定着させることであつた。したがって、セーにとっての問題は、スミス経済学のたんなる輸入ではなくて、これをフランス経済の特質に密着するように組み変えること、あるいはスミス経済学を発展的に継承することであつた。

セー経済学の課題は、サン・シモン¹⁾の思想体系のなかに継承・純化される。そこでは封建遺制への批判的姿勢が一層硬化されるとともに、フランス産業の国民的特質の探究に基づく産業革命の独自のコースが構想される。

ところで、イギリス資本主義は、その体制完了（1830年ごろに産業革命完成）に先立って、早くも資本主義経済の矛盾を露呈する。ナポレオン戦争後の深刻な不況、海外における投機事業の失敗、

綿製品市場の喪失、それらによってひき起こされた広汎な失業、かくしてスミスが予想だになかった階級対立の激化、若々しいブルジョアジーの楽天的な予定調和観は影をひそめ、マルサス（J. B. Malthus, 1766-1834）、リカードウの「陰気な科学」（dismal science）が登場する。

イギリス資本主義のこうした矛盾の顕現は、フランス資本主義に、もはやスミス流の陽気さをもって産業革命の序曲をかなでることができないことを、はっきりと自覚させる。産業革命の進行が、フランス社会の内部にもまた、イギリスと同様の矛盾を生み出すと予想されるとすれば、いな現に生み出しはじめているとすれば、イギリス資本主義の、あるいはイギリス古典経済学の真価が、あらためて問われなければならないはずである。ここに、先進国イギリスの、また大陸の後進諸国の経済事情に通じる国際人、シスモンディの苦悩があった。

だが、シスモンディの憂慮にもかかわらず、資本主義経済はたしかな足どりをもって着実に発展する。フランス産業革命の本格化とともに、小農民、手工業者の没落が、そして都市賃労働者の悲惨な情況もまた深刻さを加える。フリーエとブルードンが直面した問題は、まさにそこにあった。

われわれは以下において、フランス資本主義の発展過程を念頭におきながら、イギリス古典経済学のフランスにおける継承と批判の態様を、個々の経済思想家の課題とその経済学的主要内容を追求しながら、さらに立ち入ってあとをつづけてみたい。

註

- (1) Ch. Gide et Ch. Rist, Histoire des doctrines économiques, 4^e éd., Paris, 1922, p. 119. 宮川貞一郎訳『経済学説史』（上）一九三六年、一四四～一四五ページ。

(2) 吉田 静一『フランス重商主義論』一九六二年、第三章を参照。

(3) Henri Sée, Histoire économique de la France, t. II Paris, 1951, p. 109.

(4) Jean Lhomme, La grande bourgeoisie au pouvoir, 1830-1880, Paris, 1960, p. 3.

第二節 セーの産業主義経済学

一、セーの課題

セーの課題は理論と実践の両面にまたがっている。理論の面では経験科学としての経済学の確立につとめ、実践の面では、理論の成果に基づいて、フランス産業の資本主義的發展をはかろうとしたのであった。あるいは、理論と実践の統一をめざすかれの立場からすれば、むしろ、理論的成果そのものが、同時にかれの実践を意味する、といってもよい。

一八〇三年に出版され、生前に五版を重ねた名著『経済学概論』(Traité d'économie politique)におけるセーの中心テーマは、その副題である「富が形成され、分配され、消費される方法の簡略な説明」(Simple exposition de la manière dont se forment se distribuent et se consomment les richesses)に示されているように、「富を支配するすべての法則を発見すること」⁽¹⁾であった。これを解明するためには、ベーコン(F. Bacon, 1561-1626)以来、あらゆる科学がとってきた経験的方法を採用する。経験的方法とは、「観察と経験が実在を証明した事実しか真理として認めないこと、またこれより必然的に引き出しうる結論でなければ、不変の真理として認めないこと」⁽²⁾である。

経験的方法によって確められた真理は、まさに「事物の進行を支配する一般法則」にほかならない。セーはこの「一般法則」(les lois générales)を実際の情況判断と行動の基準とするばあい、これを「原理」(Principes)とよぶが、かれはこうした原理を発見することをもって、経済学の究極目標とみなす。

「経済学は、精密諸科学と同様に、少数の根本原理と多数の推論あるいはこれらの原理の諸帰結とから成り立つ、この科学の進歩にとってたいせつなことは、これらの根本原理をしっかりと確立することである。」⁽³⁾そして、「その時に経済学概論は、もはや証明される必要のない少数の原理に帰着するであろう。」⁽⁴⁾

以上のような徹底した経験的方法の立場から、セーはフィジオクラートの規範的方法、あるいはリカードウの演繹的方法を、その抽象性と非実証性のゆえに非難し、すすんでスミスに対して批判の矛先を向ける。

かれは、スミスが抽象を排し、事実の観察によってのみ一般法則に到達するという新方法を経済学に導入した功績をたたえ、「かれ以前に経済学は存在しなかった」⁽⁵⁾と称賛しつつ、なお次のようにこれを批判する。「スミスは多くの箇所において明析を欠き、ほとんどいたるところで方法を欠いている。」⁽⁶⁾「かれの著書は、正しい観念と実証的知識とのまぜこぜの一大カオスである。」⁽⁷⁾

それにもかかわらず、セーのスミス批判は、けっしてスミス経済学の本質にかかわるものではない。セーが次のようにのべるとき、かれは、やはり、スミスと同じ経験的自然法の立場に位置することを

示している。「これらの原理は人間の作品ではまったくない。それらは事物の本性に由来するものだ。それらは設定されるのではなくて発見されるのである。」⁽⁸⁾

セーの経験的自然法の立場は、スミスにおいてそうであったように、かれにおいても現実の経済社会に対する批判の軸となる。実証に基づいて確認された経済学の原理が、その実証性のゆえに、いまや、「人間と真理との間に介在してくる……あの偏見と權威とをことごとく排除する」⁽⁹⁾といった、強い実践性を獲得するのである。そしてかれがさらに、「偏見の衰退が諸科学の進歩を、すなわち自然の諸法則にかんするいっそう正確な知識をたすけ、諸科学の進歩が産業の進歩を、そして産業の進歩が諸国民の富裕をたすけた」⁽¹⁰⁾とのべるとき、ここには、旧制度の没落——科学の進歩——産業の発展——国富の増大という、かれの実践的シェーマがはっきりとえがかれているのを見ることが出来る。かれの経済学がその理論的課題に答えたとき、同時にこのシェーマの実現が促進されることになるのである。われわれは、セー経済学の特質をなす「販路の法則」と「企業者の理論」のなかで、このことを論証しようとおもう。

二、販路の法則

販路の法則 (*la loi des débouchés*) は、別にセーの法則 (*la loi de Say*) ともよばれているように、セーの発見に帰せられる。この法則についてのセーの見解は、『経済学概論』初版の第一部第二十二章に素朴な形で表現され、他の版では第一部第十五章に、一層精密な形式でのべられ、さらに『実践経済学通論』(1828~1829年)第二章や「マルサスへの書簡」などでくりかえされているが、要するに次のような簡単な命題に要約される。

「生産物は生産物をもって支払われる。」「生産物に対して販路を開くものは生産である。」「何

物も生産しなければ何物も買うことができない。」「ある生産物が過剰であるのは他の生産物が不足しているからである。」⁽¹¹⁾

「供給はそれ自らの需要を創造する」(ケインズ)ともいいかえられるこの簡単な命題をめぐってマルサス、リカードウ、トレンズ(R. Torrens, 1780~1864)、シスモンディ、J. S. ミル(J. S. Mill, 1806~1873)らがセー自身と、あるいは相互に、激しい論争をかわしたのであった。近くはケインズ(J. M. Keynes, 1883~1946)によるこの法則の論難はあまりにも有名である。この法則が論争のまとなるのは、それが資本主義の本質に深くかわる問題を提起しているからにほかならない。以下、販路の法則を通じてセー経済学の本質的性格を追求し、あわせてこの法則がもつ当時のフランス資本主義に対する実践的意義を探ってみたい。

さて、セーは、「経済学は少数の根本原理と多数の推論から成り立つ」とのべたが、かれは販路の法則という根本原理から、さらにいくつかの推論を導き出す。これらの推論の主なものを取りあげ、それをとおしてセー経済の本質——前もっていえば産業主義的性格——を探ろう。

(一) 「あらゆる国において、生産者が数多くなればなるほど、また生産物が増加すればするほど、販路はますます容易、多様、広大となる。」⁽¹²⁾ ここには、経済社会における生産および生産者の役割の重視と、需要によって制約されない生産力の無制限増大の観点がつらぬかれている。

(二) 「各人はすべての人々の繁栄によって利益を受け、また一部門の産業の繁栄は他のすべての部門の産業の繁栄に役立つ。」同様に、「一国は他国の繁栄によって利益をえ、その富裕によって保証される。」⁽¹³⁾ ここには、自由主義の原理に基づく諸個人、諸産業、諸国家の利益の調和とその均衡発展への期待と確信が表明されている。

(三) 「外国生産物の輸入は自国生産物の販売にとって有利である。」⁽¹⁴⁾ これはいうまでもなく自由貿易の主張であり、ナポレオンの大陸制度に表象される保護貿易主義への批判である。

(四) 「単純な消費、すなわち新しい生産部を刺激する以外の目的をもたない消費は、国の富には何ら役立たない。」⁽¹⁵⁾ 生産的消費を重視し、消費のための消費の無益さを説いているこの推論は、ナポレオン体制にみられる軍国主義的官僚国家の批判であり、自由主義経済の理念の一つをなす「安価な政府」の主張である。

(五) 「創造された生産物は種々の需要を生みだす……もっとも需要される商品は、需要者の競争によって、それに投入された資本に対していっそう莫大な利子をあたえ、企業者に対してはいっそう多大な利潤をあたえ、労働者に対してはいっそう多額の賃金をあたえる商品である。」⁽¹⁶⁾ ここでは、すでに表明されている経済社会の均衡とその自律性への信頼が、一層明確にのべられている。この均衡と自律性の基盤をなすものは、いうまでもなく各人における完全な自由競争である。こうして、販路の法則を前提とするかぎり、セー経済学のなかには、一般的過剰生産——恐慌——失業の図式は影さえもみられないことになる。

以上、販路の法則に基づくセー自身の推論から明らかになることは、セー経済学の産業主義的性格である。われわれはこの産業主義を、特に次の三点に要約しうると考える。

第一、経済社会における生産者の重視と非生産者への批判。第二、諸産業の全面的発展と生産力増大への期待。第三、経済社会の自然的均衡と自律性への確信。

このセーの産業主義経済学が当時のフランス資本主義に対してもつ実践的意味はもはや明白であろう。自由競争——資本蓄積——経済発展のコースがこれである。それゆえセーの販路の法則は、スミ

ス経済学の当然の帰結であつたといえよう。

三、企業者の理論

資本家と区別された産業企業者 (entrepreneur d'industrie) の概念は、すでに『経済学概論』の初版 (Liv. 4^e, chap. VIII) において認められる。セーはそこで、スミスが、企業者の利潤と資本の利子とを区別しなかったため、大混乱におちいついてると指摘している。しかし、かれの企業者の理論は、一八〇四—一八一三年の製糸工場経営者としての経験を取り入れた、第二版以後において、より明確に展開されている。ではセーの企業者とはいかなるものか。それは産業の発展にいかなる役割を演じるか。またかれの企業者の理論は、当時のフランス経済に対して、いかなる実践的意味をもつか。

さて、セーは生産要素として勤労 (industrie) と資本と土地をあげ、これらをもって生産する人々を生産者とよぶ。生産者は二つのグループに分けられる。第一のグループは勤労能力の所有者で、勤労者 (industriels) とよばれ、このなかには学者、産業企業者および労働者が含まれる。これらのうち、産業企業者にはさらに農業企業者、工業企業者および商業企業者が含まれる。第二のグループは資本と土地の所有者、すなわち資本家と地主とからなる。以上の分類で注目されるのは、資本家と企業者の区別である。

セーによれば、資本家とは、資本を企業に貸し付けることによって、利子を取得する者であり、企業者とは「借入資本」と自己の「勤労能力、すなわちその判断、その生得または修得の才能、その活動、その組織と管理の精神」¹⁷⁾ とをもって、利潤を獲得する者である。したがって企業者が獲得する利潤のなかには、借入資本の利子と企業者自身の勤労の利潤とが含まれていることになる。つまり、

セーにおいては資本利子と企業者利潤とが、はっきりと区別されているのである。この点は、セー自身、「イギリスの経済学者たちは、企業者がその勤労、すなわち才能によって獲得する所得と、その手段、すなわち資本に負う所得とを、利潤の名のもとにほとんど混同している」⁽¹⁸⁾とのべているように、かれのイギリス古典経済学からの発展を示すものである。

セーはこの企業者を、経済発展の中心にすえる。すなわち、「自らの計算で、自らの利潤と危険とにおいて、何らかの生産物を創造しようとする産業企業者」⁽¹⁹⁾は、「その産業部門についてすでに知られたことを習得することからはじめ、ついで資本、技師、労働者を集め、そして各人に仕事をあたえ、かくして企業者の「勤労によって、もっとも無価値な物質が莫大な効用をさすけられる」⁽²⁰⁾にいたる。さらに、「企業者はその成功の独占的利益を長期間にわたって享受する……多かれ少なかれ危険な試み」⁽²¹⁾によって、技術の進歩をはかりつつ、資本の蓄積と事業の拡大につとめる。

「新結合の遂行」を職能とするシュムペーター(J. A. Schumpeter, 1883~1950)の「企業者」(Unternehmer)の概念が、萌芽的ながらここに表現されているとみることができ。ただし、セーは企業者を資本家と区別して認識したとはいえ、かれの企業者は、現実には、当時のフランス経済の実態を反映して、資本家と企業者の未分離な小営業者にはかならない。次のことばがそれを示す。「土地、資本および勤労は、時として同一の手に併存している。」「少なくともその資本の一部を自ら所有しないほど貧しい企業者がいることはまれである。」⁽²²⁾

もともと産業企業者(entrepreneur d'industrie)のindustrieとは、彼によれば「生産に適用された人間の肉体的、精神的諸力の作用」⁽²³⁾をいい、労働(travail)よりは広い概念であるという。とすれば、entrepreneur d'industrieは、産業企業者というよりは「勤労能力による

企業者」あるいは「勤労企業者」という意味に近いといってよいだろう。それゆえかれが、「多数の有能な商人、製造業、農業者のいる国は、もっぱら精神文化の優れている国よりも、いっそう繁栄の手段をもっている」⁽²⁴⁾とのべるとき、かれは十九世紀初頭のフランスに広汎に存在するこれらの小営業者に注目し、その企業能力の自由な展開によって、諸産業の資本主義的な発展を期待したのだといえよう。

四、セーの影響

セーがその後のフランス経済学にあたえた影響は少なくない。レーノオによれば、「自由主義的、もしくは半自由主義的なフランスの経済学者たちのほとんどすべてが、セーの影響をさまざまな程度で表現している」⁽²⁵⁾。わけてもセー経済学の影響は、デュノワエ (Ch. Dunoyer, 1786-1862) の『労働自由論』 (De la liberté du travail, 1845) 、バステニア (C.-E. Bastiat, 1801-50) の『経済調和論』 (Harmonies économiques, 1850) 、もとサン・シモン派のシュバリエ (M. Chevalier, 1806-79) の『経済学講義』 (Cours d'économie politique, 1842-44) 、とくに第二版 (1855-56) およびレオン・セー (Léon Say, 1826-96) の『商業自由論』 (Liberté du commerce, 1896) などの古典的自由主義者たちの著作のなかに見いだされる。しかし、他方においてセーの影響は、サン・シモンへおよびることによって、自由主義経済学のわくを越えてゆくことになる。

註

- (1) *Traite d'économie politique*, 5^e éd., Paris, 1826, t. I, p. xv. 増井幸雄訳『経済学』(上)

一九二六年、八ページ。

- (2) Ibid., p. x. 同書、八ページ。
- (3) Traite, 1^{er} éd., Paris, 1803, t. I, p. x.
- (4) Traite, 5^e éd., t. I, p. xxix. 邦訳(十)一五ページ。
- (5) Ibid., p. 1x. 同書、五三ページ。
- (6) Ibid., p. 1xxii, 同書、六六ページ。
- (7) Traite, 1^{er} éd., t. I, p. vi, 5^e éd., t. I, p. xv. 同書、一二ページ。
- (8) Traite, 1^{er} éd., t. I, p. xi.
- (9) Traite, 5^e éd., t. I, p. x. 邦訳(上)八ページ。
- (10) Ibid., p. xxiii. 同書、一九ページ。
- (11) Ibid., pp. 176, 177, 183, 184. 同書、二九九、三〇〇、三〇七、三〇八ページ。
- (12) Ibid., p. 182. 同書、三〇六ページ。
- (13) Ibid., pp. 186, 189. 同書、三一一、三一二、三三四ページ。
- (14) Ibid., p. 190. 同書、三二六ページ。
- (15) Ibid., p. 191. 同書、三二七ページ。
- (16) Ibid., p. 194. 同書、三三〇ページ。
- (17) Traite, 5^e éd., t. I, pp. 269~270. 邦訳(下)一三五ページ。
- (18) Ibid., p. 233. 同書、九六ページ。
- (19) Traite, 5^e éd., t. I, p. 51. 邦訳(上)一六一ページ。

- (20) Ibid., pp. 55 ~ 56. 同書、一六六ページ。
- (21) Ibid., p. 60. 同書、一七二ページ。
- (22) Ibid., p. 45. 同書、一五五ページ。
- (23) Traite, 5^e éd., t. III, p. 296. 邦訳(下)六二三ページ。
- (24) Traite, 5^e éd., t. I, p. 57. 邦訳(上)一六八ページ。
- (25) P.-L. Reynaud, Jean-Baptiste Say, textes choisis et préface, Paris, 1953, p. 53.

第三節 サンシモンの産業革命思想

一、サンシモンの課題

スミスの、わけてもセーの産業主義は、サンシモンにひきつがれて、産業革命思想として展開する。かれは、産業社会発展の一元的原理を実証的に見だし、この原理に基づいて既存社会を変革しつつ、すみやかに純粋産業体制をフランスに樹立しようと企てる。ではこの課題の解決にあたって、かれは古典経済学の成果をどのように継承しようとしたか。

かれは、「不滅のスミス」のなかに産業発展の原理をもとめる。かれによれば、「スミスの書物は、封建制度に対するいまだかつてなされなかった、もっとも力強い、もっとも直接的な、もっとも完全な批判であった。」⁽¹⁾ スミスは、富裕になる唯一の方法は生産であることを確認し、この視角から、消費にふけて国民を破滅にみちびこうとする封建国家を批判し、さらに、国民が富裕と平和に生きるためには、その政府の原理と本質を変えなければならないことを教えた。同時にスミスは、次のこ

とを証明した。「国民は、裕福になるためには、製造業者や商人や何らかの産業に従事するすべての人々と同じ方法で事をなさねばならない。したがって、自由になり、富裕になろうとする国民の予算は、ある産業・商館の私的な予算と同様の原理にしたがって編成されねばならない。国民がもちうる唯一の道理にかなった目的は、できるだけもっと少ない行政費をもって、できるだけもっとも生産することである。」⁽²⁾

以上がスミスによって発見された産業発展の原理であるとサン・シモンは説く。そして、封建国家より産業国家への移行の合法的方法を見いだすことが、スミス以後における産業の課題であると自覚する。しかしかれは、スミスの思想がセーによって継承され、発展させられたことを認める。「セー氏において、現在の政府の統治に対する批判は、いっそう明瞭な性格をおびる。すなわち、軍事的統治の原理と産業的統治のそれとの間の比較は、いっそう直接的な方法で定められる。」⁽³⁾ すなわち、セー経済学は次のことを証明したのであった。

「封建的、軍事的政府は、文化の状態からおくれた、国民にとっては費用倒れの政府であり、かれらにはいかなる点からみても有益ではない。また政府の企図と利益とにおいて考え出された予算は不条理である。国家の予算は産業の企業をおこなっている会社のそれと同じ方法で編成されるべきである。国家はとうぜん、盗む目的か、あるいは生産する目的かの二つの目的のうちの一つのために組織されねばならない。すなわち国家は軍事的性格か、あるいは産業的性格かのいずれかをえらばなければならぬ。」⁽⁴⁾

サン・シモンは、スミス、セーによって確立された自由主義経済学の原理のなかに、フランス産業の発展の原理を見いだす。かれらによってなされた封建遺制に対する、「安価な政府」の理念に基づ

く産業資本の側からの批判は、そのままサンシモンによってひきつがれる。かれは、「土地は富の唯一の源泉であり、富を倍加するのは農業である」（ケネー）とするフィジオクラートの原則を、スミス—セーの産業主義の原則に組みかえてこうのべる。「産業は社会存在の唯一の保証であり、あらゆる富およびあらゆる繁栄の唯一の源泉である。」⁽⁵⁾

しかし、経済学を政治の基礎とみなすセーの主張を取り入れて、「政治とは生産の科学である」としながら、スミス、セーの経済学の原理は、サンシモンによって産業を組織するための政治の原理に転化され、そのことによって経済学の原理的發展はかれにおいて切斷される。かれがスミス、セーより継承したのは、かれらの産業主義思想である。だがかれは、この立場を一層徹底させ、あるいは思想的に純化することによって、古典経済学のブルジョワ的限界をのりこえてゆこうとする。

二、産業革命の歴史的基礎

サンシモンにとって、未来社会を展望するためには、何よりもまず社会發展の歴史法則を確認することが必要であった。歴史的基礎のない未来社会の構想は、かれには単なるユートピアでしかなかったのである。それゆえ、かれにとってなすべき第一のことは、形成されつつある新しい事実の連鎖を実証的、歴史的に認識して、これを提示することである。

こうしてサンシモンは、文明進行の客観的考察を試みつつ、社会發展の歴史的事実を忠実に掘り起こし、そこから一つの原理、あるいは法則を組み立てようとする。かれの実証的な歴史研究の方法は、弟子チェリー（A. Thierry, 1795～1856）をつうじて、その後のフランス実証史学の發展に貢献した。ただしここでは、かれのあとづけた歴史的事実の認識過程ではなくて、その結果について、すなわち、かれが歴史研究によってえた社会發展の法則とは何か、ということについてのみ考察する。

サンシモンによれば、社会発展の動因は科学と産業である。そして社会は、この二つの動因のもとに、次の三つの段階を経て発展してきたし、また現に発展しつつある。すなわち、社会は、旧体制である神学的、封建的体制より、中間体制である形而上学的、法律的体制へと進み、さらに新体制としての科学的、産業的体制へ必然的に移行する、ということである。中間体制を代表するものはフランス革命であり、また旧体制は支配的、封建的、軍事的制度ともなわれ、新体制は管理的、産業的、平和的制度とも表現される。コント (A. Comte, 1798~1857) に先んじて提示されたこの三段階の法則はまた、組織の時代——危機の時代——組織の時代という循環交代の法則を含んでいる。ただしこれは単なる循環図式ではなく、そこには生産力の発展に基づく社会の質的転換が前提されている。したがって、過ぎ去った組織の時代と来るべき組織の時代とは質的に異なる。かれの発見した歴史法則は、それゆえ、ラセン状に循環交代する社会発展の法則であったのである。

現在、フランス社会が位置する時点は、フランス革命の流産のためにその移行が長びいている危機の時代であり、新しい組織の時代である産業体制へ、まさに転換しようとしている時期である。この転換には革命がともなう。それは政治・経済・社会・科学・道徳にまたがる広汎な変革であり、しかもその到来は歴史的必然性をもつ。かれはいう、「一大革命が準備されている。それは勃発に手間どらないだろう……この革命は、けっして避けることはできないし、いちじるしくおくらせることはできない。なぜなら、それは事物の自然から生じたものだからだ。」⁽⁶⁾ 必然的、不可避免的だとすれば、それを主体的に推進することこそ社会の発展にかなった行動であろう。

こうしてサンシモンは、産業体制確立の「一大革命」を推進するための構想に精力をかたむける。それは、かれの描いたフランス産業革命の独自のコースである。「独自のコース」というのは、かれ

の産業革命の構想は、現実に進行しようとするフランスの産業革命を、そのまま無条件に賛美し、容認しようとするものではない、ということである。

三、産業革命の主体と原理

産業革命の歴史的基礎を探究する過程において、サン・シモンは、この革命の担い手である産業者階級が広汎に成立しつつある事実をも、同時に論証する。産業者階級には、狭義には耕作者、製造業者および商業者の生産者階級が含まれ、広義には学者や芸術家なども含まれる。かれは、「産業者階級は基本階級であり、全社会の養いの階級であり、これなくしてはなんびとも生存することのできない階級である」⁽⁷⁾ ことを確認する。産業者あるいは生産者に対するものは非生産者であり、かれらは貴族、軍人、金利取得者、不耕作地主などからなる。

生産者と非生産者の区別は、すでにセーにみられるものであり、さらにケネー（F. Quesney, 1694～1774）やスミスまでさかのぼりうる区別であるが、サン・シモンの特徴は、この区別に基づく生産者の立場からする非生産者への攻撃の激烈さにある。かれは非生産者を国民のひとりのしり、どろぼうとさめつける。これはそのままかれの反封建制と純粹産業体制確立への意欲を示すものである。

ところでサン・シモンの産業者階級は、生産者全体を包含するものではあるが、かれがとりわけ注目するのは産業企業者であり、あるいは全産業者の「総代理人」である銀行家である。すなわちかれは、フランスの初期産業革命における、興隆しつつある産業企業者ならびに金融資本家の立場から、産業体制確立のための一大革命を企てるのである。かれが想定するのは、生産力増大——企業拡大——雇用増加——賃金上昇のコースにほかならないのである。ここにはスミス、セーを継承する「ブルジョワ・資本家的イデオロギーの完成者」⁽⁸⁾ としてのサン・シモンの姿が、はっきりと浮び上って

いる。だが、サンーシモンは、このイデオロギーをさらに徹底することによって、かえってその限界を突破していく。

サンーシモンは、産業革命を推進し、産業体制を組織する原理として、産業的平等の原理、国際主義の原理とともに管理制度の原理と新キリスト教の原理をあげるが、特にあとの二つの原理は、かれのブルジョワ・イデオロギーからの離脱を示すものである。

管理制度の原理は、サンーシモンの国家観を表わすものである。かれはこの原理の成立を歴史的に確認しつつ、未来の産業社会にはもはや支配者は存在せず、管理者がいるだけだと説く。かれの産業国家は、それゆえ、もはや権力的支配機構としての国家ではない。それは社会の一般的利益の代弁者、保護者としての管理国家であり、あるいは産業者の自由意志に基づく協同体としての国家である。この国家観は、スミス、セーの「安価な政府」の徹底と純化に基づくサンーシモンの思想的到達点を示す。この思想は、新キリスト教の原理によって、さらに発展させられる。

管理国家においては、その頂点に立つ管理者＝銀行家は、産業社会の一般的意志の代行者である。かれは社会の運命を、愛の感情をもって、献身的に切り開いて行く人である。産業体制はそれゆえ、「互いに兄弟のように愛しあう」というキリスト教の原理を支柱として構成される。そこでの社会目的はこう設定される。「人間は、すべての仕事、そのすべての行動において、社会の最大多数をしめる階級の精神的、物質的生活を、できるだけすみやかに、かつできるだけ完全に改善することを目的としなければならない」⁽⁹⁾

それゆえ、サンーシモンの産業体制は、利潤追求の合法的体制の確立ではなくて、価値体系の変革をとまなう社会全体の物質的、精神的福祉の増進を唯一の目的とする体制である。かれの描く産業革命のコースは、かくして歴史的事実としてのそれではなく、かえってこれを越えたところに設定されることになる。それらは明らかに古典経済学の限界外の問題である。

四、サンシモンの影響

一九世紀の思想界にあたえたサン・シモンの影響は広汎にわたり、フランスのみならず、ヨーロッパ全土にわたるといっても過言ではない。しかし、その影響の強さはもちろんフランスにある。ビュシェ (P.-J.-B. Buchez, 1796～1865) およびルルウ (P. Leroux, 1797～1871) をつうじての社会的カトリシズム運動の展開、チェリー (A. Thierry, 1795～1856) による実証史学の継承・発展は、すべてサン・シモンを源流とするといつてよい。コントの社会学への影響はいうまでもない。

とくに注目されるのは、バザール (S.-A. Bazard, 1791～1832)、アンファンタン (B.-P. Enfantin, 1796～1864) を中心とするいわゆるサン・シモン派の思想と運動である。かれらはサン・シモンの思想をいっそう展開させることによって社会主義的色彩を濃厚にしつつ、さらにフランスおよびヨーロッパ諸国において幾多の企業をおこなった。かれらは、その社会主義的思想にもかかわらず、客観的にはフランス産業革命を推進する役割を果たした。⁽¹⁰⁾ 社会主義思想史の観点からすれば、サン・シモンとサン・シモン派との間には、古典派経済学に対する最初の理論的批判者、シスモンディが介在することになる。

註

- (1) L'industrie, 1817, Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin, t. XIX, p. 154.
- (2) Ibid., pp. 154～155.
- (3) Ibid., p. 155.
- (4) Ibid., pp. 156～157.
- (5) L'industrie, Oeuvres, t. XVII, p. 13.
- (6) Du système industriel, 1821～1822, Oeuvres, t. XXII, pp. 69～70.
- (7) Catechisme des industriels, 1824, Oeuvres, t. XXXIX, p. 23.
- (8) W. Stark, Saint-Simon as a Realist (The Journal of Economic Thought, Vol. I, 1943, p. 44).
- (9) Nouveau Christianisme, 1825, Oeuvres, t. XXIII, pp. 108～109. 大塚幸男訳『シスターウ人の手紙他三篇』一九四八年、一〇～一一ページ。
- (10) 坂本慶一『フランス産業革命思想の形成』一九六一年、「後篇」を参照。

第四節 シスモンディの福祉経済学

一、シスモンディの課題

セーとサンシモンが、生産力の増大と諸産業の全面的開花のうちに、社会発展の方向を見さだめたとすれば、シスモンディは、かれらはもちろん、総じて古典経済学の信奉者たちが見落したところの、輝くメダルの裏側の暗黒に鋭い観察の眼を光らせる。

一八〇三年の『商業的富について』(De la richesse commerciale)によつて、スミスの祖述者として現われたシスモンディは、一八一九年の『経済学新原理』(Nouveaux principes d'économie politique)によつて、古典経済学に対する最初の内在的批判者、だがかれ自身もその一翼を担うがゆえに、厳密には古典経済学の自己批判者として登場する。この転換をうながしたものは何か。産業革命の進行にともなう資本の非情な論理の目撃、これである。かれはいう、「わたくしは、ヨーロッパがここ数年にわたつて経験した商業恐慌、さらにわたくしがイタリア、スイス、フランスで目撃し、またあらゆる公式の諸報告が、イギリスでもドイツでもベルギーでも、やはり同様であることを示している、工場労働者たちの無残な窮乏にいたく心を動かされた⁽¹⁾。」

シスモンディの眼光は、先進国イギリスの経済的矛盾をつねに意識しながら、そこで発展しつつある資本主義経済の大陸諸国への浸透の過程に、注がれていたのである。『新原理』の第二版(一八二六年)の「序文」においてかれはのべる。「読者の注意をイギリスにひきつけながら、わたくしはイギリスが経験している恐慌のなかに……われわれの現在の苦悩の原因を示し、そしてイギリスがたどった諸原理にしたがつて行動をつづけるならば到来するであろう。われわれ自身の未来の物語を

示そうとした。」⁽²⁾

かれは、「人口の大部分が苦しんでいる時には、その社会秩序はつねに悪である。」⁽³⁾ どの観点に立って、「富者と同じように貧者にも生活の安楽と平穏と安息への参与を保証する秩序……生活が一つの享樂であって重荷ではないような秩序」⁽⁴⁾を確立しようとする。

それゆえ、シスモンディにとって問題なのは、「国内における富の蓄積」そのものではない。そうでなくて、富によってもたらされる「物質的福祉」、すなわち、「国民の安全と健康を保証するいっさいのもの」に、最大多数の人々が参加することである。「富の蓄積」が国民の「物質的福祉」の増大と矛盾しない社会秩序こそ、かれの理想であり、かかる秩序、すなわち「生産と消費の均衡」を確立する方法の探究こそ、自ら「公共福祉の科学」(La science du bien public)と名づけるシスモンディ経済学の課題にはかならない。

シスモンディが自らの課題を以上のように設定するとき、かれは、「アダム・スミスはわれわれのものだ」とのべながらも、本質的には、生産力の増大と資本の蓄積をひたすらに追求する古典経済学に対して、強い非難のまなざしを向けているのである。かれは生産と消費の不均衡を必然化する資本主義のメカニズムを、生産資本の循環過程のなかに明確に把握し、そのことによって、一般的生産過剰を否認する古典経済学、特にセー、リカードウの理論的不備と非現実性を、するどく批判するのである。

ところでかれは、その恐慌論をつうじて追求した資本主義経済の矛盾を克服して、国民の最大多数に物質的福祉を保証することが、政策的に可能だと考える。このことは、かれの資本主義容認の立場を示すものであるが、しかし、政府の干渉をできるだけ排除しようとするスミス、セーの自由放任論

とは、明らかに異なる立場にあることをも示している。

二、恐慌論

シスモンディは恐慌発生の根源を、経済社会の再生産過程における生産と消費、需要と供給の不均衡のなかに見いだす。かれは、富の生産と消費人口、あるいは生産資本の循環と労働人口の需給関係を中心に議論を展開する。

まず、富の形成とその資本への転化をあとづけるために、シスモンディは「孤立人」の想定から出発する。この自給自足的「孤立人」の営みのなかに、やがて「日々の労働の生産物が日々の欲求をこえる」時期がやってくる。こうして富が蓄積され、交換と分業が行なわれ、「孤立人」はたがいに結合して、ここに「社会人」が誕生する。さらに機械が発明されて分業はますます高度化し、「労働生産力の果てしない増大」がもたらされるようになる。その結果、社会の余剰生産物は飛躍的に増加し、それとともに富者と貧者とは階級的に分離した。同時に、「社会の内部で、富はその所有者が手を下すことなしに、他人の労働によって再生産されるという物質を獲得した。」⁽⁵⁾ 富はいまや生産資本に転化して、それ自体の「所得」を要求する。こうして富者は資本家となり、貧者は労働者階級を構成する。資本が蓄積・集中され、生産力はいっそう増大する。生産力の増大はとうぜん市場の拡大を要求し、「生産者はかれの市場を拡張するというさし当りのこと以外の関心をもたなくなる。」⁽⁶⁾

しかし、市場拡張の欲求は当然競争の激化を生む。そして、競争に勝つためには生産費の節減をはからねばならない。生産費を節減するためには、新しい機械の導入と分業の一層の組織化によって、原料の節約とともに、何よりも労働力を節約しなければならない。すなわち、「新しい機械が労働の生産力を増大した割合だけ、製造業者は労働者を解雇しなければならない。」⁽⁷⁾ また「大農経

営は……大資本の使用によって、かつては多くの人手の使用によってえた利益を獲得させる。それは人間の労働を節約し容易にする高価な道具の使用を導入し……ついには日雇農の存在を無用のものとする。」⁽⁸⁾ このようにして、「機械の改良と人間労働の節約は、直接的に国民の消費者数の減少に貢献する。なぜなら、滅亡させられる労働者はすべて消費者であつたから。」⁽⁹⁾

以上のように、機械の導入は過剰労働力を生み、労働者階級の所得を低下させて消費を減退させ、生産物の販路を縮小せしめる。国内市場のふさがりを打破するために、産業はその販路を外国に求める。しかし、事態の本質には変化はない。いな、むしろこの国際的商業戦はいよいよ激烈となり、産業はより一層の生産費切下げと大量生産をよぎなくされることによって、資本と労働、生産と消費の不均衡はますます拡大する。ここに、生産の無制限増大と消費の全般的縮小に基づく一般的過剰生産恐慌が発生する。

要するにシスモンディは、資本制社会における恐慌発生のプロセスを、生産資本の循環と労働人口の需給の視角から、次のようなシェーマによって、理論的、実証的に明らかにするのである。資本蓄積——生産力増大——競争激化——機械による生産費節約——労働力需要の減少——相対的過剰人口の増大——国民所得の低下——有効需要の減退——販路の閉塞——生産過剰——恐慌。

この論証をふまえてシスモンディは、セー、リカードウを念頭におきながら、次のように古典経済学を批判する。「消費をいつでも限らない生産物を消化することのできる限界のない力と想像することとは、大部分の近代経済学者がおちいつている大きなあやまりである。かれらは、国民に生産を、新機械の発明を、かれらの労働の改善を奨励し、その年に生産される生産物の量が、つねに前年度のそれを超過することを奨励してやまない。」⁽¹⁰⁾

それでは、一般過剰生産の恐慌を回避して、国民の最大多数に物質的福祉を保証するにはどうすればよいか。

三、政策論

資本主義社会に発生する恐慌は、シスモンディにとって、事物の自然的進行に反するものであり、「生産と消費の均衡」こそが経済社会に予定された姿であった。すなわち、「事物の自然的進行においては、富の増大は所得の増大をもたらし、所得の増大は消費の増大を、ついで再生産のための労働の増大を、人口の増大とともに、もたらし、最後に、この新たな労働は順次に富を増加させるであろう。」⁽¹¹⁾

「地上への幸福の伝播は神の目的であった」とみるシスモンディは、暗黒は事物の偽りの姿であり、光明こそが真の姿なのだと考える。そうだとすれば、このおびただしい貧者階級の窮乏は、いかなる理由によって存続するのか。それは「事物の自然的進行」に反する「時宜を失した方策」によるものだ、とシスモンディは答える。「富の増大と資本の蓄積」を唯一の目的としてきたこれまでの経済学、この経済学を盲信してきた政府の政策がそれである。恐慌が人間的な政策のあやまりに基づくものとすれば、それは正しい政策によって除去されうるはずである。かれはこの点でスミスとの見解の相違を意識する。「アダム・スミスは、国富の増大に関係のあるすべてについて、政府の干渉を絶えずしりぞけたが、われわれはしばしばそれを要請した。」⁽¹²⁾ ではシスモンディが要請した政府の干渉とは何か。

農業についていえば、かれは、耕地の集中を防止し、労働と所有権の結合をはかるために、家長的農業経営、すなわち自作自営の小農民を維持するための立法措置を講ずることを提唱する。また都市

製造業について、かれは次のことを政策に期待する。「法律が、相続財産の蓄積ではなくて分散をたえず助成すること、雇主にたいして、その労働者といっそう密接に結びつき、かれらをいっそう長期間雇用し、その利潤にかれらに参加させることに、金銭的利益と政策的利益を見いださせること。」⁽¹³⁾

要するにシスモンディは、農業においても工業においても、小経営ないしは小営業のなかに、「生産と消費の均衡」と「最大多数の人々の物質的福祉の実現」を夢みたのである。かれがロマン主義者とよばれ、小市民的社会主義者とみられるのは、まさにこの理由によるものである。

しかしながら、かれは単なるロマン主義者ではない。なぜならかれは、歴史の進行を阻止することの愚かさを知っていたから、「国民的發展はあらゆる方面に自然に進行する。それを阻止することはほとんどいつでも無謀である。」⁽¹⁴⁾ ただかれは、「それを促進させることもやはり危険である」と主張することを忘れなかっただけである。

もちろん、かれは社会主義者ではない。かれは古典経済学を批判したが、しかしかれは、恐慌を資本主義の本質的矛盾の表われとは見ず、体制のわく内での経済の自然的な均衡回復の可能性を疑わなかった。そのかぎりでは、かれは資本主義体制を否定しようとするものではない。それゆえ、かれの古典経済学批判も、結局は同じ陣営内での同志争いにすぎなかったのである。

四、シスモンディの影響

イギリスの古典経済学、とくにスミス経済学の強い影響下にありながらも、なおこれを理論的・倫理的に批判し、かつ、経済問題に対する国家権力の関与を重視したシスモンディの経済学は、ほぼ同様の問題意識をもつドイツ歴史学派の人々、わけでもヒルデブラント (Bruno Hildebrand, 1812~78) ロッシャー (Wilhelm Röcher, 1817~94)、クニース (Karl Knies, 1821~98) および

モラー (Gustav von Schmoller, 1838~1917) の注目するところとなった。しかし、シスモン
 デイの影響はフランスにおいてより直接的である。とくに『キリスト教経済学』 (Economie Pol
 itique Chrétienne, 3 vols, 1834) の著者であり、またフランスにおける社会的カトリシス
 ムの先駆者であるヴィルヌーヴ・バルジュモン (Villeneuve-Barbeumont) に対して、人間中心
 主義の倫理的観点に立つシスモンデイの経済学は、きわめて大きな影響をあたえた。また、貧困問題
 の重視によって、シスモンデイは多くの社会主義者たち、とりわけルイ・ブラン (Louis Blanc,
 1811~82)、アンファンタン (B.-P. Elfantin, 1796~1864) らのサン・シモン派、およびロー
 トベルトゥス (J.K. Robertus, 1805~1875) にきわめて大きな影響を残した。
 なお、一九世紀末におけるロシアのナロードニキに対するシスモンデイの影響は、レーニン (D.I
 Lenin, 1870~1939) の激しい反発をよび起すほどのものであった。

註

- (1) Nouveaux Principes d'économie politique, t.I, 3^e éd., Genève et Paris, 1951,
 p.30. 菅間正朔訳『経済学新原理』(上)一九四九年、三〇ページ
- (2) Ibid., p.26. 同書、三六九ページ。
- (3) Ibid., p.135. 同書、一五一ページ
- (4) Ibid., p.38. 同書、四六ページ
- (5) Ibid., p.86. 同書、九九ページ
- (6) Ibid., p.259. 同書、二五九ページ

- (7) Ibid., p. 261. 同書、二六八ページ
- (8) Ibid., p. 188~189. 同書、二〇二ページ
- (9) N.P. t. p. 218. 邦訳(下)二四四ページ
- (10) N.P. t. p. 82. 邦訳(上)九六ページ
- (11) N.P. t. p. 139. 邦訳(下)二一六ページ
- (12) Ibid., p. 225. 同書、二四四~二五〇ページ
- (13) Ibid., p. 244. 同書、三〇一ページ
- (14) N.P. t. p. 330. 邦訳(上)三四〇ページ

第五節 フーリエの協同社会思想

一、フーリエの課題

フーリエの課題は、まず第一に、かれが「文明社会」あるいは「文明」とよぶ資本主義経済を徹底的に批判し、ついで宇宙を支配する普遍的運動法則を発見し、さらにこの法則にもとづいて、「文明社会」をのりこえたところに、新しい調和社会を建設することである。

フーリエのこのような問題意識は、自由競争にもとづく富の無限の蓄積と、それにもとづく市民社会の永続的繁栄を期待する、古典派経済学の楽観的確信とは、あきらかに無縁である。経済学者たちが主張する産業主義は、その意図に反して一般的貧困と無秩序を生み出している、とフーリエはするどく反発するのである。「産業主義は最近の科学的幻想である。それはむやみに生産する狂人である。」

それゆえ、工業地帯では、この種の進歩に無関心な地方よりも、おそらくはるかに多くの乞食であふれているのをわれわれは見いだす。」⁽¹⁾ こうして「文明人は、差し迫った飢饉で死なないかわりに窮乏のためにゆっくりと餓死するか、不健康な食物を食べるのをよぎなくされて、当然に餓死するか、あるいは労働でたぐたになつたり、やむなく危険な仕事に従事しながら、過労で熱病や病弱におかされて突然に餓死する。要するに文明人はいつでも飢饉で死んでゆくのである。」⁽²⁾ それゆえ、

「産業制度は真の地獄である。」⁽³⁾

では文明社会に、このような貧困と混乱をもたらしている根本的な原因は何か。これについて、フーリエは、経済的原因と道德的原因をあげ、そして経済的原因として商業の横暴、生産組織の不備、分配の不合理性を指摘する。

(一) まず生産組織の不備による生産性の低さは、文明社会の貧困と衰弱の最大の原因である。生産は現在の社会では無政府状態である。一方では過度に集中した少数の大規模生産があるかとおもうと、他方では多数の分散、零細規模の生産形態がみられる。生産部門のなかで、もともと重要な農業についてみると、そこでは過度の細分化がみられ、そのことによって農業生産は極度に低められている。

フランスの農業は固有の土地所有制度によって、極端な零細経営であるが、しかもそれに加えて、

「ひとりの農民がある土地に小麦とブドウ、キャベツとカブラ、大麻とジャガイモをまぜこぜに耕作」⁽⁴⁾

することによって、その零細性と分散性をいっそう強めつつ、生産の低下をまねいている。工業部門においても、一方では小資本による零細経営の広汎な存在、他方では大資本による大規模経営の存在によって、文明社会は産業的均衡を喪失している状態にある。そのほか、生産をさまたげているものに、文明社会に寄生するおびただしい不生産者の存在があげられる。かれらは次の三つのグループに

大別される。すなわち(a)婦人、子供、奉公人などの家庭的寄生者 (Parasites domestiques)。(b)陸海軍人、官公吏、粗悪品をつくる製造業者、大部分の商人、これら商人にあやつられる運輸業者からなる社会的寄生者 (Parasites sociaux)。(c)失業者、法律家、経済学者、有閑有、詐欺師、売春婦、浮浪者、乞食、すり、その他の犯罪者などからなる従属的寄生者 (Parasites accessoires) がそれである。(5) 要するに集中 (Concentration) と零細 (morcellement)、農業や製造業の内部における、また両部門相互間における産業的引力 (attraction industrielle) あるいは産業的均衡 (équilibre industriel) の欠如、およびおびただしい不生産的寄生者群の存在が、経済的貧困と社会的混乱の最大の原因である。ではこの原因を取り除いて、生産組織を整備し、また不生産者を一掃して、生産を拡大するためにはどうしたらよいか。これこそフリーエの課題である。

(二) つぎに商業の横暴について、フリーエはいたるところでその事実をあげて、はげしい非難攻撃のことはをあげせる。たとえばこうである。「商業の機構は常識に反して構成されている。それは社会全体を、寄生者や非生産者の代理人である、商人階級に従属させている。あらゆる本質的階級、すなわち所有者、耕作者、製造業者、および政府でさえも、従属的階級である商人階級によって支配されている状態である。この商人階級は、かれらの配下であり、かれらの委任された代理人なのであって、ときには解任されたり、責任を負わされたりすべきものである。それにもかかわらず、商人階級はあらゆる流通機関を思いのままに支配したり阻害したりしている。」(6) このような商業の支配体制すなわち、「商業的封建制度」 (la féodalité mercantile) を生み出したものこそは、経済学者たちが首唱するあの自由競争の原理にほかならない。そうだとすれば、新しい社会原理にしたがっ

て、かかる寄生者階級を排除し、流通の合理化をはからなければならないことは当然である。

(三) 貧困の第三の原因は、文明社会における私有財産制度の在り方にかかっている。私的所有は個人的利益の満足をもとめるだけで、一般的利益を考慮するところがない。いまや「たんなる所有権は、個人的空想を満足させるために、一般的利益を勝手に邪魔する権利となっている。」⁽⁷⁾ それでは、私有財産制を廃止すべきであろうか。そうであってはならない。なぜなら、「所有の精神は、文明人を奮起させるのに必要な最強の力であり、ひとは誇張することなしに、所有者の労働は、農奴や賃金労働者の労働にくらべて、二倍の生産をあげると見積ることができる」⁽⁸⁾ からである。こうしてフリーエは私有財産制を完全に廃止するのではなしに、財産相続の廃止によって、これを修正する必要があると主張する。なぜなら、「文明状態はごく少数の人々に相続財産の集中を強行しつつ、他方では憎悪の素因をつくりだしている」⁽⁹⁾ からである。

(四) 最後に、「文明社会」における貧困と混乱は、現在の道德的無秩序によって、いっそう悪化し、その解決をいっそう困難ならしめている、とフリーエは説く。文明社会にあつては、利己主義によって人々は相互に孤立している。そこでは個々人の間や階級間、あるいは世代や両性間に、深刻な対立と不和がみられる。そして、「こうした利己主義は商業精神の進歩によって増長している。」⁽¹⁰⁾ それゆえ、文明社会に貧困と混乱を強制している道德的原因是、究極において商業と結びついていることになる。

要するにフリーエは、文明社会における生産・流通・分配にわたる経済機構の全面的改革とともに、商業主義に毒された文明社会の道德をも根本的に改革することによって、統一と調和にみちた一つの協同社会 (Association) を地上に建設しようともくろむのである。かれにとって「協同社会は

人間の運命である。」⁽¹¹⁾

二、社会運動の法則

貧困と混乱という「文明社会」の弊害を除去して、新しい調和社会をつくるためには、何よりもまず社会運動の法則を確認し、この法則にそった処置をとらなければならない。では社会運動の法則とはいかなるものか。

一八〇八年に公刊された処女作『四運動の理論』(Théorie des quatre Mouvements)において、フリーエは、かれの宇宙観を予言者の確信をもって語り、これとの関連において、かれの発見にかかると誇る社会運動の法則を提示し、さらに大著『家庭的農業協同組合論』(Traité de l'association domestique agricole, 1922. のちに『宇宙統一の理論』Théorie de l'unité universelleと改題)『産業的社團的新世界』(Le nouveau monde industriel et sociétaire, 1829)においてもこれを展開している。ここではかれの翻訳不可能な妖術者の用語をできるだけさけて、その宇宙観と社会運動の法則を要約的に示してみたい。

フリーエによれば、宇宙には四つの運動が存在する。それは社会的運動、動物的運動、有機的運動および物質的運動である。ニュートンは万有引力の法則のもとに物質的運動を説明することに成功したが、フリーエ自身は、社会的運動を、「情念引力」(attraction passionnée)の名のもとに、とらえるのに成功した、と主張する。あらゆる社会的混乱や貧困は、この法則に無知であったことから生じたのであって、もしもこの法則に即して新しい社会を構築するならば、「文明社会」にみられるいっさいの「悪」は消滅するであろう。では情念引力とは何か。それは神が人間に、協同と調和の社会をつくって幸福になるように、与えた本能である。それゆえ「情念は神の魂である。」⁽¹²⁾そして

「引力とは自然の法則」であり「神の通弁である。」神はこれによって人間と物質とを支配する。それゆえ、「情念引力は自然によってあたえられた衝動」であり、したがって「これを研究することは」とりもなおさず「人間、宇宙および神を研究することである。」⁽¹³⁾ フーリエによれば、人間の情念には十二種ある。これはさらに三つの群に大別される。第一群の情念は享樂 (Juke) とよばれ、これには味覚・触覚・視覚・聴覚および嗅覚の五つの感覚的情念が含まれる。この情念は自己中心的である。第二群は集団 (Groupe) の情念で、これには友情・野心・慈愛および家族愛の四つの情念が含まれる。この情念は他人に關係する。第三群は連系 (series) の情念とよばれ、これには陰謀と對抗を好む秘密党派本能 (Cabaliste)、変化と対照を好む輕薄本能 (Papillonne) および熱狂と混乱を好む混乱本能 (Composite) が数えられる。この情念は社会的である。⁽¹⁴⁾ 神によってあたえられた以上の十二の情念が満足されたとき、ここに普遍的統一と調和的協同の理想社会、あるいは社会的秩序 (l'ordre sociétaire) が成立する。

フーリエはこのように、人間の十二の情念がすべて満足される社会を夢想するのであるが、同時にそのような調和主義 (Harmonisme) の実現の可能性を、人類社会の進化の過程を示すことによって論証しようとする。かれは人類の全生涯を八万年と計算し、これを三六時代に区画するのであるが、第一時代は次のように三大別八時代に区分される。

産業発生前期

分裂、矛盾の産業期

- | | |
|-----|--------------|
| (一) | 原始時代 |
| (二) | 野蠻時代 |
| (三) | 家長時代 (小規模産業) |
| (四) | 未開時代 (中規模産業) |

(五) 文明時代（大規模産業）

(六) 保証主義時代（半協同社会）

社团的引力的産業期

(七) 連合主義時代（單純協同社会）

(八) 調和主義時代（複合協同社会）⁽¹⁵⁾

以上の時代区分のうち、現在、人類は(五)文明時代、すなわち分裂、矛盾の産業（*Industrie*

morcelée répugnante）から社团的引力的産業（*Industrie sociétaire attrayante*）

へまさに突入しようとする段階に位置する。未来社会においては、さきにのべた人間の十二の情念が完全に満足される。それゆえ、人間の十二の情念の満足をはかることが理想社会に到達するただ一つの道である。このようにフリーエは、貧困と混乱を生み出している文明社会の生産・流通・分配にわたる全経済機構を根本的に改革しようと企てる。ファランジュという、フリーエの空想の産物は、じつはこうしたかれの理想社会を実現するための、きわめて現実的な手段であったのである。

三、ファランジュ

ファランジュ（*Phalange*）は、神によって人間にあたえられた十二の情念を満足させる調和社会の、いわば基礎細胞である。それは、ファランステール（*Phalanstère*）と称する共同宿舍を中心^に、一、八〇〇〜二、〇〇〇人の老若男女によって構成される、生産と消費にわたる生活協同体である。そこでは農業を主産業とし、共同生活に必要な物品をつくる製造工場を付属施設としてもつ。ここでは、生産と消費の全生活が、人間の十二の情念をすべて満足するように組織化される。

フリーエはファランジュやファランステールについて、驚くべき熱心さで詳細な説明をおこなっているが、ここではすべて省略する。ただ、そうすることによって、結局かれが、何をのぞんでいたかを、

シャルル・ジイドの見解にしたがって、箇条書きにして示し、これによってフリーエの協同社会思想を特徴づけることにする。

- (一) 家事生活に固有の浪費をさけるための、大規模の協同組織による消費の合理化。
 - (二) 富の分配様式よりもむしろその生産様式を改革することへの執着。
 - (三) 工業生産よりもむしろ農業生産への愛着。
 - (四) もっぱら園芸や養樹に意を用いながら、農業を改革すること。
 - (五) 大規模生産以外の生産様式を採用しないこと。
 - (六) 分業をその極限までおし進めること。
 - (七) 過度の専門化による単調を破るために、仕事を变化、交替させること。
 - (八) 大規模の自治的協同組織体の設立によって、すべての仲介人を廃止すること。⁽¹⁶⁾
- ファランジュの設計図が詳細をきわめればきわめるほど、ひとはかれを「空想家」の名のもとに一笑に付そうとする。だがファランジュの構想におけるかれの真の意図が以上のとおりだとすれば、それはなお、歴史的、現代的諸側面から、じゅうぶん検討に値するものとおもわれる。

四 フリーエの影響

フリーエの晩年から、コンデラン (Victore Considérant 1808~1893) を中心とするフリーエ派の活動がはじまる。フリーエ派は、機関紙『ル・ファランステール』(一八三二年発刊) や『ラ・ファランジュ』(一八三六年) および『平和的民主主義』(一八四三年) などによってフリーエ主義の宣伝活動を行ない、しだいに勢力を拡大して、一八四八年には三、七〇〇のメンバーを数えるまでになった。かれらのうちの幾人かは、師の遺志をついで、ファランジュの建設を企てた。

一八五二年に、コンシデランはアメリカのテキサスでそれを企図したが、結局、失敗して一八七〇年に帰国した、しかし、アメリカではフリーエ主義の影響のもとに、三〇あまりのファランステールの建設の試みがなされた。有名なものに「北米ファランクス」(The North America Phalanx, 1843~54)、「ブルック農場ファランクス」(Brook Farm Phalanx, 1844~47)および「ウイスクンシン・ファランクス」(The Wisconsin Phalanx, 1844~50)がある。ゴダン(André Godin)も一八五九年、北仏のギーズにファミリステール(Familistère)を建設し、一八八八年には協同組合になった。そのほかフランス国内でいくつかのファランステールが建設されたが、長つづきしなかったといわれる。⁽¹⁷⁾

社会主義思想史上、フリーエの影響は広汎である。一九世紀の著名な社会主義者でかれの影響をまぬがれたものはないといってよい。たとえば、ペクール(Constantin Pecqueur, 1801~1887)・ワイトリング(Wilhelm Weitling, 1808~1871)・ブルードン・ルイ・ブランのほか、マルクスやエンゲルスもフリーエの思想を何らかの形で受けついだ。⁽¹⁸⁾

註

- (1) Le nouveau monde industriel et sociétaire
⊗ (Oeuvres complètes de Ch. Fourier t. VI, Paris, 1845) p. 30
- (2) Ibid., p. 30
- (3) Théories de l'unité universelle, t. I (Oeuvres complètes t. IV, Paris, 1843) p. 149.

- (4) Unité universelle, t. II (Oeuvres complètes, t. IV, Paris, 1841) p.482.
- (5) Ibid., pp.174~179
- (6) Théorie des quatre mouvements (Oeuvres complètes, t. I, Paris, 1841) p.332
- (7) Unité universelle, t. II p.309
- (8) Ibid., p.171
- (9) Unité universelle, t. IV (Oeuvres complètes, t. V, Paris, 1841) p.457
- (10) Unité universelle, t. II (Oeuvres complètes, t. III, Paris, 1841) p.166
- (11) Unité universelle, t. I, p.12
- (12) Unité universelle, t. IV, p.120
- (13) Nouveau monde, pp.44, 3, 47, 26.
- (14) Ibid., pp.47~51
- (15) Ibid., p. II.
- (16) Charles Fourier, Pages choisies, Introduction par Charles Gide, Paris, 1932, pp. XXXIX~XLIV.
- (17) Cf. Emile Poulat, Les cahiers manuscrits de Fourier, Paris, 1957, Introduction par Henri Desroche, pp.6~36.
- (18) Cf. Hubert Bourgin, Fourier, contribution à l'étude du socialisme, français, Paris, 1905, pp.55 suiv.

第六節 プルードンの貧困の経済学

一、プルードンの課題

プルードンのおびただしい著書を一貫するテーマは貧困の問題であった。没落農民の子として生まれ、労働者階級のなかで育ち、自ら貧困のうちに生涯を閉じたかれの眼にとらえられた貧困は、もちろん抽象的な貧困一般ではない。それは、産業革命の進行とともに高まる手工業者や小農民の没落の嘆きを、あるいは増大する工場労働者の苦痛の叫びを表現する貧困である。シスモンディによって提起された問題を、かれは真正面から取り上げようとする。プルードンが一八四〇年に、社会科学にかんする最初の著書において投げる次の疑問こそ、かれの終生の課題にほかならない。

「なぜ社会にはかくも多くの苦痛と貧困があるのか？人間は永遠に不幸であらねばならないのだろうか？」⁽¹⁾ この疑問をとくために、かれは聖書につづいてスミスを読み、ヘーゲル（G. F. W. Hegel, 1770~1831）を学んだ。その結果、かれが到達した基本理念は、正義、平等、自由であった。この理念的視角から、かれは手工業者と小商人を、あるいは農民と労働者を、貧困から解放しようと企てる。解放のいとぐちは、市民社会の基礎にもとめられる。「財産とは何か」（*Qu'est-ce que la propriété ?*）、この疑問を提起しながら、かれは市民社会を構成する物的、法的基礎のなかに貧困の原因を探究する。冒頭においてプルードンは、早くもこう結論する。「それは盗みだ」と。

フランス革命によって市民社会の基礎にすえられた私有財産制は、ここに、かつてないほど激烈な、しかも内在的な批判にさらされることになる。「財産とは何か」は、市民社会の固有の矛盾を思想的に表現したものであり、その意味で、革命後のフランス経済が、一つの転機にさしかかったことを、

はつきりと示すものである。シェース（*H.-J. Stoyès*, 1748~1836）の『第三階級とは何か』（一七八九年）が、絶体王政への告訴状であったとすれば、ブルードンの『財産とは何か』は、まさにブルジョワ社会に対する挑戦状であった。

『財産とは何か』によって、市民社会の物的基礎を批判したブルードンは、一八四六年の『経済的矛盾の体系—貧困の哲学』（*Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère*）によって、古典経済学と社会主義とに対決しつつ、新しい経済学を樹立しようと企てる。しかし、かれのこの試みは、ただちにマルクス（*K. Marx*, 1818~1883）の皮肉にみちた『哲学の貧困』（*Misère de la philosophie*, 1847）によって破壊的攻撃を受ける。さらにまた、一八四〇年以降における産業革命の本格化と一八四八年の二月革命を契機として、フランスの経済と政治は新しい局面を迎える。多様を極めた「革命後のフランス経済学」は、そしてブルードン自身が、装いを新たに、これらの課題に立ち向かって行くであろう。それゆえ、『財産とは何か』が「革命後のフランス経済」の矛盾を表現するものであるとすれば、『経済的矛盾の体系』は、まさに「革命後のフランス経済学」の到達点を示すものといえよう。

二 私的財産論

『財産とは何か』においてブルードンが確立しようとしたのは、市民社会に代わるべき「絶体的平等の体制」であった。かれは、フランス革命の遺産の一つであるこの「平等」の理念に立って、逆に革命の成果を吟味することから議論を展開する。

平等の理念はフランス革命によって実現されただろうか。「ノン／＼」とブルードンは答える。「人権宣言」は特定の市民の、特定の法の前の平等をうたったにすぎない。なるほど封建的特権は消滅

した。しかし、フランス革命は、人間に対する人間の支配の社会的基礎である私有財産制に手をふれるどころか、これを擁護することによって、新たな不平等の根拠である市民的特権を生み出した。それゆえなすべきことは、フランス革命がなしえなかった真の革命を遂行すること、財産に基づく不平等を撤廃することである。そのためには、財産の私有が法的、社会的に何らの根拠もないこと、「それは盗みである」ことを論証する必要がある。⁽²⁾

このような問題意識のもとに、プルドンは、財産の私有を自然権、先有権、労働権によって基礎づけようとする諸見解に対して、次々に反論を加える。かれによれば、これらの諸見解は、何ら私有財産制を根拠づけるものではなく、かえって財産が、強奪と暴力によってのみ成立したことを論証するものである。⁽³⁾ かれの主張によれば、「人格の品位において平等な人間、法の前に平等な人間は、その境遇においても平等でなければならない。」⁽⁴⁾

こうした「平等」の理念に立ってプルドンは、強奪の結果である財産を私有する資本家が、何らの財産も所有しない労働者の犠牲にいますます富を蓄積し、労働者は低賃金と高物価とによってなおいっそう貧困を強制されているといった、市民社会の矛盾を指摘してゆく。⁽⁵⁾ プルドンは、資本家の専横の基礎になっているものとして、特に「不労所得権」(le droit de gain)をあげ、これに対して攻撃を集中する。不労所得権とは、働かずに富者のふところに入りこむいっさいの利得、すなわち小作料、家賃、地代、利子、利潤などを収得する権力である。

では、このような「盗み」が行なわれうるのはどうしてか。プルドンは、このような余剰が生みだされる根源を「集合力」(la force collective)に求める。集合力とは、労働者の分業と協業とによって生じる力であり、この力は労働生産性の増大となって表われる。そして、かれによれば、

このような生産性の増大は、資本家の知識や能力がこれに作用している場合も含めて、個人の力によるものではなくて、集団すなわち社会の力によるものである。集合力がもとと社会によって生み出されたものだとなれば、これによって獲得された富は財産を私有化することは許されない。社会が生み出したものは社会に帰属されねばならない。

しかしながら、このように主張することによってブルードンは、財産の共有を主張しようとするのではない。かれにとって「共有」とは悪の共有を意味する。なぜならそれは、単に物財のみならず、人格と意志をも規制するからである。つまり共有は専制と抑圧の力に容易に転化する。「財産が強者による弱者の搾取であるとすれば、共有は弱者による強者の搾取である。」⁽⁶⁾

では財産の私有と共有の両方に反対しつつ、すべての人々に平等を保証する方法は何か、かれは私有と共有の間に「所持」(possession)という概念をもちこむ。ブルードンによれば、共有はテーズである、所有はアンチテーズ、そして所持はサンテーズである。この所持によって、「人類の眞の共同社会」⁽⁷⁾が誕生するとかれはいう。しかし、「所持」とは要するに「所有権」から「不労所得権」を除いたものにすぎない。だがブルードンはこう主張する。「個人的所持は社会生活の条件である。……所持を保全しながら所有を廃止せよ。ただこれだけの原理の修正によって、諸君は法律、政府、経済、諸制度のいっさいを変えるだろう。諸君は地上の悪を除き去るのだ。」⁽⁸⁾

財産を所有しないものに「個人的所持」を確保しようと望んだとき、ブルードンはプチ・ブルジョワのレッテルを甘受しなければならなくなるであろう。

三、経済矛盾論

『経済的矛盾の体系』においてブルードンは、産業革命の進行にともなって深まる資本主義経済の

矛盾を提示しながら、これを克服する道を見いだそうとする。このことはかれにとって、リカードウ、セーラの古典経済学とフリーエ (F. M. O. Fourier, 1772~1837)、ルイ・ブラン (J. J. O. L. Blanc, 1811~1882) らの社会主義思想を批判しつつ、これらを綜合する新しい経済学を樹立することを意味する。しかし、このような、マルクスのそれを思わせる問題意識にもかかわらず、ブルードンは、実証科学としての特質を経済学からはぎとり、これを形而上学に解消することによって、問題の解決方法をきわめて特殊なものにした。『経済的矛盾の体系』の冒頭において、かれは経済学を次のように理解する。

「経済学はわたくしにとって、形而上学の対象であり、現実である……労働の法則や交換の法則に没頭するものは誰でも、真に、しかもとりわけて形而上学者である……人間の仕事は神のみわざをひきつぐ。……それゆえ経済学は必然的に、しかも同時に、観念の理論であるとともに自然神学であり、また心理学である。」⁽⁹⁾

ブルードンによれば、神とは「正義」であり、正義の道德的表現は「平等」、その科学的表現は「均衡」である。そして平等と均衡のあるところに「自由」が成立する。経済学が「人間の仕事」として「神のみわざをひきつぐ」ものだとするれば、その主題は経済社会における「均衡の法則」を見いだすことである。均衡は二律反背あるいは矛盾を綜合するものであるから、「均衡の法則」を発見することは、神の正義を地上に実現すること、したがってまた人類の進歩をはかることにほかならない。いいかえれば、「二律反背は自然における均衡の原理である。したがって二律反背は人類における進歩と均衡の原理である。経済学の対象、それは正義である。」⁽¹⁰⁾

さて、均衡の法則を見いだすためには「交換の法則」を、交換の法則を見いだすためには「価値の

法則」を発見しなければならない。ブルードンによれば、効用価値と交換価値との間には二律背反が存在する。これを綜合するものは「構成された価値」(la valeur constituée)である。構成された価値とは、ある商品を生産するのに必要な労働時間によって構成された価値である。この価値を基準にすることによって、はじめて生産物の平等な交換が行なわれ、正義になった均衡関係が経済社会に成立する。たとえば、労働者の賃金が、かれらの必要とするすべての物を生産するのに要する労働時間によって正確に決定されるならば、労働力と賃金、賃金と生産物との平等な交換が行なわれ、ここに均衡が成立する。⁽¹¹⁾

このような論理に基づいてブルードンは、分業・機械・競争・独占……といった諸局面における資本主義の「経済的矛盾」を次々に論証する。これらの矛盾の様相は、たとえば次のとおりである。

「労働者と資本家とは粗暴な闘争にいたずらに疲れ果てている。細分化した分業・機械・競争および独占は、プロレタリアートをいたずらに殺害している。政府の不正行為と租税の虚偽、特権の陰謀、信用のごまかし、所有者の横暴と共産主義の幻想は、人民に対して屈従、墮落および失望を倍加している。人類の二輪馬車は、かつて止まりも退きもしないで、その宿命的な道を走っている。」⁽¹²⁾

このような経済社会の矛盾に対して、古典経済学も社会主義も無力である。「経済学は利己主義の神聖化にかたむき、社会主義は共有の称揚に心を向けている」⁽¹³⁾ だけである。だがブルードンの眼には、こうした矛盾のうちにも、「均衡を支配する神が平静な威厳をもって前進する」⁽¹⁴⁾ のが見える。かれは経済社会の矛盾のなかに均衡—交換の法則を見だし、さらにこれに基づいて連帯主義に到達する。

「われわれの市民的、商業的社会の古い形態を解消し、すべての人々に能率と進歩と正義の条件を

満足させるところの保証の体系は、交換の法則、連帶性（MUTUALITE）の理論でなければならない。」⁽¹⁵⁾
「連帶性の理論、すなわち自然的交換の理論は……集團的存在の観点からすれば、所有と共有の二つの思想を綜合したものである。」⁽¹⁶⁾

『財産とは何か』における「所持」の理論が、ここで「連帶性の理論」と結合する。またかれの無政府主義の思想、ならびに一八四八年以降に積極に展開される交換銀行制度の構想や連邦主義の思想は、こうしてプルードンの正義＝平等＝均衡＝交換＝連帶性という、一連の理念に基づくものであることが理解される。この構想のうちにかれは、貧困の克服を夢想するのである。

四、プルードンの影響

シャルル・リストが、ジイドとの共著において、「一八四八年以降におけるプルードンの思想的影響をたどることはきわめて困難である」⁽¹⁷⁾とのべているように、プルードンの後世への影響を正しく評価することはほとんど不可能であるといつてよい。マルクスに対しては、ネガティヴな意味での影響力の大きさが推察されるが、それを明確にすることは、現在の研究水準ではなしえない。これはマルクスの思想形成史のなかで評価されるべき問題である。しかし、ロシアの無政府主義者バクーニン（M.A. Bakounin, 1814-1876）に対しては、バクーニン自身が語っているように、きわめて大きな影響をおよぼした。しかし、プルードンの影響は、特定の思想家に対するよりも、アレヴィのいうように、全体としてフランス社会主義に隠然たる影響をあたえたと考えられる。「フランス社会主義の眞の鼓吹者は、マルクスではなくて、個人主義者プルードンである。」⁽¹⁸⁾最近における『プルードン全集』（一九二三～一九六一年）全二十一巻の完結は、プルードンの影響力が、少なくともフランスにおいては、なお今日までおよんでいることを示すものである。

- (1) Qu'est-ce que la propriété ? 1840, Oeuvres complètes, éd. M. Augé-Laribé, Paris, 1926, p.134.
- (2) Ibid., chap. I.
- (3) Ibid., chap. II, III.
- (4) Deuxième Mémoire sur la propriété, 1841, éd. M. Augé-Laribé, Paris, 1938, p.22.
- (5) Ibid., chap. IV.
- (6) Qu'est-ce que la propriété ? p.326.
- (7) Ibid., p.325.
- (8) Ibid., pp.345~346.
- (9) Système des contradictions économiques, éd. R. Picard, 1923, t. I, p.66.
- (10) Contradictions, t. II, p.397.
- (11) Contradictions, t. I, chap. II.
- (12) Contradictions, t. II, p.83.
- (13) Contradictions, t. I, p.68.
- (14) Contradictions, t. II, p.83.
- (15) Ibid., p.410.
- (16) Ibid., p.411.

- (7) Ch. Gide et Ch. Rist, Histoire des doctrines économiques, 4^e éd, Paris, 1922, p. 347. 宮川貞一郎訳『経済学説史』(上)一九三六年、四五七ページ。
- (8) Elie Halévy, Histoire du socialisme européen, Paris, 1948, p. 294.

第二章 サン・シモンの農業思想

課 題

資本主義經濟の發展は、一面からみれば、「産業化」(industrialization)の過程であるといえる。このばあい「産業化」とは、農工商の全産業部門が、最大限の利潤追求という資本主義經濟の目標に即して、合理化される過程であると理解される。しかしながら、明治以降における日本資本主義の展開は、このような意味での「産業化」ではなくして、むしろ「工業化」の過程であるとみることができるとはいってももちろん論者は農業における資本主義の發展を否定するものではない。日本農業もまた農産物の商品化を拡大することによって、資本主義經濟の原則にしたがいながら展開してきたのであった。けれども農業においては、工業におけるような資本主義的利潤、あるいはシュムペーターの概念を用いれば、企業者利潤は、たとえそこにもまた企業者の機能の展開が認められるとしても、なお簿記的、具体的形態としては、一般に顕在化しなかったのである。つまり、工業におけると同様の企業的な農業は、わが国にはこれまで成立しなかったのである。しかし、昭和三十五年以降における經濟の高度成長の過程において、一方では農工間の生産性ならびに所得格差の拡大をあらわにしながらも、他方では用語の本来的な意味での企業的農業が、なお散発的であるとはいえ、全国各地において本格的に展開されてきている。もちろん、企業的農業といっても、家族労働力を根幹とするものであることには変わりはない。しかし、それを資本主義的企業ではないとすることは、アメリカのファミリー・ファームを資本主義農業ではないとすると同様、明らかにあやまりであろう。

そうだとすれば、industrialization という用語の一面的意味における「工業化」ではなしに、用語の真の意味での「産業化」が、これからの日本資本主義に課せられた重要な課題であるといわなければならない。自給的色彩を濃厚にもった日本農業を企業的農業に転換せしめたときに、日本資本主義は、はじめて全産業を、文字通りの意味における「産業化」の軌道にのせたことになるであろう。したがって、日本農業をいかにして企業的農業に転換させるかは、今後における為政者、農業者および農業経済学者の課題であるといつてよからう。

ひとりの農業経済学者として、論者もまたこの課題に深い関心をもったものである。論者は、industrialization が一面的に「工業化」とし表われたこと自体、日本資本主義のゆがみを示すものであると考える。いまこそ農業もまた、国民経済における重要な産業部門に偏する industrialization をとげることによって、農工商にわたって均衡のとれた真の「産業社会」(industrial society) を建設するための土台となるべきであろう。

今日、農業経済学者に課せられている以上の課題に対して、サン・シモン (O.-H. de R. Saint-Simon. 1800-1875) の産業思想は、きわめてサジェステイブであり、問題解決になお有効なヴィジョンを提供しているようにおもわれる。サン・シモンは、産業革命がようやく胎動しはじめた王政復古期のフランスにあって、スミス、セー流の産業主義 (industrialisme) を継承し、その基礎のうえに、フランス産業革命の路線を思想的に準備し、さらにその弟子たちは、とりわけ一八三〇年以降、この思想にもとづいてフランスの産業革命を具体的に推進する企業活動を展開したのであった。本章では、サン・シモンが農業の産業化、企業化を、他の産業部門との関連において、どのようにあつづけているか、あるいは、かれが構想する「純粹産業社会」(la société industrielle pure)

のなかで、農業がどのように位置づけられているかを考察することによって、現在の日本農業に課せられている先の問題に対して、ひとつの思想史的アプローチを試みようとするものである。

第一節 産業社会の構想

サン・シモンにとって、科学が理論を意味するとすれば、産業はその応用であり、したがって実践を意味した。科学とともに社会発展の原動力を構成するものとしての産業の重視は、すでにかれのアメリカ従軍時代（一七七九—一七八四年）までさかのぼりうるが、産業の役割が統一的に認識され、強調されるようになるのは、一八一七—一八一年の『産業論』（*L'Industrie*）においてであった。以下、この『産業論』を中心として、この時期におけるサン・シモンの産業社会の構想を明らかにしてみよう。まず、産業が社会の基礎であるというのは、いかなる意味においてであろうか。

サン・シモンはいう、「われわれにとって、社会とは有用な労働に従事する人々の全体であり集団である。われわれはそれ以外の社会を全く想像しえない。」⁽¹⁾「ある国において働いているすべての人々の集合体は、その国の国境内に内蔵されたもろもろの産業社会のすべてを包含する、一大産業社会である。」⁽²⁾このように、サン・シモンにとって社会とは有用な労働によって不断の生産が行なわれている社会、すなわち産業社会（*la société industrielle*）にほかならない。したがって、社会の目的はとうぜん生産である。「有用物の生産は政治社会が提案しうる唯一の合理的、実践的目的である。」⁽³⁾以上のことからつぎのいうことができる。「全社会は産業に基礎を置く。産業は社会存在の唯一の保証であり、あらゆる富およびあらゆる繁栄の唯一の源泉である。産業にとってもっとも好都合な事物の状態は、それゆえ社会にとってもっとも好都合な唯一の状態である。」⁽⁴⁾

産業がなぜ社会の基礎であるかは、以上の引用によって明らかであろう。サン・シモンには産業社会以外の社会を考えることはできないのである。産業の繁栄は同時に社会の繁栄を意味し、産業の完成こそは社会完成の唯一の条件なのである。したがって、ここから、つぎのようにいうことができる。「あらゆる思想およびあらゆる努力が向うべき唯一の目的は、産業に、もつとも、好都合な組織、といふことである」⁽⁵⁾と。ここで思想とはかれのいう「産業思想」(idées industrielles)をさし、努力とはかれが「産業労働」(travaux industriels)あるいは「有用な労働」(travaux utiles)と称するものをさしている。産業思想と産業労働とは相まって、産業にもつとも好都合な組織をつくることを目指さねば、というのがサン・シモンの主張である。そして、産業にもつとも好都合な組織をつくるということは、産業社会―サン・シモンの理想に照らせばアメリカ的な純粹培養型資本主義社会―の完成という目的を達成するための諸条件を完備することを意味する。ともかくサン・シモンの究極目標は産業社会の完成にあり、その当面の課題は、この産業社会に到達するための必要にして不可欠の通過点である産業革命を、フランスにおいて準備し、促進することである。

しかしながら、右の課題に照らして現実のフランス社会をみると、産業社会を完成するための諸条件は、まだまだ不十分である。サン・シモンはフランス産業の現状をつぎのようにみるのである。サン・シモンによれば「フランス革命以前に、産業はそれにふさわしい役割を引き受け、みずから軍旗をかかげて文明の先頭に進むべき十分な確信をもっていなかった。革命の危機がひとたび宣言されるや、平静で穏和な観念が出現しうるためには、もはや余裕がなかったし、また人々はあまりにも動揺し、あまりにも茫然としていた。こんにちでは、もはやこれらの障害はなんら存在せず、国家組織のなかにはいった産業は、とうぜんそこでもっとも強力な活動を行っており、絶好のチャンス

が産業に提供されている。憂慮すべきただ一つのは、それがあまりにも無気力であり、かつ、自分の軍旗よりも他人の軍旗によって指揮されるがままになっている、ということである。」⁽⁶⁾ フランス革命後における産業にあたえられた好都合な状況にもかかわらず、産業の無気力と自主性の欠如はどうしたわけであろうか。実をいえば、革命後の産業にとっての好状況も、革命前とくらべてそうなのであって、産業の進歩を妨げている原因は、革命後のこんにちといえども、なおいぜんとして存続しているとサン・シモンは考える。「フランス革命は完全に神学的、封建的諸権力の崩壊を完成したというとき、ひとは誇張しているのだ。フランス革命はこれらの権力を絶滅しなかった。それはただ、これらの権力に基盤として役立っていた諸原理にたいして抱かれていた多くの信頼を減らしただけである。」⁽⁷⁾ こうして封建的勢力―貴族の大土地所有者の勢力―はなおも残存し、これによって産業の進歩がいちじるしく阻害されている。しかしながらサン・シモンは、産業の進歩を妨げている最大の要因は、なによりも産業自体が固有の原理をもっていないからであり、むしろこのことが封建遺制の存続を結果しているのだ、と考える。「産業の進行が現在まできわめて緩慢であり、しかもこんにち産業が、数多くの重要な成功にもかかわらず、実際には従属的な存在たるにすぎず、しかも社会はなお、大部分、封建的階級あるいは少なくとも封建的精神（これらはほとんど同じものだが）によって支配されているとするならば、現在までコム、ユヌ（産業）がみずからに固有の原理をもたず、一種の経験的本能と慣習とによってのみ進歩をなし、成功を獲得したにすぎないからである。」⁽⁸⁾

フランス産業のおかれている現状を無気力と自主性の欠如において認識し、その進歩が妨げられている原因を、封建遺制の存続と産業自体における固有の原理の欠如に見出したサン・シモンは、これらの障害を克服してフランス産業に進歩をえさせる方法、いいかえれば、産業社会をフランスに建設

するための諸条件を、政治的条件・社会経済的条件・道德的条件および国際的条件に求める。ただしこれらの諸条件のうちで、われわれの課題にとって興味あるのは、社会経済的条件である。というのは、産業社会建設のための社会経済的条件の考察をとおして、サン・シモンは、企業的農業育成論を展開しているからである。

ともかく『産業論』において、すなわち、フランス産業革命がようやく始動を開始したばかりの段階において、サン・シモンは、産業社会の完成をもって革命後におけるフランス経済の目標であるとし、そのためには政治・経済・社会・道德および国際関係にわたる広汎な変革―産業革命―が必要であると説くのである。

第二節 企業的農業育成論

産業社会を建設するための社会経済的条件についてのサン・シモンの主張を検討してみよう。まず問題になるのは所有権の問題である。サン・シモンはすでにチエリーとの共著において、「財産に変化なくして社会に変化は決してない」⁽⁹⁾と述べているが、『産業論』ではこの問題がさらにくわしく論じられている。では、かれは現在の社会において財産はいかなる意義を有するとみるか。

「財産を設定する法律は、あらゆるもののなかでもっとも重要である。それは社会組織の基礎として役立つものである。」⁽¹⁰⁾したがって、「財産の維持は政治の最大の目的である。」⁽¹¹⁾財産はこのように社会の基礎であるが、しかし不変のものではない。なぜなら、財産を定める法自体が、さらに上級の法によって規定されているからである。「この法（所有権を定める法）は、それ自体この法よりもさらに高い、さらに一般的な法、その法によって人間精神が不断の進歩をなし、すべての政治、社会

が制度を修正し、完成する権利をそのなかから汲みとるところの法、どのような性質のものであるかと、なんらかの規定によって来るべき世代を束縛することを禁ずる最高の法、すなわち、あの自然法に従属している。」⁽¹²⁾ したがって所有権は理論的にも変更可能なもの、あるいは必然的に変更されるものとなる。さらにまた、所有権は歴史的に規定されたものとして、現実の必要からも修正を余儀なくされる。なぜなら「私有権は、この権利の行使による共通の、かつ一般的な効用、時代によっていろいろ変わりうる効用にのみ基礎が置かれうる」⁽¹³⁾ からである。フランス革命の当事者たちは、封建的土地所有の撤廃にともなう国有財産の売却にあたって、この問題を全く論議しなかったわけではなかった。しかしながら革命の当事者たちは、「財産が国民の最大利益のためにいかなる方法で構成されるべきかを探索しつつ、一般的方法から所有権を論じることの全くしなかった。」⁽¹⁴⁾ したがって、現在、「解決されるべき、もっとも重要な問題は、われわれの見解では、財産が自由と富との二重の点からみて、社会全体の最大の福祉のために、いかなる方法で構成されねばならぬかを知ることである」⁽¹⁵⁾ では、社会の利益にそくして所有権を定めるにはどうしたらよいか。この点についてサン・シモンは、一八一五年の著書において、財産と能力とは分離しえないものであることを示唆することによって、人間の能力の自然的不平等に対応する所有の不平等を肯定する。「才能と所有とは決して分離されえない。なぜなら、もっとも大きな力であり、またもっとも活動的な力である才能は、もしも財産と結合されないならば、やがて財産を侵害するだろうから。」⁽¹⁶⁾ この言葉を裏付けるかのように、かれは一八二一年にこの述べている。「一般に富は、たとえ自分たちの所有する財産を相続した場合であっても、産業者の能力の証拠である。」⁽¹⁷⁾ ここからかれの見解はこう集約される。「各人はその能力と出資とに比例して重要さと利得の程度とを獲得する。このことは可能で望ましい最高度の平等

を構成する。かかるものが産業社会の基本的性格である。」⁽¹⁸⁾ サン・シモンは、「財産は能力に応じて分配されるべきだ」と主張することによって財産相続の廃止を主張した、のちの弟子たちの見解に近づきながらも、いぜんとしてブルジョワ的立場を固守する。かれのねらいは、所有権を生産力の増進に結びつくように設定することなのである。かれはいう、「財産は、所有者がそれを行なうことができるだけのもつとも生産的にするのを刺激するような仕方で構成されるべきである。」⁽¹⁹⁾

『産業論』における右の見解は、『組織者』においてもそのまま引きつがれており、さらに『産業体制論』では、所有権を生産者のために積極的に獲得させようとする提案がみられる。かれはこう述べている。「旧民法は財産を、これを所有している家族の手にできるだけ固定することを目的とした。新民法はこれと絶対に反対の目的、すなわち、社会にとって有用な労働をしているすべての人々が所有者となる方法を容易にする、という目的を提案すべきである。」⁽²⁰⁾ ここでは所有権がいかに設定されるべきかについての主張はより明確になっているが、所有権にかんする見解の本質的変化は認めがたい。生産者を所有者にしようという同じ主張は、かれの所有権理論の唯一の適用とみられる『産業論』における土地所有権にかんする見解のなかにもみられるからである。したがって、所有権にかんするサン・シモンの見解は、『産業論』以後においても本質的には変わっていないといつてよい。

所有権の問題は、サン・シモンを社会主義者とみるか否かのきめ手の一つであるから、この点をさらに立ち入って考察してみる。土地所有権の問題はかれの農業論ときり離しがたい。そしてかれの農業論は、所有権の問題にかかわるだけでなく、かれが農業を産業革命の一環としてどのように改革しようと考えているかを知る上にも重要である。

まず、サン・シモンは農業が商工業よりも生産上からみてはるかに重要であることを強調する。

「もしも一般的方法によって（すなわち、人類の全労働を同時に考察しつつ）、農業の生産物とすべての製造業およびあらゆる種類の商業の生産物との間に存在する關係を証明するならば、たしかに農業生産物は、少なくとも百倍も重要であることがわかるであろう。」⁽²²⁾ 百倍というのはもちろん誇張であつて、実際には、フランス農業の生産物は商工業の七ないし八倍であるとかれはみる。この計算の当否はともかく、当時、フランスの農業人口は全体の八〇パーセント以上をしめ、農業がもっとも重要な産業であつたことはたしかである。しかるに、「商業および製造業は農業よりもはるかに急速に進歩した。」⁽²³⁾ この理由はなにか。かれは農業と商工業とを比較した結果、こう考へる。まず商工業においては、生産者である商人あるいは製造業者は、自己資本であらうと資本金からの借用資本であらうと、企業のために有利だと判断すれば、自由にそれを運用することができ、これによって不動産あるいは機械などを所有することができる。つまり、そこでは生産者の能力と所有とは分離されていない。しかるに農業では事情が全く異なる。生産者である借地農業者は地主の援助なしにはなにもしない。資金が必要でも担保として土地を利用することも、また耕作上の必要から土地を転換することも自由にできない。そこでは生産者の能力と所有とは全く分離されている。農業の進歩が商工業にくらべて緩慢なのは、このような理由によるものだ、とサンシモンは考へる。⁽²⁴⁾

そこでかれは、農業の進歩を保証するために、三つの法令を出すことを提案する。第一は地主と借地農業者との賃貸借の条件の改善にかんし、第二は借地農業者に借金権を認めさせようとするもの、第三は土地の動産化（Mobilisation）を容易にするという法令である。かれの所有権理論の観点からすれば、第三の提案はとくに重要である。この提案によって企図するところのものは、まず農業者に資本をあたえることによって農業の繁栄をはかり、つぎに、こうすることによって農業者、すな

わち借地農業者にたいする土地所有権移転の便宜をはかる、ということである。サン・シモンをしていわしめよう。「土地財産の動産化は、産業がこうむったばかり知れない損失をつぐなうために、また産業になお課せられている負担にたえられるために、国家の配慮で、必要とする資本を産業に手に入れさせる唯一の方法である。」⁽²⁵⁾「農業者 (industriels agricoles) にたいして、かれらに託される資金を獲得する権利をあえるこの法律は、同時に、できるだけ安価にかつ容易に土地所有権の移転をもたらすはずである。現行法律が土地所有を、現在の土地所有者とその子孫の手とにのみ固定してあたえようとしていることは、フランス産業の繁栄にとって、あらゆる障害物のなかで最大のものである。それは、人々を励まして仕事をさせる競争の動機を有能な人々から奪っている。」⁽²⁶⁾

右の引用によって、サン・シモンの財産論の真意がどこにあるかは、もはや明瞭であろう。不耕作地主から直接生産者としての耕作者、もつとはっきりいって借地農業者へ、土地所有権を移譲させるために土地の動産化を推進し、これによって借地農業者が商工業者と同じ利益を享受しうるようにすること、これがかれの真の意図であった。かれの所有権にかんする論評は、抽象的な表現としては、一見、社会主義的なニュアンスをおびていたにしろ、かれの意図するところは完全にブルジョワ的なものであった。農業の資本主義化をはかろうとするかれの意図を、もう少し追求してみよう。

農業における資本の欠如は、農業と商工業との進歩の格差を結果したのみならず、国際的にみても、フランス農業の後進性の原因となっていることを、サン・シモンはアーサー・ヤングの指摘にもとづいて確認する。かれはいう。「農業は、フランスにおいて、革命以来大きな進歩をとげたけれども、イギリスやベルギーでみられる農業の状態にくらべて、なお幼年期にある。このことはアーサー・ヤングの著書によって証明されたところである。この有名な耕作者はきわめて精密な、またきわめて詳

細な方法によって、つぎのことを証明した。(一)もしもフ、ラ、ン、ス、がイ、ギ、リ、ス、と同様に耕作されるならば、その農、業、生、産、物、は二倍になるだろう。(二)もしも耕作者たちが、かれらの必要としている資本を手に入れることができるならば、農、業、はフ、ラ、ン、ス、においてもっと急速な進歩をとげるであろう。」⁽²⁷⁾ ヤングの指摘の第一は農業技術にかんするものと思われ、また第二は資本にかんするものであるが、サン・シモンが注目するのはフランス農業の資本不足についてのみである。かれは土地の動産化によって、農業における資本不足を解消し、これによって、農業に商工業と同じ進歩の速度をあたえらるゝと、フランス農業を先進国の水準まで高めようとするのである。かれは土地動産を立法化するとともに、国家による土地担保銀行 (*banques territoriales*) 創設によってこの方策を具体化することを提案する。このようにするならば、フランス農業は急速に進歩するだろうとかれは期待する。「われわれが提案する方法は、三、百、億、フ、ラ、ン、の金額をフ、ラ、ン、ス、の耕作者の意向にまかすことになるだろう。この方法は、こんにち資本がほとんど枯渇しているフ、ラ、ン、ス、の土地から、完全に生産的な資本をつくるであろう。その結果、この方法から必然的にフ、ラ、ン、ス、の土地の富は数年ならずして二倍になるだろう。」⁽²⁸⁾

以上の叙述は、サン・シモンの提案が、ジャンの指摘しているように、土地財産 (*propriété territoriale*) すなわち不動産を、産業財産 (*propriété industrielle*) すなわち動産へ転化せしめようとするものである⁽²⁹⁾ことを物語る。そうすることによって、かれは、革命によって広汎に創出された農民的小農経営を企業的大農経営へ転換せしめ、これによってフランス農業における資本主義体制の確立をはかろうとした、と解釈することができないだろうか。もしそうだとすれば、これは明らかに農業における産業革命—農業革命—推進の思想といふべきである。かれは直接生産者とし

ての耕作者を、とりわけ企業的借地農業者育成の視角からとらえてこれを擁護し、その資本的展開を保証しようとしたのであった。そして、かれが右の提案をなすにあたって、イギリスの地主

(*propriétaires des terres*)と農業企業者(*entrepreneurs de culture*)を念頭においていることは、かれの目標がどこにあったかを明瞭に示すものである。このばあい、かれの企業的借地農業者に対立するものとしての地主は、地主一般を意味しない。不耕作地主であっても耕作者に好都合な契約条件をあたえ、その生産に協力する地主はかれの攻撃をまぬがれる。かれが攻撃するのは、他人の労働によってのみ生活し、自分では全く生産しない寄生者(*hommes parasites*)である。かれの用語を結合して造語すれば、文字どおり「寄生地主」(*propriétaires parasites*)である。サン・シモンはかれらを怠け者とか泥棒とかいってのしり、乞食よりも卑しむべきものだとしている。⁽³¹⁾ 寄生者にたいするかれの攻撃は、「財産とは何か？ それは盗みだ！」と叫んだブルドンのことばを思わせるほど激烈である。サン・シモンの攻撃するこうした意味での「寄生地主」は、「非耕作者の土地所有者たる貴族」(*les nobles les propriétaires de terres non cultivateurs*)したがって、いわゆる貴族の大土地所有者をさすものであることはいうまでもない。

前節においてわれわれは、サン・シモンのいう、産業社会確立の必要条件を政治的、社会経済的、道德的および国際的条件に分けたが、われわれの課題に即して、本節では社会経済的条件のみをとりあげて考察した。しかし、じつのところこれらの条件はいずれも切り離しがたいものであり、それぞれ有機的に結合されているとみなすべきである。政治は経済の基礎の上に構成され、あるいはそれ自体「生産の科学」として経済と分離しがたいものとすれば、道德はいっさいの社会制度に対応するものとして、政治・経済・社会と不可分である。しかるに道德は諸科学の総合としての哲学に支えられ

ている。したがってあらゆる社会制度を規定し、それゆえに社会組織の改造を主張しうるものは、結局のところ哲学である。だからサン・シモンが産業社会の建設を主張するとき、かれは哲学者としての立場に身を置いているといつてよい。そこにはかれの実証哲学者としての一貫性がみられる。

かれの思想的立場についていえば、経済的自由主義の立場であり、スミス³¹の原理を徹底させた立場である。ここからかれの社会的立場が生まれる。かれの社会的立場はいうまでもなく生産者 (producteurs) あるいは産業者 (industriels) のそれである。しかし、問題はいかなる産業者の立場であるかということである。この点をもう少しはっきりさせるために、サン・シモンが生産者ないし産業者を、いかなるものとみなしているかを検討する必要がある。しかし、『産業論』においては、生産者³²と産業者の概念は必ずしも明確ではなく、単につぎのような規定がみられるだけである。「有用物の生産者は社会における唯一の有用な人々であるから、かれらは社会の進行を秩序立てるのに協力すべき唯一の人々である。」³³「産業者とは秩序の維持にもっとも興味をもっている社会階級である。」³⁴そして、「産業者の集団は：：二大家族から成り立つ。学者すなわち理論の産業者の集団、および直接生産者すなわち応用の学者の集団がこれである。」³⁵後者の集団には耕作者、製造業者および商人が含まれるが、商人がなぜ生産者であるかの説明はみられないし、また製造業者の重要性も特別に強調されていない。

『産業論』においてサン・シモンがとくに注目するのは耕作者である。先にもみたように、かれはこの耕作者を企業的借地農業者に焦点をすえて擁護したのであった。それゆえ、この段階におけるサン・シモンの社会的立場は、とりわけ、フランス農業を産業革命の一環に組み入れることによって、その資本主義的發展を推進しようとする立場であるといえる。つまりかれは、イギリス型の資本主義

的農業経営を、フランスに創出しようとしたのであった。そのかぎりでは、『産業論』におけるかれの農業思想の中に、われわれは、イギリス流の農業革命をフランスへ導入しようとのサン・シモンの企図を読みとることができる。

第三節 産業革命の主体と農業者

産業社会が成立するためには、その客体的基礎としての科学と産業の歴史的進歩・成熟があとづけられ、このなかから産業社会の担い手である、いわば主体的基礎としての産業者が広汎に成立しつつあることが明らかにされねばならない。³⁵ それと同時に、産業革命の推進者あるいは組織者としての産業者の社会的意義ないし機能を明確にしなければ、サン・シモンの産業社会の構想は意味を失なうであろう。そこで以下、産業革命の、したがってまた産業社会の組織者である産業者の概念を明確にし、ついでその社会的役割を考察することにする。このばあい、われわれがとくに注目しなければならぬのは、産業者のなかに含まれている農業者の役割である。

さて、サン・シモンは産業の担い手を生産者に求め、これを非生産者たる有閑者 (oisifs) に対立せしめる。『産業論』では、生産者は学者と産業者をさし、そして産業者には耕作者・製造業者および商人が含まれ、また有閑者は寄生的土地所有者をさすものであった。しかるに、その後の著書『組織者』(L'organisateur, 1819~20) および『産業体制論』(Du système industriel, 1821~22) では、生産者には処女作『シュネーウ人の手紙』(Lettres d'un habitant de Genève à ses contemporains, 1803) のなかですでに示された芸術家が学者と産業者とに加わり、また産業者のなかには、耕作者・製造業者・商人・銀行家およびかれらが雇っているすべての使

用人・労働者が含められ、一方、有閑者には新旧貴族およびかれがブルジョワと呼ぶところの、資本ならびに土地の単なる所有者・法律家・軍人・官僚・政治家などが含められるにたった。

ところで、実をいえば、生産者と非生産者の明確な区別が試みられるのは、『産業論』について一八一九年に公けにされた『国民党もしくは産業党対反国民党』（Le parti national ou industriel comparé au parti antinational）のなかにおいてであった。これによれば、

国民党ないし産業党というのはつぎの人々からなる。「土地を耕作するすべての人々、および耕作労働を指揮する人々。車大工・蹄鉄工・石工・錠前師・指物師・機械工・靴屋・仕立屋、要するにすべてのアルチザン・製造業者・商人・陸海運輸企業者、ならびに生産物の生産あるいは利用に直接間接に労働を提供するすべての人々。したがって実証科学の研究に熱中しているすべての学者は産業党にぞくする。なぜなら、かれらの発見はアルチザンによって採用される方法の改良にひじょうに貢献し、またしばしば新しい生産を生みだすからである。芸術家もまた産業者とみなされねばならない。なぜなら、かれらは多くの点で生産者であり、なканずくかれらがアルチザンに供給するデッサンやモデルによって、かれらはわが国の製造業の繁栄にひじょうに貢献しているからである。」³⁶⁾さらに以上のほかにサン・シモンは、自由主義的な意識をもち、その才能を貴族や官吏の恣意から産業者を擁護することにささげる弁護士、および健全な道徳、すなわち労働の義務を説教する少数の司祭、ならびに無為徒食の消費者の不当な優越から生産者を解放すべく、その能力と手段とを公然と用いるすべての市民をも産業者の集団のなかにいれる。

以上によってもわかるように、一八一九年においては、産業者のカテゴリーには、本来の産業者および芸術家のほかに、特定の弁護士や司祭といったような人々も含められている。ただし、一八二三

年の『産業者の教理問答』では、産業者は狭義の産業者だけに限定されている。すなわち、「産業者とは、社会のさまざまな成員の物質的需要あるいは好みを満足させる、一つあるいはいくつかの物的手段を生産し、あるいはこれをかれらのもとにとどけるために働く人のことである。すなわち麦をまき、家禽や家畜を飼う耕作者は産業者である。車大工・蹄鉄工・鋳前師・指物師は産業者である。短靴・帽子・リンネル・ラシャ・カンミヤ織の製造業者もやはり産業者である。商人・馬車ひき・商船に雇われている水兵は産業者である。これらすべての産業者は結合して社会の全成員の物質的需要あるいは好みを満足させるすべての物的手段を生産し、あるいはかれらのもとにとどけるために労働する。そして産業者は耕作者・製造業者および商人とよばれる三大階級を形成する。」⁽³⁷⁾

ところで反国民党を構成するのはいうまでもなく非生産者であるが、これはつぎのような人々からなる。「旧制度の復興に努める貴族、教皇および聖職者の命令に盲信的な道德をつくる司祭、貴族らしく、すなわち何もせずに生活する土地所有者、勝手気ままにふるまう裁判官、これを支持する軍人、要するに経済と自由にもっとも都合な制度を確立することに反対するすべての人々。」⁽³⁸⁾

以上、要するに「国民党は、社会に直接有用な労働を行なう人々、これらの労働を誘導し、あるいはその資本を産業企業に投下する人々、生産者に有用な労働によって生産に協力する人々から成り立つ。」これにたいして「反国民党は、消費はするが全く生産しない人々、その労働が社会にとって少しも有用ではなく、生産者に少しも役立たない人々、その適用が生産を妨げ、しかも第一級の社会的重要性をもつ産業者を剝奪しようとする政治原理を公言する人々から成り立つ。」⁽³⁹⁾このよなに述べたのち、サン・シモンは、各市民がいずれの党に属するかを決定するものは、出生の偶然ではなくて、もっぱら職業 (occupations) と思想 (opinions) とであることを強調し、たとえば、耕作者

ラファイエット、製造業者ラロシュ、フウコーリアンクール、鉄工場主ダルジャンソンは、その職業ならびにその自由主義思想によって産業者階級に属し、平民出身でも執政政府メンバーであったバルテルミーなどは、反国民党のうちに数えられるとしている。⁽⁴⁰⁾

『国民党対反国民党』について同じ年に出された『ミツバチとモンクマバチとの争いについて』

(Sur la querelle des abeilles frelons) では、生産者をミツバチ、非生産者をモンクマバチになぞらえつつ、両者のあいだには闘争が存在することを証明したが、つづいてやはり同じく一八一九年に公けにされた『組織者』の冒頭にかかげられた、いわゆる「サン・シモンの寓話」⁽⁴¹⁾ (parabole de Saint-Simon) として知られている一論は、生産者と非生産者との利害関係の対立を、もっともいきいきと表現している。この「寓話」は単なる比喩とみなすべきものではなく、この一論によってかれが重罪裁判所に召喚されたことは、これが当時のフランス社会にたいする強烈な批判論文であることを立証するものである。かれはいう。

フランスがその一流の物理学者五〇人、一流の化学者五〇人、一流の生理学者五〇人、一流の画家五〇人、一流の音楽家五〇人、一流の技師五〇人、一流の医師五〇人、一流の銀行家五〇人、一流の商人二〇〇人、一流の耕作者六〇〇人：「(かれは主要な産業者をつづけざまに枚挙する)、要するにフランスの一流の学者、芸術家およびアルチザン三千人を突然失なうと仮定しよう。これらの人々はおもっても本質的に生産的なフランス人であり、もっとも重要な生産物をあたえる人々であり、国民にとってもっとも有用な仕事を指導する人々であるから、真にフランス社会の精華である。かれらはあらゆるフランス人のなかでもっとも国に有用な人々であり、国にもっとも多くの光栄をえさせ、国の文明と繁栄をもっとも促進する人々である。かれらを失なった暁には、フランス国民は魂のない

肉体となるであらう。」

つづいてサン・シモンは別の仮定に移る。

「フランスが科学、美術および工芸において有するすべての天才を保持しつつも、王弟殿下、アング
ウレーム公爵：：（サン・シモンはここで国王家の全成員の名を列挙する）を同じ日に失なうという
不幸に出会おうとしよう。同的にフランスがすべての君側の高官、すべての（有任・無任の）国務大臣
：：（かれはここですべての高官・聖職者などの職名をあげる）、すべての各省職員、すべての裁判
官、そしてなおその上に、貴族らしく暮している所有者のうちのもっとも富裕な一万人を失なうたと
しよう。この出来事はたしかにフランス人を悲しませるだろう：：けれども国家のもっとも重要な三
万人の名士のこの喪失がかれらにあたえる悲しみは、単に感傷的なものにすぎないだろう。なぜなら
この喪失からは国家にとってなんらの政治的損害も生じないだろうからである。」⁽⁴²⁾

「寓話」のなかでサン・シモンが証明しようとしたのは、生産者が社会にとっていかに重要である
かということであり、これにたいして「出生の偶然、へつらい、陰謀もしくは他のあまり感心できな
い行為」によって優位を占めている非生産者が、いかに国民の繁栄を妨げているかということである。
『産業体制論』でも生産者と非生産者との対立関係がくりかえし強調され、「従属的な有閑階級は、
貴族と同様に、国民の蛭とみなされねばならぬ」⁽⁴³⁾とし、非生産者は徹底的に攻撃される。もちろん
サン・シモンは、生産者と非生産者との対立のほか、生産者相互間にも利害の対立があることを認
めるが、しかしこの対立は前の場合に比べればるかに弱いとする。⁽⁴⁴⁾ ともかくサン・シモンは、
「寓話」をとおして、「社会組織はほとんど完成されておらず、人々はまだ暴力と策略とによって支
配されるがままになっており、そして人類は（政治的にいって）なお不道德のうちに沈んでいる」⁽⁴⁵⁾

こと、要するに「現在の社会が真にさか立ちした世界である」⁽⁴⁶⁾ ことを確認するのである。さか立ちした世界を正常な世界にもどすことこそサン・シモンの課題にほかならないのであり、このためには社会を再組織しなければならぬとかれは考えるのである。ではどのようにして社会を組織するか。これにたいする解答のカギは産業者の社会的意義のなかに求められる。そこでこれまでの叙述をしめくくる意味をかねて、もう一度サン・シモンのいう産業者の社会的意義をここで確認しておこう。

「二、五〇〇万以上のフランス人は耕作・商業および製造業にかんする仕事に従事している。それゆえ産業者はフランス国民の大多数を占める：フランスに存在するすべての富を生産したのは明らかに耕作者・商人および製造業者である。獲得された富の大部分を所有しているものもかれらである：したがって産業者はフランス国民によって所有されている経済力の最大部分を賦与されている。」⁽⁴⁷⁾ 要約すれば、「もっとも有用な、もっとも多数の階級を構成しているのは産業者であり、その労働によって社会のすべての需要をみたしているのはかれらであり、いっさいの国富を生産しているのはかれらである。」⁽⁴⁸⁾ それゆえ「産業者階級は基本的階級であり、全社会の養いの階級であり、これなくしてはなんびとも生存することのできない階級である。」⁽⁴⁹⁾

以上から明らかにすることは、産業者は社会の唯一の基礎であるから、社会の完成とは産業者の完成にほかならず、したがって社会を再組織して産業体制を成立せしめるためには、産業者が社会の唯一の階級を構成するにいたらねばならない、ということである。産業者階級が唯一の社会階級となるとは、産業者が政権を獲得して社会の組織者となることである。では社会は産業者によってどのように組織されるのであろうか。それはかれのつぎのことばに明示される。

「平穏な事物の秩序を再建する方法は、明らかに芸術および実証科学においてもっとも有能な人々

に知的な仕事の指導を託し、同時にかれらに公共教育の指導を委託することにある。それは、もっとも重要な産業者の手中に世俗的権力を託し、貴族と無為徒食の金持ちをいっさいの重要な政治から免ずることにある。」⁽⁵⁰⁾ あるいはまた、「科学の進歩と産業の発展にもっとも好都合な方法によって社会を組織するためには、精神的権力を学者に、また世俗的権力の管理を産業者に委託する必要がある。要するに社会を組織するためには「もっとも重要な産業者の手中に財政を、そしてもっとも有能な学者の手中に財政もしくは行政以外の全業務を」⁽⁵²⁾ 託することである。

学者と産業者の以上の業務分担は嚴重になされねばならない。なぜなら、「もしも不幸にして世俗的業務の管理が学者の手中に委ねられる事物の秩序が確立されたとすれば、たちまち科学者は墮落して僧侶の悪業を見ならうようになり、狡猾で専横な形而上学者となるだろう」⁽⁵³⁾ からである。このように、学者と産業者の業務分担を明確にしているのは、文明の進歩につれて、社会の業務が精神的なもの、と世俗的なものに分業化していく傾向があることを、かれが見ていることによるものである。⁽⁵⁴⁾ しかし、社会を組織するにあたって、サンシモンがとくに重要な任務をあたえているのは産業者であって、学者はむしろ産業者の保護者として、副次的階級としてしか考えられていない。さらにかれが新体制の重要な組織者を産業者に求める場合でも、かれは産業者全体にこの任務をあたえようとするのではない。かれがとくに注目するのは産業主 (chefs des industriels) あるいは産業労働の首長 (chefs des travaux industriels) である。産業主とは「単に労働者、すなわち実行者ではなくて、労働の指導に多かれ少なかれ大きな役割を果しているすべての産業者」⁽⁵⁵⁾ であり、もっとも具体的にいえば「すべての農業企業者、すべての製造業者、すべての商人およびすべての銀行家」⁽⁵⁶⁾ を意味する。これらの人々は最大の實力をもち、もっとも実利的な資本を身につけ、その効用はもっ

とも直接的であるから、国民の眞の首長であるとサン・シモンは考える。したがって、人類が目指している純粋産業制度 (*régime industriel pur*) [純粋培養型資本主義] においては、「公共財産の管理を委託されるのは産業企業の支配人 (*gérants des entreprises industrielles*) である。」⁽⁵⁷⁾ そうすることは、かれらの産業的能力からしてとうぜんなことなのである。しかもこれら産業主のなかで、サン・シモンがとくに重視するのは銀行家である。「すべての耕作者および他の製造業者は商人階級によって相互に結びつけられており、そしてすべての商人は、銀行家のうちにかれらにとって共通の代理人をもつ。このように、銀行家は産業者の総代理人とみなされうるし、またまたみなされなければならない。」⁽⁵⁸⁾ それゆえ銀行の「特殊的利益は全産業者の一般的利益と完全に一致する」⁽⁵⁹⁾ はずである。

サン・シモンが社会を組織するにあたって、どのような立場に身を置かざるをえないかは、いまや明白であろう。かれの社会的立場は、いうまでもなく広くいつて生産者全体を包括するものであるが、しかし結局のところ、フランス初期産業革命下の、エンジニア⁽⁶⁰⁾を含む興隆しつつある農工商の産業企業者ならびに金融資本家の立場であるといわねばならない。諸産業のなかでもかれが農業を重視していることはのちにも述べるが、しかし『産業論』におけるように、農業企業者のみをとくに重視するといった態度ではもはやない。当時のフランスはいぜんとして農業国であったから、農業を重視することはとうぜんであるが、それにもかかわらずかれは商工業ならびに銀行業の発展にも注目するのである。かれの銀行業への注視は、すでに『産業論』においても、土地担保銀行の創設提案という形であらわれているが、そのご、フランス銀行の理事に産業者が就任している事実を知るにいたり、⁽⁶¹⁾ ますます銀行の経済的意義を重視するようになったものであろう。サン・シモンのこうした現実把握は、

いわゆる資本の原蓄過程から産業資本の成立への急激な転換を開始しつつあった、初期産業革命下のフランス社会の性格を正しく反映しているものと思われる。このころのフランス社会の運動方向は、ジャン・ブウヴェイエの叙述を借りると、こうである。「フランスの一八一五—一八四八年の時期は、社会の指導層の運動についていえば、企業的ブルジョワ、(事業的)ブルジョワジーの経済的、社会のおよび政治的勢力の確認と確立とによって特徴づけられる。当時、土地貴族階級は、その努力にもかかわらず勢力を失なうと同時に、国家機構の支配力もわた、発展しつつある社会層たる商人・銀行家・工業家のために、相対的にその経済上の衰退を強化するにいたった。」⁶²⁾

もちろん、サン・シモンは、先にも述べたように、生産者相互のあいだにも、非生産者との対立に比べればはるかに小さいが、ともかく対立があることを認めていたから、これらの産業企業者や金融資本家のあいだにも対立があることを気づいていたにちがいない。しかしかれはこの対立を具体的に全く示さなかったほどに無視したのである。しかもサン・シモンは、これらの企業者や資本家と、単なる生産者としての多数の貧しい産業者との利害が対立するものとは決して考えない。それどころか、かれは企業者ないし資本家の立場から、かれらの境遇を改善することが可能であるとみる。たとえばサン・シモンは『産業体制論』において、「できるだけ大量の仕事を国民にえさせる方法は何か」という疑問を提起したのち、こう答えている。「最良の方法は産業企業の首長に予算をつくる役目、したがって公共の管理を指導することを委託することである。なぜならば、事物の本性によって、産業企業の首長(かれは国民の真の首長である。というのは、その日常業務によって国民を指揮するのはかれらだから)は、つねに直接的に、しかもかれら自身の利益のために、かれらの企業にできるだけ最大の拡張をあたえようと目がけるであろうし、そしてこの点にかんするかれらの努力によつ

て、下層の人々によってなしとげられる仕事の量は、最大限に増加するであろうからである。」⁽⁶⁹⁾ これによって、労働者を救済するものは、マルクスとは反対に、資本主義的企業の発展そのものである。なぜならば、企業の発展は雇用を増大せしめるからである。したがってサン・シモンにおいては、「企業利潤の増大―企業規模の拡大―雇用量の増加―労働者賃金の上昇」のコースが想定されているものとみることができる。

サン・シモンは産業社会の建設者、あるいは産業革命の主体を、国民の大部分をしめる農工商の生産者階級のエネルギーにささえられて、当時、急速に上昇しつつあった農工商の産業企業者および金融資本家にもとめた。かれはこれら企業者・資本家の活動による生産力拡大のうちに産業革命を遂行し、かれの理想とする純粹産業社会を建設しようとしたのであった。つまり、サン・シモンが企図したのは、農工商にわたる諸産業の全面的開花、これである。われわれの課題である農業の観点からすれば、かれが構想した産業革命、あるいは産業社会における農業の担い手は、前節でのべた企業的農業育成論と対応して、企業的農業者であることはいうまでもない。

第四節 産業社会における農業

新しい社会組織についてのサン・シモンの最初の計画は、すでに『産業論』においてみられた。ここではフランス農業の発展速度を製造業や商業と同じ水準にひき上げ、同時にこれによってフランス産業を先進国イギリスの生産力水準まで高めようとする、かれの農業改革案が示された。しかるにこの計画は、以後、全くかえりみられなくなり、『組織者』や『産業体制論』においては、全く新しい計画がみいだされ、また『産業者の教理問答』(Catéchisme des industriels, 1823~24)や

『社会組織論』(De l'organisation sociale, 1924)などにも断片的ながら新しい提案がみられる。ということは、サン・シモンがこの問題について、ついに最終的な計画を立案することができなかったことを示すものであろう。またかれは、さまざまな形で示した社会組織案を、産業体制を確立するまでの過渡的な、すなわち、産業革命の過程における社会組織として示したものであるか、あるいは産業社会それ自体の組織として示したものであるかどうか不明ではない。しかし、いずれにしてもかれの社会改革案には、未来社会としての産業社会の組織が具体的に構想されているとみることができる。以下において、かれが構想した産業社会の組織とは、具体的にどのようなものであるか、また、新社会の組織についてのかれの意図がどこにあるかを、産業社会における農業の位置づけに注意を払いながら考察してみる。

『組織者』における社会組織案は、経済組織の計画よりも、むしろ政治組織の計画に力点が置かれている。これはかれの問題の立て方が、生産にもっとも好都合な政治組織とはいかなるものか、という形をとったことからきている。生産力の拡大を目指しながらも、それを保証するものはあくまでも政治組織である、とかれはみるのである。ともかくサン・シモンは、『組織者』において、さまざまな部門の産業からなる新しい議會を構想する。それは、それぞれ特殊な政治的職能をもつ、つぎの三つの議院によって構成される。

第一の議院は企画院(Chambre d'invention)で、その構成メンバーは三〇〇人である。かれは三つの部門は二五人の画家、一五人の彫刻家または建築家、および一〇人の音楽家からなる。この議院は、「効用と快適にかんするあらゆる点で、フランスの富を増加させ、その住民の境遇を改善するため企てるべき公共事業の計画」⁶⁴⁾を委託される。サン・シモンは、企画院が委託される公共事

業計画の内容にまで立ち入る。「干拓・開墾・道路の開通・運河の開設は、この計画のもっとも重大な部分とみなされよう。造るべき道路や運河は輸送を容易にする手段としてのみ考えるべきではなからう。これらの建設は、旅行者にできるだけ最大の楽しみをあたえるように計画されるべきであろう。」⁽⁶⁵⁾かれはニカラガ横断運河や、マドリッドから海までの運河を計画した青年時代の夢にかえる。かれのこの夢は、やがて後継者たちによって、スエズ・パナマ両運河の開設となって実現されるはずである。要するに企画院に托してサン・シモンが主張しているのは、フランス国土の総合的開発と、それによる国民の経済的・社会的福祉の向上ということである。企画院はこのほかに、希望祭 (*fêtes d'esperance*) と記念祭 (*fêtes de souvenir*) に大別される、さまざまな公共祝典をも計画する。

第二の議院は審査院 (*Chambre d'examen*) と呼ばれ、同じく三〇〇人のメンバーによって構成され、これらには有機物の物理学 (生理学) と無機物の物理学とに従事する学者おのおの一〇〇人と数学者一〇〇人によって構成される。審査院は三つの仕事をつかさどる。第一は、企画院が提案した計画を詳細に審査し、第二は、有用な仕事を計画し、指導し、実行する能力を養成するための三種類の公共教育制度をつくり、第三は、性・年齢・生産階級別の各種祭典―人類祭・婦人祭・少年祭・少女祭・父母祭・子ども祭・工場主・労働者祭―を行なうことである。

第三の議院は執行院 (*Chambre d'exécution*) と称し、そのメンバーは、主要産業部門の産業主のなかから、その重要さに応じた割合で集められる。ここでは第一院で計画され、第二院で審議された計画を実施し、また税金を課してこれを徴集する業務を担当する。

以上の「三つの議院は新しい議会を形成し、憲法上、立法上の主権があたえられる。」⁽⁶⁶⁾

つぎに『産業体制論』におけるサン・シモン⁶⁷の社会組織案をみよう。かれはこのなかで、国家予算の確立とその使用とが、「プロレタリアの生存を保証する目的で」、産業の代表者に委託されるようにするためには、財務省 (ministère des finances) ・内務省 (ministère de l'intérieur) および海運省 (ministère de la marine) の三つの省を創設すれば足りると考える。

財務省は、ひきつづき一〇年間その職業を営む産業者を大臣として、国家の予算をとりきめる。これは産業院 (Chambre de l'industrie) と呼ばれる産業者の協議会によって補佐される。産業院の協議員は、一〇人の農業者、四人の商業者、同じく四人の製造業者、および六人の銀行家からなる。この協議員の数からみて、サン・シモンが明らかに農業を重視していることがわかる。かれが農業生産を重視していることは、別の所でのつぎのことばにも現われている。「わたくしはまた、国民生産物の増加、とくに農業生産物の増加を目的とする科学的な仕事についての個人的な知識をもっている。⁶⁷」かれの農業重視は、農業者が全人口の七〇パーセントを占めた当時のフランス産業の構造からみて、きわめてとうぜんであろう。

内務省は六年間ひきつづきその職業に従事する産業者が大臣となり、主として予算の使用をとりきめる。これを補佐するのは、七人の農業者、三人の商業者、三人の製造業者および二人の物理学者、三人の化学者、三人の生理学者ならびに三人の土木技師よりなる協議会である。

海運省の大臣は、海運業を一〇年間営んだ産業者のなかから選ばれ、これを補佐する協議会は、フランスの主要港の海運業者を代表する一三人のメンバーによって構成される。⁶⁸

以上の計画は『産業体制論』第一巻によるものであるが、第二巻においてもサン・シモンは別の社会組織案を述べている。ここでは社会組織の基礎となるべき原理を教育するための国民教理問答

(Catéchisme national) を作成すること、国民の生活を改善し、産業の発展と国民生活の改善を好都合ならしめるような予算案の編成、新旧貴族制度の廃止などが示されている。⁶⁹⁾ ここでサン・シモンは教育をひじょうに重視しているが、その理由はかれによればこうである。「社会の成員を協同させることのできるもっとも強い関係は、かれらの原理と知識の類似性のなかに存するが、しかもこの類似性は教育の結果としてのみ存在しうる。」⁷⁰⁾

『産業者の教理問答』および『社会組織論』のなかには、精神的権力と世俗的権力の再組織にかんするサン・シモンの別の計画がみいだされる。精神的権力についていえば、かれはまず学者を二つのクラスに分類する。第一のクラスの学者は、利益の法典(Code des intérêts)の完成、すなわち産業をもっとも生産的ならしめる規則の確立に努め、かれらは科学アカデミーを構成する。このアカデミーには、ルイ十四世の創設した物理学者と数学者を中心とするアカデミーに、さらに経済学者が加わる。第二のクラスの学者は感情の法典(Code des sentiments)の完成、すなわち、産業社会に調和する道徳的規則の体系化、想像力と感情の能力の完成に努める人々で、かれらは道徳アカデミーないしは芸術アカデミーを構成する。この構成メンバーには道徳学者・法律家・神学者・詩人・画家・彫刻家・音楽家が含まれる。さらに科学アカデミーと芸術アカデミーとは、最高アカデミーと呼ばれる哲学アカデミーのメンバーを選出する。この最高アカデミーは公共教育の基礎として役立つ一般学説を確立し、完成することに努める。

世俗的権力は、もっとも重要な農業者・製造業者・商業者・銀行家からなる産業者協議会に託される。この協議会は、アカデミーによって提案された、公共に役立つさいの計画を審議する。一方ではまた、先の最高アカデミーは国王の発案協議会(Conseil initiatif de Sa Majesté)を

構成するが、この協議会が決議した計画は、芸術アカデミーおよび科学アカデミーを経て、産業者協議会に委託される。産業者協議会はこの計画を検討するほかに、毎年予算案をつくり、各省がこれを適切に使用したかどうかを審査し、その結果にもとづく計画を国王の命によって議会に提出する。⁽⁷¹⁾

サン・シモンの未来社会の組織案は、断片的な形でさまざまな機会に述べられているが、こうした組織案をおして、かれがなにを意図していたかは、かれがみずから提起したつぎの六つの疑問のなかにもはっきりとみることができるといえる。「(一)フランス国土の価値をできるだけもっとも迅速に増大させる方法とはなにか？ (二)観察科学の進歩を促進する方法とはなにか？ (三)国民の子孫に、国民がこんにちまで受けたよりも、より広汎な、より確実な教育をえさせるためには、どのようにふるまわねばならぬか？ (四)できるだけ最大量の仕事を労働者にえさせるためにとるべき手段とはなにか？

(五)有用な労働に専心する人々への尊敬を高め、有閑者およびその労働が社会にとって有害無益である人々を失墜させる方法とはなにか？ (六)公けの平穩をいっそう完全に保証し、国民にもっとも安価に費させる社会組織とはなにか？」⁽⁷²⁾ 以上をいいかえれば、サン・シモンはつぎの条件を満足するような社会状態を構想していたのだといえよう。(一)フランス産業の生産力の増強。(二)科学の進歩。(三)教育の普及。(四)完全雇用の確保。(五)生産者の地位の向上と非生産者の消滅。(六)公共の安寧と福祉を実現する社会組織。

このような現実的課題の解決を意図したものとすれば、これまで考察してきたサン・シモンの社会組織計画を、いちがいに机上の空論として無視することはできないであろう。にもかかわらず、かれの社会組織案は、その基礎となるべき経済の実態そのものについての明確な分析と認識とを欠いているという点で、やはり机上計画だとのそしりをまぬがれないであろう。かれの以上の計画は、しょ

せん、経済学的認識を欠いた経済対策にすぎないといふことができる。かれの目指したものは、究極において一つの経済体制のはずであった。にもかかわらず、かれがこの体制を組織するために立案した計画は、すべて政治組織の計画であった。なぜそうなったのだろうか。この点について、マッソンのつぎのことばはきわめて示唆的である。「サン・シモンは経済計画を系統立てることに成功しなかったし、またかれ自身、……再組織の仕事に先立つべき経済学に関心をもたなかった。」⁽⁷³⁾かれはミスやセーの経済学に興味を抱いたが、これを完全に理解してわがものとすることはできなかったのである。

サン・シモンが、産業社会における農業を、他産業と均衡する生産力水準にまで高めることによつて、国民経済における重要な産業部門たらしめようとしたことは明らかである。しかし、それ自体において正當なかれのこうした企図は、フランス農業についての精密な経済学的認識にもとづいて構成されたものではなくして、かれのいづく産業主義思想から、いわばア・プリアリに構成されたものとみなされる。それゆゑ、かれの思想体系は、社会認識の有効な手段としての経済理論を包括していないという意味で、未完成であり、未熟である。かれの農業思想は、思想としての体系を備えていない一つのヴィジョンの段階にとどまっている。こうしてわれわれは、産業社会における農業・農業者の位置づけについての、かれのヴィジョンに接することはできても、産業社会における農業の機能、あるいは経済的役割についての、かれの理論に接することは、ついにできないのである。

結 語

産業社会を確立するために示したサン・シモンの意欲は、農業の面では、貴族的大土地所有者に表

徴される封建遺制の撤廃と、借地農を中心とする企業的農業の育成という形で提示される。そのかぎりでかれの農業思想は、古典的産業主義者の見解と異なるものではない。フランス産業革命の進行に呼応する農業の資本主義化こそ、サン・シモンの意図するところだったのである。われわれはここに、かれの思想の歴史的役割を認めることができる。通説に反して、かれの思想の本流をなしているものはブルジョワ精神である。かれの思想がある面で歴史の流れ——資本主義の発展——に密着した現実的内容をもっているとすれば、おそらくかれの思想のこうした性格にもとづくものであらう。

しかしながらかれの思想は資本主義経済の自然的発展を、ただ手ばなしで賛美しようとするものではない。産業社会において、かれが農業や農業者に、他産業および他産業従業者と同等の地位をあたえていることは、逆にいえば、現実の経済発展が農業・農業者にあたえている不当な地位にたいする、ひとつの反発であるとも受け取れる。資本主義の発展をそのまま容認することができないからこそ、かれは、産業社会の計画的・組織的建設を熱情こめて説き、そのための大革命の必要を声高く論じたのである。この点においてかれは、事実としての歴史の流れ——資本主義の発展——からそれたところに、産業社会の建設を構想することになるのである。ここに、ブルジョワ的思想のわくに当てはまらない、理想主義的なかれの思想の巨大なスケールにわれわれは接するのである。

すでにのべたように、サン・シモンの農業思想は、いわばヴィジョンの段階にとどまり、ひとつの農業思想といえるほど体系化されていない。たとえば、産業社会における農業の重要性について注目しているにもかかわらず、その具体的機能または経済的、社会的役割については、かれはついに論及せずにおわっている。サン・シモンからフランス農業の具体的分析を期待しても徒勞であらう。それにもかかわらず、なお、われわれは今日の観点に立って、かれの農業思想から新鮮な一つのヴィジ

ヨンを学びとることができるようにおもう。そのヴィジョンとは、計画経済にもとづいて、国土の総合的開発と農地の流動化をはかることによって、他産業と均衡する生産力を保有する企業的農業を育成すること、これである。

註

- (1) L'Industrie, XV^{III}, p.128.
- (2) L'Industrie, XV^{III}, p.69.
- (3) L'Industrie, XV^{III}, p.186.
- (4) L'Industrie, XV^{III}, p.13.
- (5) L'Industrie, XV^{III}, p.165. 傍点は原文イタリック。以下同じ。
- (6) L'Industrie, XV^{III}, p.208.
- (7) L'Industrie, XV^{III}, p.165.
- (8) L'Industrie, XIX, p.151. サンシモンは、十二、三世紀に始まるコミューン（自治都市）（communes）の解放をもつて産業進歩の起点とみることにあり、しばしばコミューンを産業の同義語として使用している。
- (9) De la réorganisation de la société européenne, XV, p.242.
- (10) L'Industrie, XV^{III}, p.43.
- (11) L'Industrie, XV^{III}, p.221.
- (12) L'Industrie, XIX, p.89.
- (13) L'Industrie, XIX, p.90.

- (14) L'Industrie, XIX, p.82. note 1.
- (15) L'Industrie, XIX, p.83.
- (16) De la réorganisation de la société européenne, XV, p.201.
- (17) Du système industriel, XIX, p.49. note 1.
- (18) L'Organisateur, XX, p.151.
- (19) L'Industrie, XIX, p.43.
- (20) 「財産は土地を生産するもの、好都合ならつめる基礎の上に再組織され、建設されるべきである。」
L'Organisateur, XX, p.59.
- (21) Du système industriel, XXI, p.178.
- (22) L'Industrie, XIX, p.108.
- (23) L'Industrie, XIX, p.86. note 1.
- (24) L'Industrie, XIX, p.84. suiv.
- (25) L'Industrie, XIX, p.105. これについてサン・シモンはつぎのように述べることによって、かれの提案が
フランスの経験にもつづいてものであることを明らかにする。「経験によれば、土地財産の動産化はきわめて実行可能な方
法であることが証明された。なぜなら、それはフランス王国の一部において、支障なくまた不都合もなく実行されたから
である。」これはおそろく一八〇七年に始まるシュタイン・ハルデンベルクの土地改革を指すものである。
- (26) L'Industrie, XIX, p.88.
- (27) L'Industrie, XIX, pp.109-110. ヤングがフランスを旅行したのは革命前夜であり、したがってヤングの
見解をサン・シモンのように王政復古期のフランス農業に適用するのは誤りであると考えられるかもしれない。しかし、

シャペールによると、少なくとも「執政官時代と帝政時代のもとでは、フランス農業の一般的外観は、革命の時にA・ヤングが非常な正確さと良心とをもって書いた外観を、ほぼ残している。」A. Chabert, *Essai sur les revenus et de l'activite economique en France de 1798 a 1820*, Paris, 1949, p. 38.

(28) L'Industrie, XIX, p. 110.

(29) ジャネ、大岩訳、前掲書、七三ページ

(30) L'Industrie, XIX, pp. 102-103.

(31) L'Industrie, XVII, pp. 129-130. note 1. サン・シモンがここで攻撃している寄生者とは、単な

る金利(地代)取得者(rentiers)をさす。なお、地主に対するかれの攻撃には歴史的根拠もあった。かれによれば「農業についての主要な資金貸付人である土地所有者の権利は、征服すなわち強者の権力を起源とした。」

L'Industrie, XIX, pp. 86-87. かれは征服者フランク人の子孫が地主で、被征服者ゴール人の子孫は耕作者であるとして、両者間の敵対関係を指摘している。

(32) L'Industrie, XVII, pp. 180-187.

(33) L'Industrie, XIX, p. 101.

(34) L'Industrie, XIX, p. 60.

(35) この点については、拙著『フランス産業革命思想の成形』一九六一年、前篇、第四章を参照。

(36) Le parti national ou industriel compare au parti anti-national, XIX, pp. 202-203.

(37) Catéchisme des industriels, XXXVII, pp. 3-4. 高木訳書、七三ページ。

- (38) Le parti national ou industriel, XIX, p.204.
- (39) Le parti national ou industriel, XIX, pp.195-196.
- (40) ハンニマンは産業者として、この世にネッタンとチルノキをあげた。Du système industriel, XXI, pp.142, 144.
- (41) 「實話」という題は、一八三二年のオラン・ロドリックによってあたえられたものである。
- (42) L'Organisateur, XX, pp.17-21. 大塚訳書、九七―九九ページ。
- (43) Du système industriel, XXII, p.93.
- (44) Du système industriel, XXI, p.140.
- (45) L'Organisateur, XX, p.24. 訳書「オービュン」。
- (46) 「めがたつた世界」といふのは、この世にあられた。De l'organisation sociale, XXXIX, pp.158-159.
- (47) Du système industriel, XXI, pp.43-45. ハンニマンの人口は、別のところでは「三〇〇〇万のフランス人のうち二、九五〇万人は産業者である」(Du système industriel, XXII, p.187)と算定された。
- (48) Du système industriel, XXI, p.136.
- (49) Catéchisme des industriels, XXIs, XXXIX p.25.
- (50) De l'organisation sociale, XXXIX, p.159.
- (51) Du système industriel, XXII, pp.120-121.
- (52) Catéchisme des industriels, XXXIX, p.23.

- (53) Du système industriel, XXI, p.161.
- (54) Du système industriel, XXI, p.16.note 1.
- (55) Du système industriel, XXII, p.218.note 1.
- (56) Du système industriel, XXIII, p.72.
- (57) Quelques opinions philosophiques à l'usage du XIX^e siècle, XXXIX, p.98.
- (58) Du système industriel, XXI, p.47.
- (59) Catéchisme des industriels, XXXV II, p.27. 訳書「ニクレーン」。
- (60) カンーニギンは学者・芸術家であり、マキンの中間階級、つまり科学的能力と産業的能力とを結合する階級として
マシニエ階級に注目し、産業体制確立のためのための役割、ならびにこれを養成する高等工業学校
(Conservatoire des arts et métiers) と高等土木学校 (Ecole des ponts et Chaussées)
などの実業諸学校の役割を重視している。L'Organisateur, XX, pp.142-142.
- (61) Du système industriel, XXI, p.148. マシニエマシニエがその役割。
- (62) Jean Bouvier, Le système de crédit l'évolution des affaires des 1815 à
1848 (La pensée No.71.1957.p.35)
- (63) Du système industriel, XXII, p.82-83.
- (64) L'Organisateur, XX, p.51.
- (65) L'Organisateur, XX, pp.51-52.
- (66) L'Organisateur, XX, p.58.
- (67) Du système industriel, XXI, p.161. ただし、農業生産力の増大にかんするくわしい論究はみいださ

なる。

(88) Du système industriel, XXI, p. 106-109.

(89) Du système industriel, XXII, p. 237 suiv.

(90) Du système industriel, XXII, p. 238. カンミンは産業社会の建設に直結する国民教育問題を重視する。この反面的原理を学校で教育するのを禁止する。Du système industriel VI p. 239. なお、カンミンの教育思想については、西八バームの小冊子ながら、Maurice Demmanget, Henri de Saint-Simon, dans la Collection "Les grands éducateurs socialistes", Paris, 1953 年、を参照する。

(91) Catéchisme des industriels, XXXIX, p. 26 suiv. De l'organisation sociale, XXXIX, p. 164, suiv.

(92) Du système industriel, XXII, pp. 250-251. この文はカンミンは、国王の口を借り、フランス国内の価値の増大、製造業の改良、販路の拡大、完全雇用の確保について語る。Du système industriels, XXIII, p. 73. などの他の箇所でも、国民教育の組織、職業生産物の増加について、完全雇用の保証する計画と過剰人口を解決するための植民計画が述べられている。Du système industriel XXI p. 161-162.

(93) F. S. Mason Saint-Simonism and the Rationalization of Industry (The Quarterly Journal of Economics, Vol. 45, 1931, p. 647) によると、経済思想家、カンミンの著述は、その足りることを示す。G. -H. Bousquet Essai sur l'évolution de la pensée économique, Paris, 1927, p. 185.

第三章 シスモンディの農業思想

課 題

発展しつつある経済社会において、農業はいかなる機能を果たしておりまた果たすことを期待されるか。あるいは、資本主義経済の発展にともなって、農業、ことに小規模農業はいかなる機能を演じ、かつ発展と衰退のいずれのコースをたどるか。高度経済成長にともなって、日本農業がかつてない大変動を経験しつつあることにち、このことはあらためて検討されるべき問題である。

本章では、この問題へ接近するための一つの方法として、さし当ってシスモンディ(J. B. Say, 1775-1842)の農業に関する経済思想—農業思想—を考察の対象としてえらび、その歴史的、現代的意義を確認することによって、以上の課題にたいする筆者自身の主体的立場の形成に資したいと考える。このばあい、シスモンディを研究対象として選定したのは、つぎの理由によるものである。

(一) シスモンディの経済学にかんする主著⁽¹⁾『経済学新原理』(Nouveaux principes de l'économie politique ou de la richesse dans ses effets sur la population, 2 vols, Paris, 1819, 2^e ed., 1827)が公刊されたのは、資本主義の母国イギリスがその産業革命の最後の仕上げを急ぎつつあるいっぽうでは、大陸、ことにフランスにおいて、産業革命がまさに胎動を開始しつつある時期、すなわち経済社会の変革期においてであった。イギリスをはじめ、ヨーロッパ各国の経済事情に通暁する国際人シスモンディの『経済学新原理』は、こうした経済社会の動態を鋭い観察眼をも

ってとらえたものであり、そのかぎりでは本書は、たとえ理論的には二流の水準にあっても、その歴史的価値は不滅である。⁽²⁾ そして本書は、そのような時代の問題と真剣に取り組んだ結果であり、したがって時代の流れを鋭敏に反映しているという、まさにそのことのゆえに、こんにちもお、時代と国情をこえて、変革期のわれわれに深い学問的反省の資料を提供しているように思われるのである。しかも、上記のわれわれの課題から注目されねばならないことは、シスモンディが、その経済学体系の中核に、産業革命期の農業―農民問題をすえつつ、それへの実践的対決のうちに、国民経済における小農経営の役割を認識し、すすんでその発展方向を指示していることである。こうして、シスモンディ経済学は、われわれの課題にまともにつかってくるように思われる。

(二) さらにまた、シスモンディを取り上げることには、最近におけるフランス経済史研究との関連において、つぎのような意義をもちうると考えられる。

封建体制を徹底的に排除し、そのことによって産業資本の展開に有利な道を開いた「古典的ブルジョワ革命」の母国フランスが、革命以後において、なぜ急速な資本主義の展開をなしえなかったかという歴史のパラドックスを解く鍵の一つが、農業問題にもとめられることは、これまでのフランス経済史学の研究成果の示すところである。⁽³⁾ それゆえ、この成果にもとづいて、フランス産業革命期の農業―農民問題の態様を、同時代の経済学者の眼をとおしてとらえなおすことは、この時期の農業―農民問題の本質のみならず、さらにすすんで、フランス資本主義の停滞性の真因を究明するための一つの方法となりうると考えられる。

(三) さいごに、シスモンディの農業思想をここで取り上げるのは、これまでのシスモンディ経済学の研究が、もっぱら恐慌論を中心としてすすめられ、農業論についての本格的研究としては、平田清

明氏のものがあるのみ、⁽⁴⁾ という現状とも関連する。本稿は、平田氏の成果を参照としながら、上記の問題意識のもとに、シスモンディの農業思想の意義を検討しなおそうとする。そのさい問題となるのは、レーニンによって提唱され、その後、平田氏を含めて多くの研究者たちが承認している「経済学的ロマン主義」⁽⁵⁾ という規定が、果たしてシスモンディ経済学の正しい理解につながるものかどうか、ということである。シスモンディ経済学の正当な評価は、レーニンの呪いからこれを解放することによってのみ可能となるのではなからうか。

シスモンディの農業思想を取り上げようとするわれわれの問題意識とその研究上の意義は、ほほ以上のとおりである。以下、シスモンディ経済学の課題にそくして、まず産業革命期におけるフランス農業の社会的構造を考察することによって、この時期の農業―農民問題の所在を明らかにし、ついでこの問題にシスモンディがどのように対決しながら、国民経済における農業の意義を確認し、すすんでフランス小農の発展をはかろうと企てるかを追求し、この作業をつうじて、シスモンディ農業思想の歴史的、現代的意義を再検討したいと考える。

第一節 産業革命期のフランス農業の社会構造

フランス産業革命は、ナポレオンの没落とブルボン王政の復活をしるしづける一八一五年ごろから始動し、一八三〇年代のルイ・フィリップ王政下、なかんずく一八四八年の二月革命を契機とする第二共和制のもとで本格的に展開し、一八六〇年代ないし一八七〇年代に完成するとみられる。⁽⁶⁾ 産業革命の進行が、同時に、資本主義経済の体制的確立の過程を意味するものであることは、いまさういうまでもないが、そのプロセスは、その国の置かれている歴史的諸条件によって多様である。もっと

も、ここでは、フランス産業革命の展開過程については、たんに以上の理解にとどめ、以下、もっぱら『経済学新原理』の背景となっている一八一五～三〇年の期間、すなわち産業革命の胎動期におけるフランス農業の社会的側面を概観しつつ、そこからこの時期の農業問題の一環としての農民問題を抽出してみたい。(7)

まず土地所有の状況をみよう。

第一表によれば、一八一五年において、平均三ヘクタール以上の零細土地所有者は六六・二%、または五～一二ヘクタールの小土地所有者は二三・〇%をしめ、これを合計すると零細・小土地所有者は八九・二%という圧倒的比重をしめることになる。それにもかかわらず、かれらは全農地の二三・三%を所有しているにすぎない。しかるに、土地所有者総数のわずか〇・六%をかぞえる平均八八〇ヘクタールを所有する大土地所有者が、全所有地の四二・五%を、また一〇・一%をしめ、平均二二～六二ヘクタールを所有する中土地所有者が全体の三四・二%の土地を所有している。

要するに、少数の大土地所有者とおびただしい零細・小土地所有者の存在こそ、産業革命期におけ

第1表 1815年における土地所有の状況

| 土地所有者数 | 構 成 比 | 平均所有 地面積 | 所有地面積計 | 構 成 比 |
|-----------|-------|-------------|------------|-------|
| 人 | % | ha | ha | % |
| 21,456 | 0.6 | 880 | 19,000,000 | 42.5 |
| 168,643 | 4.4 | 62 | 10,500,000 | 23.5 |
| 217,817 | 5.7 | 22 | 4,800,000 | 10.7 |
| 256,533 | 6.7 | 12 | 3,000,000 | 6.7 |
| 258,452 | 6.8 | 8 | 2,000,000 | 4.5 |
| 361,711 | 9.5 | 5 | 1,800,000 | 4.0 |
| 567,687 | 14.9 | 3 | 1,700,000 | 3.8 |
| 851,280 | 22.4 | 1.7 | 1,400,000 | 3.1 |
| 1,101,421 | 28.9 | 0.5 | 550,000 | 1.2 |
| 3,805,000 | 100.0 | | 44,750,000 | 100.0 |

注) M L de Lavergne, Économie rurale de la France depuis 1789, 4^e éd., Paris, 1877, p. 48.

るフランス農業の社会構造的性質をなすものといえる。

(一) ではこのばあい、大土地所有者とはいかなる性格のものであるか、マルク・ブロックが、「大ざっぱに見るならば：旧制度のもとの進化によって確立した、資本主義的形態の大土地所有者と農民的小土地所有者との共存は、革命後のフランスにおいてもなお存続したのである」⁽⁸⁾ とのべるとき、かれは大土地所有者の資本主義的側面を注視しているわけであるが、しかし、最近の研究によれば、大土地所有者のすべてが資本主義的土地所有者であることを意味しない。ブルジョワ的大土地所有者（近代地主）とならんで、貴族的大土地所有者が、フランス革命のさいの土地収用にたえて、あるいは亡命からの帰国後における権利回復によって、革命後もなお強大な勢力として残存したからである。かれらは、帝政期および王政復古期の農村社会に君臨したのみならず、一八三〇年七月革命を契期とする大ブルジョワジーの政權獲得まで、政治的大勢力としてフランスの国政を左右したのであった。⁽⁹⁾ かれらは、伝統的威光にもとづいて、高額の貨幣または現物地代を収取し、しかもただそれのみによって生活を維持した。かれらは文字通りの不耕作地主（*propriétaires non exploitants*）であり、農産物価格が上昇しつつあるこの時代に、貨幣地代よりも現物地代の収得により多くの利益を見だし、これによっていっそう強力な経済的、政治的地位を獲得していた。⁽¹⁰⁾

封建制の徹底的排除によって、「市民革命の典型」とよばれるフランス革命の後において、なおかかる土地貴族（*aristocratie foncière*）に象徴される封建遺制が指摘されることは、注目されねばならない。ここから、王政復古期のフランスの思想家たちを支配した、あの共通の意識、あの合言葉が生まれる。「われわれは革命のさなかにある、フランス革命はまだつづいているのだ。」こうしてセー（Jean-Baptiste Say, 1767-1832）は、反ナポレオン、反封建制の主張をとまう

産業主義の旗じるしのもとに、産業企業者としての新興ブルジョワジーの進路を明示し、またサン・シモン (C.-H. de R. Saint-Simon, 1760~1825) は、セーの産業主義をさらに純化、徹底することによって、いっそうあからさまに貴族的大土地所有者を批判したのであった。のちにみるように、これらの同時代人シモンディもまた、かかる封建遺制に対して明確な立場を表明するはずである。

(二) 少数の不耕作大土地所有者のかたわらには、多数の自作農 (propriétaires exploitants ou cultivateurs propriétaires) が存在した。このうち少数の大中自作農は、いわゆる富める分割地所有者 (riches propriétaires parceliaires) であって、「多くのばあい、かれらは新しい分割地を購入し、あるいはすでにかれらに属している分割地の耕作を改良しながら、もっぱらかれらの所得源泉をいっそう拡大しようとつとめた。」⁽¹¹⁾

自作農の大多数をしめる零細・小土地所有者は、いわゆる分割地農民 (payans parceliaires) の主力を構成する。かれらの多くはかつての日雇農であって、大革命のさいの国有地売却に乗じて分割地所有者となったものである。「この分割所有地は：：しかしながら、一家族全員を養なうには不十分な所有地であり、農民は所得の補充を、機械工、製糸工あるいは石工などとして、賃金にもとめなければならなかった。しかし、土地の所有者として：：分割地所有者は、価格の極端な下落の時期を除いて、その貯蔵物を売りさばくの困難を感じなかった。」もちろん、「分割地所有者は、小麦を売って身を養なうためにソバ、ライ麦などの下級な穀物を購買しなければならなかった」とはいえ、「土地所有者であるとともに賃金労働者であるという、その混合的特性によって、分割地所有者は、帝政期における農産物価格ならびに賃金の上昇運動から、きわめて恵まれた利益を収めることができた。」⁽¹²⁾

シスモンディは、のちにみるように、フランス分割地農民のこのような動向に注目するであろう。

(三) 自作農以外の農業経営として、小作農 (non-propriétaires exploitants) がいるが、これには定額小作料を支払う借地農 (fermiers) と、収穫物を地主と一定の割合で分けあう分益小作農 (métayers) がある。

借地農について注目されなければならないことは、イギリスとちがってフランスでは、大借地農の存在は例外的であったということである。「借地農はたいがい小経営地か中経営地をもっていた。それゆえかれらの経済的地位は、饑饉のさいには、収穫物の販売者であるよりむしろ購買者である、分割地経営者のそれに接近する。」⁽¹³⁾

分益小作農は、収穫物の二分の一から四分の三の高額小作料を地主に支払わなければならなかったから、自家消費分を差し引くと販売すべき何ものもあとに残らないほどの、きわめてミゼラブルな経済的地位に甘んじていた。革命による恩恵もかれらの地位を根本的に改善することはできなかった。

「分益小作農の日常生活は、執政期から王政復古期にかけて、また一九世紀全体をつうじてすら、じつさいにごくわずかしき改善されなかった。」⁽¹⁴⁾

借地農についての考察とともに、シスモンディは、分益小作農のかかるミゼラブルな地位についても考察の筆をすすめるはずである。

四 自作農、借地農、分益小作農などの経営者の下位には、農村のプロリタリアートである多数の日雇農 (journaliers) が存在した。かれらのなかには、零細な土地を所有するものもあったが、多くは土地をまったく所有せず、被傭労働によってえた貨幣または現物の賃金のみで生活を維持した。これらの農業労働者のほかに、さらに、農業経営の補助者として、大土地所有者もしくは富裕な農業

経営者に従属する、少数の管理人 (régisseurs) と多数の奉公人 (domestiques) が存在した。このうちとくに奉公人は、未分化の賃金労働者であり、日雇農の予備軍と考えられるが、かれらをふくめて、産業革命期のフランス農村社会には、日雇農、分益小作農、零細分割農地からなるおびただしい貧農層が存在することになる。この時期における農業統計の不備のため、かれらの実数を明らかにすることができないが、第二表にかかげた一九世紀末の統計は、経営主の増加と農業補助者・労働者の減少傾向を示している点で、産業革命期における貧農層の存在を、より緩和した形で表わしているとみられる。

以上のべてきたように、産業革命期におけるフランス農業の社会構造は、少数の不耕作大土地所有者ならびに富農層と、多数の零細・小土地所有者ならびに貧農層の存在によって特徴づけられる。われわれは、この特徴にもとづいて、産業革命期の農業問題の一つとして貧農問題をあげたい。⁽¹⁵⁾ 貧農問題は、すでにフランス革命前においてルソー (J.-J. Rousseau, 1712~1778) によって取り上げられ、⁽¹⁶⁾ またフランス革命にはバブーフ (Gracchus Babeuf, 1760~1797) によって取り上げられた。⁽¹⁷⁾ しかし、一八世紀において、貧農層は、農村共同体という物的基礎をもつことに

第2表 農業経営主と農業補助者・労働者の数

| 区 分 | | 1882年 | 1892年 |
|-------|-------|------------------------|-----------|
| 経営主 | 自作農 | 2,150,696 ^人 | 2,199,220 |
| | 借地農 | 968,328 | 1,061,401 |
| | 分益小作農 | 341,576 | 344,168 |
| | 計 | 3,460,600 | 3,604,789 |
| 労働補助者 | 管理人 | 17,966 | 16,091 |
| | 日雇農 | 1,480,687(a) | 1,210,081 |
| | 奉公人 | 1,954,251 | 1,832,174 |
| | 計 | 3,452,904 | 3,058,346 |

注) (a)には727,374人の、(b)には508,95

の小土地所有日雇農 (journaliers propriétaires d'un petit bien) をふくむ。M. Auge-Laribé, L'évolution de la France agricole, Paris, 1912, p. 132.

よって、その生存を、最小限度においてではあるが、ともかく保証されていたのであった。しかしながら、農村共同体は、商品経済の農村侵入にともなうて、すでに一八世紀末から崩壊の一途をたどりはじめ、フランス革命によって大打撃をこうむったのち、産業革命の進行につれて決定的に消滅する。それゆえ、産業革命期の貧農問題は、一八世紀におけるよりもいっそう鮮明にフランス農村社会の矛盾、したがってまたフランス資本主義の矛盾を表現するものとなる。

一八世紀のルソーやバブーフは、貧農問題を、崩壊しゆく農村共同体の擁護の立場から解決しようとしたのにたいして、産業革命期のシスモンディは、もはや農村共同体を前提とせず、近代的な農業政策の視点に立つて解決しようと試みるであろう。

第二節 シスモンディ経済学における貧農問題

同時代人のセーヤサン・シモンが、諸産業の全面的開花と生産諸力の増大のうちに社会発展の方向を見定めつつ、企業的農業の育成を企図したのにたいして、シスモンディは、かれらのうちのセー、あるいは総じて古典派の経済学者たちが見おとした、輝くメダルの裏面に、するどい観察の目を光らせながら、フランス産業革命期の貧農問題に直正面から取り組もうとする。シスモンディのこの視角は、かれの経済学の理念と理論構成とから、不可避的に設定される。いいかえれば、かれの経済学は、貧農問題に眼をそらすことのできない理念と論理によってつらぬかれているのである。では、シスモンディ経済学は貧農問題を、どのように内包しているか。

シスモンディ経済学の中心にある原理あるいは理念は、かれ自身の用語によれば「公益の原理」(le principe d'utilité publique)、あるいはサリスの規定によれば「生産と消費の均衡の

理念」⁽¹⁹⁾ (l'idée de la balance de la production et de la consommation)である。シスモンディ経済学の一般的性格と課題は、この原理と理念にもとづいて構成されている。

『経済学新原理』第一篇「経済学の対象と斯学の起源」の冒頭において、シスモンディは国家学 (la science du gouvernement) の目標をこう設定する。「国家学は、社会に結合された人々の幸福を目的とするものであり、また目的としなければならぬ。国家学は、かれらの本性と矛盾しない最高度の幸福をかれらに保証する方法を探究すると同時に、できるだけ大多数の個人をこの至福に参加させる方法をも探究する。」⁽²⁰⁾

国家学は、以上の目的を達成する方法にしたがって、政治学と経済学の二大部門に分類される。この分類は、人間の幸福が精神と物質の両面から成り立っていることにもとづく。すなわち、人間の精神的幸福は、憲法、教育、宗教などをおして、市民の自由の精神を高め、その知性を啓発し、その現世的苦悩をやわらげることによって獲得されるが、こうした状態に到達するための条件を国民のすべてのために整えてやるのが、政治学の任務である。人間の物質的幸福、すなわち、富を媒介として獲得される幸福を対象とする科学は経済学であるが、この科学は「政府に国富にかんする真の管理組織を教える」ものであり、「まさにその点で、国民福祉学 (la science du bonheur national) の重要な一部分である。」⁽²¹⁾

このように、シスモンディの経済学は、国家学の一部門として、政策と切りはなしがたい関係をもつ文学通りの「政治経済学」 (l'économie politique) である。そしてこのばあい、かれが経済学の対象を国民の物質的福祉に定め、その増進をもって経済学の課題とするとき、そこには、のちの社会キリスト教や初期社会主義者たちに特徴的な科学への倫理的価値の導入が認められる。⁽²²⁾ しかし、

このことの是非については、ここでは問わない。ただしシスモンディ経済学は、『経済学新原理』の二年前に出された、論敵リカードウの『経済学および課税の原理』(Principles of Political Economy and Taxation, 1817)と根本的な異なった視点に立つものであることに注意しておきたい。「分配を左右する諸法則を決定すること」をもって経済学の主題とするリカードウが、客観的、対物的視点に立つとすれば、シスモンディは、まさにそれと対照的に、主観的、人間中心的視点に立つものといえよう。

要するに、われわれがここで確認しておきたいことは、シスモンディ経済学には、「人間の幸福」という究極価値、あるいは倫理的価値がつらぬかれていて、ということである。この価値目的をはなれるならば、経済学はその存在意義を失なうであろう。かれにとって、「究極において人間の幸福に關係しないものはすべて、この科学には属しない」⁽²³⁾のである。

ところで、シスモンディ経済学が目ざす人間の物質的福祉の実現とは、「すべての市民が物質生活の享受に参加すること」であるが、さらに具体的にいえば、つぎのような秩序の確立に一つの手段を提供することである。すなわち、「富者と同じように貧者にも、生活の安楽と平穏と安息への参与を保証する秩序、いいかえれば、国民のなかの何びとをも、困窮にあえがせたり、あすへの不安におのかせたり、またかれの労働によって、かれとその家族に必要な衣食住をうるのが不可能であるようにしておかないような、生活が一つの享楽であって重荷ではないような秩序」⁽²⁴⁾がそれである。

国民の物質的福祉の実現とは、こうして、シスモンディ経済学の中心原理ともいえる「公益の原理」の貫徹を意味するものとなる。シスモンディが、産業革命によって増大する工場プロレタリアートとともに、農村の貧農にたいして眼を閉じることのできない理由は、かれが経済学に托した以下の使命

によって、もはや明らかであろう。

しかしながら、「公益の原理」あるいは「国民の物質的福祉」という視点にとどまっているだけならば、かれは社会思想家ではありえても、経済学者とはなりえないであろう。だがかれは、この視点を、さらに「生産と消費の均衡」という視点におきかえることによって、「人間の幸福」という人類の一般的願望を、経済理論の領域において純化し、具体化しようともくろむ。そしてかれが、「生産と消費の均衡の理念」に立って、現実の経済社会を観察したとき、その結論はあまりにかれの理念からかけはなれたものであった。かれは産業資本の循環過程の分析をつうじて、現実の経済社会が、生産と消費、富と人口の不均衡を、したがってまた一般的過剰生産恐慌を必然化する非情なメカニズムをそなえていることを、はっきりと理解するのである。⁽²⁵⁾かれが確認した資本運動のメカニズムは、ほぼつぎの図式によって表わすことができる。

資本蓄積—生産力増大—競争の激化—機械制による生産費節減—労働力需要の減少—相対的過剰人口の形成—勤労者階級の所得低下—有効需要の減退—内外販路の閉塞—過剰生産恐慌の発生。

シスモンディのこの論証が、恐慌の必然性を否定しつつ、ひたすらに生産の拡大と資本の蓄積のみを追求する古典派の経済学者、わけてもセー法則の信奉者たちへの、するどい批判を意味するものであることはいうまでもない。しかもシスモンディは、たんに資本循環のメカニズムを説明して、これについてのセーヤリカードウの理論的欠陥を導^指摘するだけにとどまらない。かれは、このメカニズムを修正して、「生産と消費の均衡」を回復する条件を見いだそうとする。

この条件を、農業において見いだすためには、まず第一に、つぎの事実に対して態度を決定しなければならぬ。すなわち、一方では、自作小農経営を分解の危機にさらしている資本主義的農業の展

開。他方では、封建遺制の存続と資本主義的農業の展開という、二重の圧力のもとに窮乏する貧農層の存在。

シスモンディは農業経営制度の比較史的考察をつうじて、農業の経営組織と経済主体の選択を含む、以上の事実に対する態度決定をなしつつ、農業のなかに国民経済の均衡回復の条件を探究する。

第三節 比較農業経営制度史論

国民経済における農業の役割について、シスモンディは、『新原理』第三篇「土地の富について」の冒頭において、まずつぎのようにのべる。「土地に由来する富は、あらゆる富のなかで最も必要なものである。というのは、すべての人々の食料は土地から生じるはずだからである。また土地の富は、他のあらゆる事業に原料を供給し、さらに国民の少なくとも半数、通常はその過半数を農業経営に雇用する」⁽²⁶⁾。そして土地の富は地主・農業者・農業労働者の所得として分配されるが、かれらの所得の一部は租税として政府の所得を形成し、また一部は都市産業の諸生産物と交換されることによって、国民の残余の人々の所得を増加させる。それゆえ、「土地の富の増進は、より直接的に所得を増加させるながら、この増進につづく他のあらゆる富の増進に衝動をあたえるとみられる」⁽²⁷⁾。

このようにシスモンディは、国民経済における農業の役割を、おそらく基本的にはケネーの「経済表」における富の循環図式を念頭に置きながら、食料および原料の生産、雇用の拡大、政府財政の確立、他産業の発展促進ならびに国民所得の増大に見いだす。そして農業の以上の役割は、純生産物 (product net) ではなくして、総生産物 (product brut) の増大によってのみ果たされるとシスモンディは考える。かれによれば、純生産物の増大は国民経済に富の生産と消費の不均衡をもた

らずが、総生産物の増大は、反対にその均衡をもたらす。したがって、「総生産物、あるいは収獲物の総額によって、全国民の食料が確保され、全階級の安楽が保証される」ことになる。純生産物の増大は「有閑な富者の所得」の増加を意味するが、総生産物の増大は、「農業に従事するすべての人々およびこれに資本を使用するすべての人々の所得」を増加させる。それゆえ、「総生産物を犠牲とする純生産物の増加は：：ひとつの大きな国民災害である。」²³

こうして、純生産物の視点に立つて地主階級の利益を擁護するケネー経済学は、総生産物の視点に立つて「公益」と「均衡」を主張するシスモンディによって、きっぱりと拒否される。

ともかく、さきにあげた国民経済における農業の役割は、農業内部ならびに農業と他産業との間における「生産と消費の均衡」を前提としてのみ果たされる。したがって、シスモンディが農業に期待した最大の機能は、国民経済における「生産と消費の均衡」の中心としてのそれである、といつてよかるう。ではこうした機能は、いかなる農業経営においてもっともよく果たされるだろうか。これはこれに答えるために、ヨーロッパ諸国ならびにアメリカ合衆国の過去および現在にみられる、つぎの七つの農業経営制度に比較考察の筆をすすめる。

それは、家長的経営 (exploitation patriarcale) / 奴隸制経営 (exploitation servile) / 分益小作経営 (exploitation par métayers ou à moitié fruits) / 賦役経営

(exploitation par corvées) / 人頭税経営 (exploitation par capitation) 賃貸小作経営 (exploitation par bail à ferme) および永代小作経営 (exploitation par bail emphytéotique) である。これら七つの農業経営制度を、シスモンディは大別して三つの経営制度に分類しているように思われる。すなわち、前近代の農業経営制度、資本制農業経営制度および自作

農経営制度がそれである。以下、この三つの経営制度にもとづいて、かれの比較農業経営制度史論を整理しつつ、そこからかれ独自の農業経営思想を抽出してみたい。

一 前近代的農業経営制度

これにあてはまるのは、奴隸制経営、分益小作経営、賦役経営、人頭税経営および永代小作経営の五つである。シスモンディは、ローマ時代にみられた奴隸制経営、東欧諸国に普及する賦役経営、および農奴制と結びついたロシアに特徴的な人頭税経営を、農業に課した過酷な条件と耕作者に強制した悲惨な生活のゆえに、はげしく非難、攻撃する。しかし、ヨーロッパ大陸諸国に普及し、わけでもイタリアに典型的な分益小作経営については、「おそらく中世の最も幸いな創作物の一つである」⁽²⁹⁾として、高く評価する。

分益小作農は、政府に直接、税金を支払う必要も、また地主に金納地代を支払う必要もないから、無理に農産物を販売することもなく、自給自足の生活に甘んじうる。かれは、地主の前貸しに依存してさえいれば、資本もいらぬし、借金に追われる心配もない。シスモンディは、分益小作農の牧歌的な幸福の極致を、イタリアのトスカナ地方の農村に見いだして、これを賛美する。かれのロマンティズムと懷古趣味が指摘されるのは、とりわけこの点においてである。だが注意しなければならぬことは、かれの分益小作農賛美は、他の前近代的経営諸制度との比較におけるそれである、ということである。歴史家シスモンディの觀察眼は、つねに相対的である。

「じっさい、分益小作経営は耕作者の境遇についての最初の進歩ではあるが、しかしそれは、つぎにつづく他の進歩を保証するのに十分な唯一のものではない。農民の境遇はかなり幸福であるとしても、それはいつも同じなのだ。息子はいぜんとしてその父がおかれていた状態にとどまり、もっと裕

福になろうと夢みることもなければ、現状をかえようと努めることもけっしてない。」⁽³⁰⁾

こうしてシスモンディは、分益小作経営についての描写をイタリアからフランスへ移しながら、反革命の拠点となったロワール南部地方やヴァンデ地方の文化的、経済的後進性を、これらの地方における貧困で無知な分益小作農の広汎な存在に帰着させる。

さいごに、イタリアやイギリスにみられる永代小作経営は、一方では、耕作者をなかば土地所有者たらしめるが、他方では、真の小作人として、耕作者はその労働の成果を地主によって吸い上げられてしまう。つまり永代小作経営は、シスモンディによって長所と短所の両面をもつ制度とみなされる。

前近代的農業経営制度の考察をつうじてシスモンディが主張しようとしたのは、古代的、封建的土地所有が、農業の自然的進歩を著しくゆがめて、生産力の停滞と農民の貧困をもたらすという事実である。この主張の背後にフランス革命の理念が脈動しているのを、われわれは感じる。それゆえ、シスモンディが農業の正常な発展と貧農の解消を望むかぎり、何よりもまず必要なことは、この前近代的土地所有関係を切断することである。それでは、農業のなかに資本主義的生産関係を導入すべきであらうか。

二 資本制農業経営制度

シスモンディは、賃貸小作経営の事例をイギリスの大農制にもとめ、これについての分析をつうじて、資本制農業経営制度に対するみずからの立場を明らかにする。このばあい、イギリスの大農制を例としながらも、シスモンディはヨーロッパ大陸諸国の小農制の将来を憂慮していた、とみななければならない。というのは、『新原理』そのものが、つぎの問題意識にもとづくものだからである。「諸君の注意をイギリスにひきつけながら、わたくしはイギリスで経験している恐慌のなかに：：われわ

れの現在の苦悩の原因を示し、そして、イギリスがたどった諸原理にしたがって行動をつづけるならば到来するであろう。われわれの未来の物語を示そうとした。」⁽³¹⁾

まずシスモンディは、イギリスにおける農業革命の成果をこう評価する。「イギリスはきわめて高度の繁栄を実現し、一見したところでは、この国が大農制によってこうむっている不都合をまったく認めがたいほど、自然科学の農業への応用、家畜品種の改良、肥沃にする耕作や巧妙な機械の改良を、きわめて高度に進めた。」⁽³²⁾ それゆえ、「農学がイギリスにおいて、大農制のおかげでなしとげた巨大な進歩を否定することはできない。」⁽³³⁾ しかしながら、イギリスにおいて資本主義的農業が成功したのは、借地農が、消費者と地主と耕作者の犠牲において、自己の利潤を増大しえたからである。すなわち「借地農はその商品をより高価に売るか、あるいはより低額の小作料を支払うか、あるいは日雇農を最低の賃金でがまんするよう強制するかによって、その利潤を増加することができた。」⁽³⁴⁾

こうしてシスモンディは、大農制の進行が耕作者・地主・消費者にどのような影響を与えるかを論証する。

(一) 多額の資本をもつ大借地農は、多数の小農経営を一つの大農場に統合することによって、独立自営農民を日雇農に転落させ、かれらに、「分益小作農のみならず、多くの点で、人頭税や賦役を支払う農奴よりも、いっそう従属的な状態」⁽³⁵⁾ と「窮乏状態」を強制する。それだけでなく、大農経営は、生産費節減のために機械を導入することによって、「ついには日雇農の存在を無用のものにする。」⁽³⁶⁾ こうして、大農制によって「収獲物は著しく増加するのに、これを生産する人々は、過度の労働で十分な衣食をあがない、貧困のうちに衰弱する。」つまり「耕作者階級は豊富のただなかで苦悩することになる。」⁽³⁷⁾

このように大農制は、小農経営を分解して農村に過剰人口を堆積させ、小農民の所得低下と過小消費を生み出す。そしてこのことは、都市における機械制工業の成立による労働力の排除と相まって、農業内部においてのみならず、国民経済全般にわたって、生産と消費の不均衡を拡大する。

(二) 地主に対して大農制は、地代の低下をもたらすから、マイナスの作用をするとシスモンディは考える。これはもっぱら土地生産性の相違にもとづく。いいかえれば、純生産物を目的とする大農制は、総生産物の増加をめざす小農制よりも、より低い地代をもたらす。⁽³⁸⁾

(三) 消費者に対してはどうか、シスモンディによれば、大農経営は小麦の生産や大家畜の飼養には適するかも知れないが、繊細な人手を要する生産には不適当である。そのため「富める借地農は、小麦と家畜の取引だけに没頭し、儲けは少ないが多くの楽しみを大陸の貧しい世帯にもたらしている。あらゆるこまごました農業は、かれには無価値に思われ、かくしていっさいが小麦を生産するために犠牲にされた。」⁽³⁹⁾ その結果、「消費者は果物も鳥肉も乳製品も野菜も手に入れることができない」⁽⁴⁰⁾ 状態に追いこまれている。しかも小麦の生産ですら、市場生産めあての大農制にあっては、価格変動に応じて、時として放棄される。

以上のように、イギリスに典型的にみられる資本制大農経営は、耕作者、地主、消費者など、要するに大多数の国民の利益に反して成立した。富める借地農はこうしてますます富を著積した。だがそれは国民経済における生産と消費、富と人口の不均衡を拡大することによってである。このことは、「公益の原理」にもとづいて、つぎのよな主張するシスモンディにとって、許すことのできない資本の暴力であった。「国富の増進が公共の貧困と死亡を代価として獲得されるとするならば、それは幻覚というものだ。」⁽⁴¹⁾ 「諸国民は、その所得を増加させるときに富裕になるのであって、その諸階

級のうちの一階級の所得が他の階級によって収奪されるときに富裕になるのではない。」⁽⁴²⁾ ひととはここに、ピグーの経済的厚生⁽⁴¹⁾の命題が素朴な形で表現されているのに気づくだろう。

ともかく、資本制農業経営制度が、とりわけ小農民にたいして「豊富のなかの貧困」を強制し、究極において国民経済を破綻にみちびくものだとするならば、ヨーロッパ大陸諸国における農業経営制度は、イギリスとは異なった方向に設定されなければならないだろう。これについての解答を、シスモンディは、七つの経営制度のうちで最後に残った、家長的経営についての考察をとおして用意する。

三 自作農経営制度

前近代の農業経営制度と資本制農業経営制度を拒否したシスモンディは、奴隷制に汚される以前にすでに「古代のあらゆる諸国民の歴史のなかに見いだされる」⁽⁴³⁾ 家長的経営が、なおヨーロッパ大陸諸国およびアメリカ合衆国において存続していることに注目する。かれにとって家長的経営は、いわば社会の始原に存在する農業経営の自然状態を示すものだったのである。かれは、この家長的経営が、一方では農業に対する前近代的支配を排除し、他方では資本主義的大農制の侵入を阻止しつつ、それ自身の特性を発揮しながら発展してゆく可能性を、スイス、アメリカおよびフランスの自作農経営についての考察をつうじてたしかめようとする。

このばあい、シスモンディはこの経営制度を強く擁護するのであるが、その理由は、これが、あらゆる経営制度のなかで、「公益の原理」あるいは「生産と消費の均衡理念」を、最高度に実現していると考えからにほかならない。かれはまず、スイスの自作農に典型的にみられるつぎの五つの特性のうちに、この原理あるいは理念の具体的表現をみるのである。

(一) 農業生産の永続的確保 家長的経営は、土地を私有し、これを子孫に伝えることを原則とす

るから、「土地の耕作者にたいして、ずっと後の時期まで、その労働の成果を完全に享受する確実性をあたえる。」⁽⁴⁴⁾ それゆえ、あらゆる産業のなかで最も長期間にわたる生産活動——たとえば植林、灌排水工事、干拓、土地改良など——を必要とする農業は、家長的経営においてのみ、その生産の永續性を確保することができる。

(二) 土地への愛着心にもとづく農業の改善 「土地所有者が自分で耕作する土地に対していただく情愛は、農業の完成にとって大きな刺激のひとつである。」⁽⁴⁵⁾ なぜなら、自作経営のために投下するいっさいの労働は、たんに金銭上の利益のみを求めているのではなく、むしろ、「労働そのものがひとつの喜び」であるといった、心の満足を求めているから。

(三) 経験と知識の集積による農学の進歩 家長的経営においては、「各々の畑の固有の性質が吟味され、その知識は父から子へと伝達され、各々の畑に適した穀粒、播種の適期、雹や霜の危険、それらのいっさいが注意され：：どんな小さな農場でも、ある土地の区画と他の土地の区画との相違について、はっきりした観察がなされていないものはない。」⁽⁴⁶⁾ 父子相伝の経験と知識は年々集積され、こうして農学 (science rurale) の進歩がもたされる。

(四) 土地所有と生活安定にもとづく農民の徳性の涵養 家長的経営においては、「土地財産が秩序と節約の習慣をあたえ、日常の豊かさは暴食と泥酔の風習をやめさせる。」また自作農は、「ほとんど自然とだけ交換をいとなむので、他の勤働者のいづれよりも人を疑う機会や相手の悪意ある攻撃を反論する機会をもつことが少ない。」⁽⁴⁷⁾ 要するに、そこには無秩序やごまかしのかわりに秩序と誠意がみられる。

(五) 土地の分割相続による農家間の所得の均衡と人口の自然的調節 家長的経営においては、世

襲地の適宜な分割によって、各農家の所得は均等化する。しかし、「農業人口は、各家族が労働を必要とし、かつそれによって安楽に生活しうるほどに土地の分割が行なわれる時までには、停滞する」⁽⁴⁸⁾から、結局、「農民の世襲財産が相応の安楽を損うほどに細分されることはけつしてみられない。」⁽⁴⁹⁾つまり、家長的経営においては、所得と人口、生産と消費は自然に均衡する。

以上のように、ジスモンディはスイスの小農に典型的にみられる家長的経営の特性を、賛美をもって記述したのち、この経営の特殊型ともいうべきアメリカの自作農経営について、つぎのように論評の筆を進める。

「合衆国の住民は：：家長的経営を知っているだけ」だが、「アメリカでは、土地そのものが不断の投機の対象となっている。耕作者は安楽な状態にとどまることを考えずに、金持ちになることだけを考えている。」⁽⁵⁰⁾ このこと自体は、「この国の急速な繁栄の原因の一つ」ではあるが、しかしそれは同時に、「消費の必要に対するあらゆる種類の商品の過剰」⁽⁵¹⁾を生み出している。さらにそこでは、儲けることが人生最大の関心事とされ、そして、地上で最も自由な国民において、自由そのものが利潤の前にその価値を失なった。⁽⁵²⁾ 要するに、打算の精神がアメリカの道徳や文化に頹廃をもたらしている。

アメリカの家長的経営の末路がそのようなものとすれば、この道は、たとい「急速な繁栄」に結びつくとしても、ヨーロッパの自作農経営が進むべき方向ではない。しかし、スイスの家長経営に安住するかぎり、イギリス的な資本制大農経営の侵入する恐れは去らないだろう。残された道は、自作農経営の独自の発展コースを設定することである。ジスモンディはこのコースを、革命によって広汎に創出されたフランス分割地農民の動向のうちに見いだす。

「イギリスにおいて、農民階級は急速に滅亡に向っているのに：フランスではそれが生長し、強固となり、かつ手労働を放棄せずに豊かな生活を楽しみ、知能を啓発し、そして、ゆっくりとではあるが科学上の諸発見を取り入れている。長年の戦争も重税も、土地所有権の取得が農村住民にもたらした進歩を妨げることができなかったのだ。」⁽⁵³⁾ これらの自作農民は三〇〇万家族、一、五〇〇万人以上に達すると推定される。このほか借地農も存在するが、フランスでは、イギリスのような大土地の一括借地よりも、むしろ分割借地 (amodiation parcelaire) が普及している。しかもなお、「日ごとに大世襲地の分割がつづき、日ごとに大土地がそれを耕作する借地農に有利に売却されている。国民が所有地の細分から期待しうるあらゆる成果をおさめてしまうのは、まだ遠い先である。」⁽⁵⁴⁾ このようにシスモンディは、革命によって法的基礎を獲得したフランス分割地農民が、封建制的な大世襲地の分割をおし進め、資本制大農経営の脅威を排除して、なお生成、増大の過程にあることを確認する、「公益の原理」・「生産と消費の均衡理念」を体现する、スイス小農民に典型的にみられた家長的経営の五つの特性は、かくしてフランス分割地農民によって発展的に継承されてゆくこととなる。

第四節 自作農主義政策論

フランス分割地農民の動向は、シスモンディにとって、同時にヨーロッパ大陸諸国の小農の発展方向を指示するものである。そしてこの発展は、農民に対して土地所有権が確保されているかどうかにかかっている。いいかえれば、農業の発展をはかるためには、フランスにおけるように、農民の土地所有権が法的に保証されなければならない。「農業の総生産物は、土地所有にあたえられる保証に応

じて急速に増加する。耕作者とともに、都市に住む国民の他の階級を養いうるほどの土地生産物の増加は、土地が：法の保護のもとに置かれてのみ可能となる。⁽⁵⁵⁾

すでにのべたように、シスモンディによれば、純生産物ではなくて、総生産物の増加のみが国民全体に、公益と均衡をもたらし、しかも総生産物の増加は、資本制大農経営ではなくて、自作農経営（アメリカ型を除く）によってのみ果たされる。したがって、農民的土地所有権の確立は、とうぜん総生産物を増加させ、これによって「公益」が実現される。それゆえ、土地所有権は「公益の原理」によってのみ基礎づけられることになる。

「土地の専有が根拠づけられるのは、正義の原理にもとづくものではなくて、公益の原理にもとづくものである」。「全体の幸福のみが土地所有を正当化したものであるから、社会は土地所有を、じっさいにそれから全体の幸福がもたらされるような立法のもとにおくべきである」。「社会が最初の占有者の権利を保証したのは、土地の所有者が耕作をより高度の段階に高め、それによってすべての階級により多くの富裕をもたらすという条件にもとづくものである。」⁽⁵⁶⁾

要するに、農業の総生産物を増加させて「公益」をはかり、「生産と消費の均衡」を実現するためには、耕作者に土地所有権を保証しなければならぬ。このような土地所有観に立って、シスモンディは政府がとるべき農業政策をつぎのように提案する。

「農業人口にかんして、政府の一般的任務は、労働する人々に土地所有の一部を保証し、あるいは他のすべての経営に先んじて、われわれが家長的経営と名づけた経営を援助することにある。過大な世襲地は、かくしてけっして耕作されえなくなる。それゆえ立法は、全体の利益にもとづいて、無限の分割を阻止するとともに、また最も巧妙な努力にもとづいて、いくらか大きい財産が絶えず再生さ

れるように、過大な世襲地を分割しやすくしなければならぬ。しかしながら、自由を尊重して立法者は一般的、間接的方法しか採用すべきではないから、その任務はつぎのことにかぎられる。すなわち、不動産の売却を最大限に容易ならしめ、相続財産の分割を家族内に維持し、土地財産を束縛しているあらゆる制約、あらゆる永代限嗣相続を禁止して、各農民にその願望の目標として小世襲地の獲得を企図させる利益を、土地の取得に結びつけること。⁽⁵⁷⁾

以上をながと引用したが、要するにシスモンディは、既存の自作農を保護してその分解を阻止するとともに、さらに大世襲^地の分割と流動化を促進することによって、新たに適正規模の自作農経営を育成しようとするのである。土地改革による地主制の排除と自作農の創設・維持、それによる資本主義的大農制の阻止、これがシスモンディの農業政策論の骨子である。ただしかれは、この政策を急激に実施しようとするものではない。かれがつぎのように提案するとき、かれは「日雇農—小作農—自作農」という、ゆるやかなコースを構想していたとみるべきであろう。

「新しい法律は、大土地所有者に、分割借地、永代借地および長期売却によって、かれらの所有地の一部をその日雇農のために割譲するように、あらゆる便宜をあたえるべきである。」⁽⁵⁸⁾そしてこの提案は、さきにシスモンディが指摘しているように、現に分割借地が進行しつつある、フランス農業の動向にも沿うものである。

しかも、シスモンディの土地改革案は貧農問題の解決につながる。すなわち、「もしもすべての土地所有者が、その土地を自分の腕をもってみずから耕作し、自分の力が十分でなくなればその土地を子供たちの間に分配し、また自作農階級がその自然的限界にまで、すなわちその土地を経営するのにかれらの労働力で足りるまでに増大するならば、日雇農、したがって農村における貧民、農業の負担

となる救貧税は、まったくなくなることは明らかである。」⁽⁵⁹⁾ かくして貧農の消滅は、現に救貧税を負担している地主階級にとっても有利なものとなる。

このようにして、「こんにちフランスでひろく行なわれている分割借地や大所有地の分売が、イギリスで行なわれている小農場の大農場への日々の兼併の後を引きつぐ」⁽⁶⁰⁾ ならば、フランスをはじめヨーロッパ大陸の国々において、「イギリスがこんにちたどっているのとは、まったく反対の方向が農業経営全体に刻印されることになるだろう。」⁽⁶¹⁾

要約すれば、シスモンディの農業政策論は、間接的な立法手段にもとづく漸進的な土地改革によって自作農を保護、育成し、これを国民経済における「生産と消費の均衡」の中心たらしめようとするものである。貧農問題は、この自作農主義 (Morceillisme) の政策によって解消されるはずである。

結 語

フランス産業革命期の農業問題を貧農問題としてとらえたシスモンディは、この原因を、一方では農業における前近代的経営制度の残存に、他方では資本主義経済の農業への侵入に求め、これを解決する方法として、革命後に、生成、増大の過程をたどりつつあった分割地農民の動向に注目し、これをいっそう広汎に創出するための土地改革を提唱した。

この主張の基礎となっているシスモンディの現実認識は、この時期のフランス農業の社会構造に照らすとき、相応の妥当性をもつものであることが了解される。それはフランス農業史研究の貴重な資料たることを失なわない。さらにまた、農民的土地所有を擁護し、自作農経営の発展をはかろうとしたシスモンディの企図―それはフランス革命の民主主義と、かれ自身の主張する「公益の原理」・「均

衡の理念」の実現を意味する―は、アンリイ・セエがつぎのようにのべるとき、その後のフランス農業の歩みにおいて実現されるとみられる。

「工業の進歩にもかかわらず、一九世紀においてもなお存続する農村的土地所有 (Propriété rurale) と農業生産の優越は、フランス文明の永続的特徴となっている」。すなわち、「現代においてもなお、フランスは農村民主主義の原型をとどめている。西欧において、フランスは工業の発展によって均衡が破れなかった唯一の大国となった。」⁽⁶²⁾

しかし、反面において、農民的土地所有の広汎な存在が、フランス農業に停滞をもたらすにいたったことも事実である。一八五二年に、マルクスはフランス分割地農民についてこうのべている。

「かれらの生産方法は、かれらをたがいにもすびつけるかわりに、たがいに孤立させる。この孤立は、フランスの交通手段の劣悪さと農民の貧困によってさらにつよめられている。かれらの生産の場たる分割地は、その耕作にさいして分業をゆるさず科学の適用をゆるさず、したがって発達を多方面にもたらしすことも才能を多岐にすることも社会関係を豊富にすることもゆるさない。」⁽⁶³⁾

マルクスのこの指摘は、「国民が所有地の細分化から期待しうるあらゆる成果をおさめてしまうのは、まだ遠い先である」と考え、分割地農民の前途を樂觀視したシスモンディの歴史的限界を示している。

しかしレーニンのように、シスモンディは「現実の経済発展を無視」し、「古ぼけた旧時代の家父長制的諸条件を再生」⁽⁶⁴⁾しようとしたとし、そのゆえにかれを「反動家」「感傷家」あるいは「ロマン主義者」とよぶことは、それこそ余りに感情的非難にすぎよう。歴史の歯車を逆転させることの愚かさを知らないほど、シスモンディは非歴史的ではない。かれはいう、「国民的發展はあらゆる方面

に自然に進行する。これを阻止することはほとんどいつでも無謀である」⁶⁵⁾と。ただかれは、こうつけ加えることを忘れなかっただけである。「それを促進させることもやはり危険である」と。

シスモンディがのぞんだのは「均衡」のとれた経済社会であり、「公益」を実現する手段としての経済発展である。そしてかれは、自作農経営の発展のうちに、「公益の原理」と「均衡の理念」の實現をみ、かつ期待したのであった。もちろん、土地所有権に執着した排他的、個人主義的な自作農主義は、まさにこの同じ「公益」の観点そのものから、現在ではすでに時代おくれになろうとしている。こんにち、耕作権あるいは経営権にもとづく新しい経営制度が胎動しつつあるからである。しかしながら、農民家族を基礎とした適正規模の農業経営の漸進的発展のうちに、国民経済の均衡の中心をみようとしたシスモンディの視角は、現在もなお有効性を主張しつづけることができる。

(注)

- (1) シスモンディは歴史家および文学者としては、『中世イタリア共和国史』(全一六卷、一八〇七—一八一八年)、『南欧文学論』(全四卷、一八一三年)、『フランス人の歴史』(全三一卷、一八二一—一八四四年)、『ローマ帝国の没落と文明衰退の歴史』(全二卷、一八三五年)などの著者として知られている。経済学者としては、農業経済(技術を含む)にかんする処女作『トスカナ農業概論』(Tableau de l'agriculture de la toscane, 1 Vol., Genève, 1801)、『アダム・スミスの祖述を試みた『商業的富につづく』(De la richesse commerciale ou principes d'économie politique appliqués à la législation du commerce, 2 vols., Genève et Paris, 1803)のほか、『晩年の論文集』、『社会科学研究』(Études sur les sciences sociales, 3 vols., Paris, 1836—1838)ただし、うち第二、第三卷は『経済学

研究』Etudes sur l'économie politiqueと題されてゐる）があるが、かれの経済学の真髓が『経済学新原理』に集約されているとみることは、すでに定説化されている。たとえば、シュムペーターはこうのべている。「経済学者としてのシスモンディの名声は、一八一九年に出版されたその著『経済学新原理』にもとづいてゐる。……かれのその後の著作、たとえば『経済学研究』（一八三七～八八年）は、かれの主眼点——およびかれの要求——を強調し、展開してゐるが、本質的に新しいものを少しもつけ加えなかった」。Joseph Schumpeter, History of Economic Analysis, New York, 1954, p. 493. 東畑精一訳『経済分析の歴史』（三）一〇四一ページ。

本稿では『新原理』のテキストとして第三版（2 vols. Genève et Paris, 1951）を使用する。引用文は皆間正朔訳（世界古典文庫、（上）（下）、一九四九～五〇年）を参照するが、訳文は必ずしもこれにしたがわなす。

- (2) Cf. G.H. Bousquet, Essai sur l'évolution de la pensée économique, Paris, 1927, pp. 176~177.

(3) この問題については、さし当たって吉田静一『市民革命と資本主義』一九六四年、「前篇」を参照していただきたい。

(4) 平田清明「シスモンディの分割地所有論」（『商学論集』第二九巻第四号、第三〇巻第一号）

(5) レーニン「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」（『レーニン全集』大月書店刊、第二巻・上、所収）

(6) ダンハムはフランス産業革命を、一八一五～一八四八年を初期とし、一八六〇年以降を完成期として段階づける。

A. L. Dunham, The Industrial Revolution in France, 1815~1848, New York, 1955.

P. 433 産業革命の進行は、産業部門や地域によってそれぞれ異なるから、その発展段階を厳密に規定することは困難である。しかしフランス産業革命は、ほぼその政治的変革に対応した段階を画しているとわたしは考える。

(7) フランス産業革命の胎動期にあたる王政復古期の農業史研究は、フランスでもようやく緒についたばかりであり、したがってこの時期の農業・農民問題を明示するにたるデータをうることは、現状では困難である。これは主として、フラ

ンスを以て、不完全ながら全国的な農業統計が行なわれるのは一八三六年、やや正確な統計が現われるのは一八六二年以後、一〇年ごとに調査実施、ただし一八七二年は普仏戦争の影響で中止) になってから、という事情によるものである。

- (8) Marc Bloch, Les caractères originaux de l'histoire rurale française, nouvelle éd. Paris, 1952, P. 248. 河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』一九五九年、三二八～三二九ページ。

- (9) Jean Lhomme, La grande bourgeoisie au pouvoir (1830-1880) Paris 1960.

- (10) A. Chabert, Essai sur les mouvements de revenus et de l'activité économique en France de 1798 à 1820, Paris, 1949, pp. 77-78.

- (11) A. Chabert, op. cit., p. 80.

- (12) A. Chabert, op. cit., pp. 81.

- (13) A. Chabert, op. cit., p. 84.

- (14) A. Chabert, op. cit., p. 86.

- (15) フランス革命が手をつけることができなかった、したがって問題の解決を一九世紀に持ち越すことになった貧農層は、一千万に達するとさう。河野健二『フランス革命とその思想』一九六四年、二〇五ページ。

- (16) 河野健二「農民史におけるルノー」(同書第二章)を参照。

- (17) Cf. George Lefebvre, Les origines du communisme de Babeuf (Études sur la Révolution française, Paris, 1954, p. 305 suiv.)

- (18) Cf. Albert Soboul, La communauté rurale à la fin du XVIII^e siècle (Le mois d'ethnographie française, N° 3, avril 1950) et La question paysanne en 1848.

(La Pensée, Nos 18, 19, 20, 1948) 飯沼二郎・坂本慶一訳『資本主義と農村共同体』一九五六年。

- (19) J. R. de Salis, Sismondi, la vie et l'oeuvre d'un cosmopolite philosophe, Paris, 1932, p. 408. Cf. aussi Henryk Grossman, Simonde de Sismondi et ses théories économiques Varsoviae, 1924, p. 13.

- (20) Nouveaux principes d'économie politique 3^e éd. t. I, Genève et Paris, 1951, p. 34. 訳書(上) 四一ページ。

- (21) Ibid., p. 38. 同書, 四五ページ。

- (22) シスモンディの影響下にあり、かつかれと同様、科学に倫理的価値を導入したものに、「新キリスト教」に依拠するサン・シモン派、『キリスト教経済学』(Économie politique chrétienne, 1834)の著者ヴィンヌー・バネンチン(Villeneuve-Bargemont)なども。

- (23) Nouveaux principes d'économie politique, 3^e éd. t. I Genève et Paris, 1951, p. 34. 訳書(上) 一九〇ページ。

- (24) Nouveaux principes, t. I p. 38. 訳書(上) 四六ページ。

- (25) 恐慌論は、これまでのシスモンディ経済学研究の中心テーマであり、これにかんする文献はかなりあるが、さし当ってこの論文のみをあげておく。中村賢一郎「シスモンディ恐慌論の研究」(『政経論叢』第二八巻第一号)。

- (26) Nouveaux principes t. I p. 132. 訳書(上) 一四七ページ。

- (27) Ibid., p. 249. 同書, 二五四ページ。

- (28) Ibid., p. 134. 同書, 一四九ページ。

- (29) Ibid., p. 161. 同書, 一七四ページ。

- (30) Ibid., p.163. 同書、一七七ページ。
- (31) Ibid., p.26. 同書、三六九ページ。
- (32) Ibid., p.193. 同書、三八六ページ。
- (33) Ibid., p.387. 同書、三八七ページ。
- (34) Ibid., p.186. 同書、二〇一ページ。
- (35) Ibid., p.183. 同書、一九八ページ。
- (36) Ibid., p.189. 同書、一八九ページ。
- (37) Ibid., p.135. 同書、三七九ページ。
- (38) Cf. Ibid., pp. 194~195, 241. 同書、三八八、二四四ページ。
- (39) Ibid., pp.193~194. 同書、三八七ページ。
- (40) Ibid., p.195. 同書、三八八ページ。
- (41) Ibid., p.189. 同書、二〇五ページ。
- (42) Ibid., p.284. 同書、二九〇ページ。
- (43) Ibid., p.149. 同書、一六五ページ。
- (44) Ibid., p.143. 同書、一五八ページ。
- (45) Ibid., pp.143~144. 同書、一五九ページ。
- (46) Ibid., pp.144~145. 同書、一六〇ページ。
- (47) Ibid., pp.145~146. 同書、一六一~一六二ページ。
- (48) Nouveaux principes t. II, p.227. 訳書(下)二五二ページ。

- (49) Nouveaux principes, t. I, p. 147. 訳書(上) 一六三ページ。
- (50) Ibid., p. 146. 同書' 一六二ページ。
- (51) Ibid., p. 337. 同書' 三四七ページ。
- (52) Ibid., p. 338. 同書' 三四八ページ。
- (53) Ibid., p. 191. 同書' 二〇七ページ。
- (54) Ibid., pp. 148~149. 同書' 一六五ページ。
- (55) Ibid., p. 138. 同書' 一五三ページ。
- (56) Ibid., pp. 139 140 142. 同書' 一五四' 一五五' 一五七ページ。
- (57) Nouveaux principes, t. II, pp. 227~228. 訳書(下) 二五三' 二九七' 二九八ページ。
- (58) Ibid., p. 238. 同書' 二六四ページ。
- (59) Ibid., p. 233. 同書' 二五九ページ。
- (60) Ibid., p. 238. 同書' 二六五ページ。
- (61) Ibid., p. 237. 同書' 二六三ページ。
- (62) Henri Sée, La France économique et sociale au XVIII^e siècle, 4^e éd. Paris, 1946, p. 187. 5.
- (63) マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』(岩波文庫) 一四四ページ。
- (64) ハーニン「経済学的ロマン主義の特徴づけに よせて」『ハーニン全集』第二巻、上、二三三ページ。
- (65) Nouveaux principes, t. I, p. 330. 訳書(上) 三四〇ページ。

第四章 フーリエの農業思想

課 題

社会思想史上、シャルル・フーリエ（François-Marie Charles Fourier, 1772-1837）ほど、理解するのに困難をさわめる思想家もめずらしいであろう。とりわけ、かれの新造語使用癖は、日本語でかれの思想を説明するのをいっそう困難にする。また、惑星の生殖や海水がレモン水に変わるといった突飛な着想は、かれの正気を疑わせるのに十分である。フーリエ思想の不可解さは、フーリエの研究者であるジイドですらつぎのように述懐せざるをえなかったことによっても、おおよそが察せられるであろう。

「じっさい、これらのおびただしい書物をみると、目次もなければページ付けも連続していない：あるページは途中で突然わけもなく論証が変り、またあるページは、活版屋が整理棚の全活字をぶちまけたようにみえ、XやYが本物のサラバンド舞りをおどっているかのように、あるいは直立し、あるいは横に倒れ、あるいは逆立ちしており、いっさいがこのように、ひどく傳説的な時代にかかれた妖術師の魔法書のような印象をあたえる。」⁽¹⁾

しかし、フーリエの思想の内容が、その著書の外見と同じように、混乱と幻想に満ちたものであるならば、われわれがここで、たんなる興味以外の理由で、かれの思想をとりあげる必要はないであろう。けれどもその発表形成の奇抜さにもかかわらず、フーリエには事物の真相を直感的に見透す超人能力がそなわっているのを、われわれは卒直に認めざるをえない。たとえば、日露戦争（一

九〇四一五年」の約一〇〇年前の一八〇八年に、かれはつぎのように書いている。「やがてロシア人の中国への侵入は、日本人をして、かれらを迎えるのに航海術を以ってすることをよきなくさせるだろうが、そのときに、かれら日本人は完全に成功するであろう。そしてかれらは、これによってロシアに対するとりでを形づくったのち、それを世界産業に対する侵略の手段となすであろう。」⁽²⁾

本章では、以上のような多面的な性格をもつフリーエ思想の本質を、かれの農業にかんする見解を中心として、解明しようと試みる。このばあい、フリーエの思想を農業思想として理解しようと試みることは、けっしてかれの思想をことさらにせばめ、あるいけ、その本質からそれて理解することにはならないと考える。それどころか、数あるフリーエの研究書のなかで、なお古典的生命を保持するブルジャンの著書が、「フリーエの体系は協同組合の体系であり、しかもかれは農業協同組合に最上の地位をあたえている。」⁽³⁾とのべているように、フリーエ思想の本質は農業思想、とりわけ農業協同組合思想にもとめられる。ところで、フリーエの思想的本質が農業思想にあるという、まさにそのことによって、「かれは産業革命の意味を評価することに、完全に失敗した。」⁽⁴⁾とされ、あるいはまた、「過去の予言者である。」⁽⁵⁾とみなされ、そのことによって、同時代人のオーウェン(Owen, 1771-1858)やサンシーモンよりもおくれた段階の思想であるとさえいわれている。このような見解に対して、本章では一つの反論を試みるつもりである。あらかじめ結論めいたことをいうならば、こうである。われわれはブルジョンとともに、フリーエの思想を農業協同組合思想として理解し、しかも先の通説に反して、かれはフランス産業革命の一環としての農業革命の思想的代弁者であり、オーウェンやサンシーモンが工業の発展に敏感であったのに対して、かれは農業の発展にアクセントをおいたのだ、と主張したい。以上の主張を論証するために、まず産業革命期におけるフランス

の農業問題を摘出し、ついでこの問題にフーリエがどのように対決しつつ、かれの農業協同組合思想——農業生産協同化論と農村社会計画論を含む——を体系づけているかを明らかにし、最後にその歴史的、現代的意義を論評してみたいと考える。

なお、フーリエの主著は、一八〇八年の『四運動の理論』、一八二二年の大著『家庭的農業協同組合論』（のちに『宇宙統一論』と改題）、一八四八年の『産業的社団的新世界』および一八三五年と三六年の『偽りの産業』（*La fausse industrie*）であって、ほぼフランス産業革命の胎動期（一八一五〜三〇年）から本格的展開期（一八三〇年以降）にわたっている。ただし、最後の著書は『フーリエ全集』（一八四一〜四三年）に入っていないため、未見である。

第一節 産業革命期のフランス農業の生産構造

さきに、第三章第一節において、産業革命期におけるフランス農業の社会構造を考察し、この面からみたこの時期の農業問題の一つが貧農問題であることを明らかにした。この貧農問題はシスモンディと同様、フーリエもまた対決する問題として、あらためてここで確認しておきたい。

ところでフーリエは、文明社会における無秩序と貧困の主要原因の一つとして、そこにおける生産力の低さをあげる。かれが対決するのはそれゆえ、貧農問題であるとともにフランス農業の生産問題である。したがって、フーリエの農業思想を理解するためには、かれが対決するこの時期のフランスの農業問題を、生産構造ないし生産力水準の面から確認しておくことがまず必要であろう。以下、若干の統計資料をもとにして、この点を明らかにしておきたい。

第一表によれば、フランスは一九世紀を通じて農業を主産業とする国であり、産業革命の完成期と

みられる一八七〇年代においても、第二次産業の生活人口の比重は二七%にすぎない。ここでわれわれが問題にしようとしている、産業革命の胎動期における第一次産業の生活人口（その大部分は農業の生活人口）は、六五%前後という大きな比重をしめていることが注目される。

第二表も同様にして一九世紀全般を通じてのフランスにおける農業の優越を示している。工業所得が農業所得を追い越すようになるのはようやく一八九二、九八年になってからである。

ジョルジュ・デュブウは、この間の事情をつぎのように説明している。「革命前と同じように、革命後も、フランスは本質的に農業国のままであり、しかもながいあいだそうした状態にとどまるであろう。農業総生産物の価値は、王政復古期末において、工業生産物の価値の三倍以上にものぼり、第二帝政期初頭においてもなお二倍以上にものぼる。両者の間が均衡するのは、やっと一九世紀の終末においてである。」
(6)

第1表 産業部門別生活人口 (population vivante)

| 年次 | 第1次産業 | | 第2次産業 | | 第3次産業 | | 計 | |
|------|-------|----|-------|----|-------|----|-------|-----|
| | 万人 | % | 万人 | % | 万人 | % | 万人 | % |
| 1800 | 1,560 | 67 | 440 | 19 | 340 | 15 | 2,340 | 100 |
| 1815 | 1,700 | 68 | 540 | 22 | 260 | 10 | 2,500 | " |
| 1835 | 1,820 | 62 | 800 | 27 | 300 | 10 | 2,920 | " |
| 1845 | 2,000 | 62 | 880 | 27 | 340 | 11 | 3,220 | " |
| 1856 | 1,900 | 58 | 940 | 29 | 420 | 13 | 3,260 | " |
| 1866 | 1,960 | 56 | 1,040 | 30 | 500 | 14 | 3,500 | " |
| 1876 | 1,900 | 56 | 920 | 27 | 580 | 17 | 3,400 | " |
| 1886 | 1,760 | 52 | 920 | 27 | 740 | 22 | 3,420 | " |
| 1899 | 1,740 | 51 | 940 | 27 | 760 | 22 | 3,440 | " |

注) Elian Mosse, Marx et le problème de la croissance dans une économie capitaliste, Paris, 1956, pp, 146, 149 より計算。第3次産業には軍隊の人口が含まれている。

第2表 農業と工業の名目所得比較
(単位・百万フラン)

| 年 度 | 農業所得 | 工業所得 |
|------|-------|-------|
| 1817 | 3,952 | |
| 1835 | 4,742 | 3,786 |
| 1847 | 6,050 | 4,950 |
| 1859 | 8,730 | 5,800 |
| 1872 | 8,880 | 6,750 |
| 1892 | 9,978 | |
| 1898 | | |

注) Eliane Mossé, op.cit.,
pp.150~151, 194.

第3表 作付面積の変遷

| 区 分 | 1789年 | 1859年 |
|---------|-----------|---------|
| 休 閑 地 | 1,000 万ha | 500 万ha |
| 小 麦 | 400 | 600 |
| ライ麦・その他 | 700 | 600 |
| 蒸 麦 | 250 | 350 |
| 栽培牧草地 | 100 | 300 |
| 根 菜 類 | 10 | 200 |
| その他の耕地 | 40 | 100 |
| 計 | 2,500 | 2,600 |

注) M.L.de Lavergne,
Économie rurale de la
France depuis 1789,
4^e éd., paris, 1877,
p.51.

第三表によれば、フランス革命期より産業革命期を通じて、休閒地面積は半分に減少しているのに対して、栽培牧草地面積は三倍に増大し、また根菜類は二〇倍に激増していることが注目される。作付面積の右のような動向は、とうぜん家畜飼養頭数の増加を予想させる。

第四表によれば、馬の増加は目立たない程度であり、むしろ停滞的であるのに対して、牛は増加の一途をたどり、とくに一八一二〜四〇年に顕著である。羊も同じ時期に増加し、一九世紀中ば以降は減少している。豚は漸増の傾向を示している。一般に家畜の増加は目をそばだてるほどではないが、しかし、作付面積の動向とあわせて考えるならば、当時の「耕作者の心得」(La Feuille du cultivateur) がのべている、つぎのような「農業経済の循環」がおこなわれていたか、あるいは少なくともそれに向ってフランス農業が進んでいたことが了解される。「休閒地を廃止するためには肥料が必要であり、肥料を手に入れるためには家畜が必要であり、さいごに家畜を養うためには自然

第4表 家畜飼養頭数の動向

(単位: 10万頭)

| 年次 | 馬 | 牛 | 羊 | 豚 |
|------|----|-----|-----|----|
| 1812 | 19 | 67 | 270 | 45 |
| 1820 | 24 | 91 | 289 | 49 |
| 1840 | 28 | 117 | 321 | 52 |
| 1862 | 29 | 128 | 295 | 60 |
| 1882 | 28 | 130 | 238 | 71 |
| 1902 | 32 | 143 | 173 | 73 |

H. Sée, Histoire économique de la France, t. II, 1951, pp. 149 et 317.

にせよ栽培にせよ、牧草地が必要である。かくのごときものが農業経済の循環なのである。」⁽⁷⁾

穀物生産についてはくわしいことは省略するが、小麦、混合麦、ライ麦、大麦はいずれも増大の傾向にあり、これにたいして、ソバ、燕麦は一八三〇―三五年に減少に転ずる。⁽⁸⁾

農機具についてみると、一八二六年に収獲機が使用されはじめ、また一八三〇年代以降、伝統的な半月鎌 (faucille) に代わって改良鎌 (faux) が、また無輪犁 (conarrue) にかわって有輪犁 (charrue à roue) がしだいに普及しはじめ。

このようにして、ソブールがいうように、「ルイー・フィリップ治世の後半、すなわち一八四〇年から一八四八年までの時期は、農業の資本主義化の過程が促進されたことによって特徴づけられる。」⁽⁹⁾

以上の農業生産の動向は、産業革命の動向と対応して、いわゆる「農業革命」(Révolution agricole) が、フランス農業において、しだいに発酵しつつあることを物語るものである。ここで農業革命とは、ションパール・ドゥ・ローのいうように、「疑う余地のないまでに農業生産を改善する諸発見の全体」をさし、つぎのような事実を内容とするものと理解される。すなわち、「有輪犁の発明、共同放牧場の廃止、休閑地の廃止と動物生産の拡大を同時にもたらした栽培牧草の輪作への導入、除草作物の耕作の発展、家畜品種の改良など。」⁽¹⁰⁾ しかしながら、以上のような農業革命への指向にもかかわらず、フランス農業の生産はそれほど急速な増大傾向を、たどっておらず、むしろ緩慢

第5表 男子就業者当り農業生産性

(1905-14年フラン)

| 年 次 | 農業生産性 |
|-----------|---------------------|
| 1803-12 | 1,168 ^{fr} |
| 1815-24 | 1,120 |
| 1825-34 | 1,209 |
| 1835-44 | 1,344 |
| 1845-54 | 1,410 |
| 1855-64 | 1,608 |
| 1865-74 | 1,764 |
| 1875-84 | 1,694 |
| 1885-94 | 1,904 |
| 1895-1904 | 1,894 |
| 1905-14 | 2,189 |

J.-Q. Toutain, Le produit
de l'agriculture
française de 1700 à 1958,
Paris, 1961, p. 207.

であるといつてよい。
第五表にみられるように、男子就業者当たり農業生産性は、一世紀間に二倍にもたつておらず、一〇年ごとに一〇〇フランでいどの増大にすぎず、上昇カーブはきわめてゆるやかである。このような農業生産性の緩慢な上昇は、フランス資本主義の緩慢な発展とも表裏するものである。

それでは農業生産性の上昇カーブを緩慢ならしめている原因、あるいは、フランス農業の発展を阻止している原因は何か。一九世紀初頭（帝政期）におけるフランスの農業を阻止している諸要因を、オクターヴ・フェスティはつぎのように指摘している。「ほとんどつねに不都合な輪作を容認する広大な休閑地が存在し、土地の賃貸契約はあまりに短かく、かつあまりに嚴重であり、肥料はいつも不十分で、しかも一般に下手に取りあつかわれ、かつ下手に使用された。農器具はいぜんとして旧式で能率が悪かった。労働力は不足であり、したがって高かった。資本は不足していた。零細農耕をおびやかす農地分割は増大していった。」⁽¹¹⁾

フェスティの指摘のうちで、農地分割の増大は、この時期のフランス農業の発展を阻止した有力な要因として、とくに注目されねばならない。農地の分散細分化（Morcellement）は、オジェーラリペのいうように、農民の農地獲得欲と商業資本の介入とによって、いっその促進された。すなわち、

「分割にさいして各々の財産相続人たちは、さまざまの分割地の各一地片をもつことを望んだ。というのは、各分割地は耕地、牧草地、ブドウ園、森林といった特質をもっていたからである。その結果、犁で二筋か三筋の広さもたない細長い農地が生じた。同時に、不動産商人、あの『非道なやから』(bandes noires)が一定面積の土地をまとめて買収し、多くの儲けをもって転買するためにそれらを分割した。」⁽¹²⁾

さらに、以上の諸要因に加えて、農村における近代的信用制度の欠如と前近代的な商業高利貸資本の吸着をあげておく必要がある。アンリ・セエによれば、王政復古期において、「あらゆる信用組織の欠如は農民の上に重くのしかかり、かれらを高利貸に従属させた。」⁽¹³⁾

このように、発展の側面に光をあてるか、停滞の側面を摘出するかによって、一九世紀前半のフランス農業の態様は、大きく異なってくる。これは、過渡期の社会が包含する特有の多様性によるものであろう。

しかし、このような多様性をもつ過渡期のフランス農業に何らかの関心をもち、その発展を願う主体にとって、問題はつぎのように設定されるにちがいない。すなわち、「フランス農業の発展を阻止する要因を排除することによって、これを農業革命の軌道にのせること、」これである。われわれはフリーエの問題意識を、そのようなものとして理解する。かれは農業革命を、独特の手段をもって推進することによって、資本主義経済の無秩序と国民の一般的貧困を根本的に解決しようと企てるのである。

ではフリーエは、フランス農業の現実をどのようなものとしてとらえるか。

第二節 フーリエの社会思想における農業問題

フーリエは、「フィジオクラートの最後の人」⁽¹⁴⁾といわれるほど、経済社会における農業の役割を重視する。かれの理想社会は本質的に農業社会なのである。しかし、このような農業社会は、かれのたんなる好みや思いつきで構想されたのではない。それは、フランス農業の実態にかんするかれの詳細な観察、すなわち、その無秩序と低位生産性、ならびに農民の貧困についての認識にもとづいて、それらを克服するための実践的処方箋として構想されたものなのである。

フーリエ主義の解説者シルベルランによれば、フーリエにとって「農業は富の主要源泉である。」⁽¹⁵⁾われわれはここで、ケネーの、「土地は富の唯一の源泉であり、富を倍加させるものは農業である。」⁽¹⁶⁾とする、フィジオクラートの原則をふたたび見いだす。フーリエが最後のフィジオクラートといわれるのは、こうした理由によるものである。そしてまた、この点において、フィジオクラートの原則を、スミースーサー流の産業主義にくみかえて、つぎのようにのべるサンシモンに比べて、フーリエの思想的古さが指摘されるのである。サンシモンはいう、「産業は社会存在の唯一の保証であり、あらゆる富、あらゆる繁栄の唯一の源泉である。」⁽¹⁷⁾

さてフーリエは、かれが理想とする協同社会は、農業なしには組織されえないと考える。「農業労働、あるいは少なくとも家畜品種や作物品種の非常な多様性をともなう、菜園、果樹園、家畜群および家畜飼養場を活動させずして、規則的で均衡のとれた協同社会を組織することは不可能である。」⁽¹⁸⁾しかもこのばあい農業は、農業協同組合 (les coopératives agricoles) として組織されねばならない。なぜならフーリエにとって、「協同組合 (la coopération) は協同社会 (Association)

の胚種の一つ」であり、したがって、「農業協同組合は、協同社会の発展にとって、もっとも好都合な地盤を構成するであろう」⁽¹⁹⁾からである。つまり、フリーエにとって、農業および農業協同組合は、理想社会を実現するための基礎条件なのである。しかるに、このような重要性をもつにもかかわらず、農業は、現在の文明社会において、農業そのものの欠陥と外部からの農業収奪とによって、荒廃させられ、農民は貧困に苦吟している、とフリーエは説くのである。このような農業主義の観点からするフリーエの文明社会批判のなかに、フランス産業革命期の農業問題が、みごとにえぐり出されているのを、われわれは以下において論証したいとおもう。

一 まず、外部からの農業収奪として、フリーエは商業資本の横暴をあげる。この点について、フリーエの商業攻撃は激烈をきわめる。たとえばつぎのとおりである。「主要な機能をもつ農業が、副次的機能をもつ商業に従属させられている。」すなわち、「農業はかつて封建制によってしほり取られたが、それがいまでは他の蛭、すなわち山師たちの集団によって、しほり取られている。」⁽²⁰⁾「概算してフランスの八五県（パリとコルシカを除く）は、農業から横領した少なくとも一〇億フランを相場につぎこんでいる。いっぽう、すべての資本家と脱農者の居住地であるパリでは、この富クジに少なくとも二〇億フランが使われている。つまり全部で三〇億フランが、他のものとは別に、ただ相場だけにつぎこまれていくのだ」。⁽²¹⁾「投機によってひき起こされる価格の変動、あらゆる食料およびあらゆる商品の品質低下、あらゆる利益を商業に提供するさざは、消費と生産を非常にめいりこませている。」⁽²²⁾

農業に対する商業資本の吸着は、国家的高利貸と地方的高利貸の両面からなされている。前者は高利貸的封建階級による財政面からの農業の収奪であり、後者は収穫物を担保とする農村の質屋などに

よる農民収奪である。⁽²³⁾ フーリエは、当時の農村高利貸の利子が一二%〜二四%であるとし、銀行利子の六%に比して極端に高利であることを指摘し、農村の貧困を解消するためには銀行を組織する必要があると説く。⁽²⁴⁾

要するにフーリエは、商業資本あるいは高利貸資本の農村への根深い吸着をもって、文明社会における農業生産性の低さと農民の貧困の原因とするのである。封建的な高利貸資本は、租税制度を通じて国家権力により、あるいは農村金融業者を通じて直接的に農業、農民を収奪し、また商業資本家による農産物の買占めは、食料の価格を不当につりあげながら、生産者と消費者から莫大な利益をむさぼっている。このようにフーリエは説くのである。フーリエの商業資本に対する非難攻撃は、個人的経験⁽²⁵⁾によっていっそう強化されているとみられるが、かれの主張からわれわれは、産業革命期の農村における高利貸資本の根深い吸着が、フランス農業、したがってフランス資本主義の自由な発展をいちじるしく阻止したものと考えることができる。フランス農村における高利貸資本の実態にかんする研究は、わが国ではほとんど見当らないが、フーリエの主張は、この点にかんする経済史的研究の必要を痛感させられる。⁽²⁶⁾

二 文明社会における農業そのものの欠陥として、フーリエは、肥料の欠如、休閒地の存在、農地および経営の分散細分化、耕作技術の未発達、農業労働における魅力の欠如をあげる。

(一) まず農業生産における肥料の欠如について、フーリエは、つぎのようにのべる。「肥料があまりに少ないので、耕地に莫大な量を播種しなければならず、調和社会 (Harmonie) がこれと同じ量の穀物を得るのに使用するであろう種子のほぼ二倍にたっている。」⁽²⁷⁾

(二) つぎに休閒地の存在についてはこうのべる。「土地を一年間休ませるなんて、太陽が休むとで

もいのであるうか。收穫物は毎年成熟しないだろうか。必要とする肥料の量と質が適当な、しかもそれらが持続される土地だけを、穀物に利用するために、休閑地が必要なのだろうか。」⁽²⁸⁾

(三) 農業生産の分散細分化について、フリーエは、商業の虚偽とともに、文明社会における二つの根本的害毒であるとしてこれを非難する。こうした分散細分化は工業においても同様にみられる。これによれば、このような「産業細分化 (MOUELEMENT INDUSTRIEL)」あるいは非団体的労働 (travail non sociétaire) は、神の經濟觀の反対物である。」⁽²⁹⁾ したがって分散細分はフリーエの理想社会にもとうぜん対立する。あるいは、分散細分化という現実を克服する手段として、これは、その反対の協同社会を構想した、といってもよからう。

では農業 (工農においても同様) における分散細分化は、なぜかれによって非難されるか。フリーエは事例をもってこれに答える。「ただ一つの農場として管理されるある社団地区 (フリーエの理想社会における地域的単位) の耕作と、三〇〇家族の自由意志に任せられる分散細分の同じ耕作とを、理論的に比較してみるとしよう。後者は、自然がブドウ園に予定しているような傾斜地を牧草地にしてみようが、前者は、まぐさに適しているところにも小麦を植え、また小麦の購入をさけるために、次の年に大雨が土地を流してしまふような傾斜地でも開墾するが、分散細分の耕作は、ブドウ酒の購入をさけるために湿地にブドウの木を植えるようなことをする。三〇〇家族は囲いでバリケードをつくったり、また境界や盗みを弁護したりするのに、時間と費用をむだにし、いやな隣人に役立ちうるような公共に有用な労働をいっさいこばみ、こうして、各々は森林をあらそって荒廃させ、公共の特別の利益に、いたるところで反対する。」⁽³⁰⁾

要するに分散細分はフリーエにとって「反社会的な不調和音」 (Cacophonie anti-sociale)

である。そして、この分散細分は、たんに農地そのものの状態を意味するだけでなく、一経営内における多種作物の無秩序な混作、すなわち「ひとりの農民がある土地に小麦とブドウ、キャベツとカラ、大麻とジャガイモをまぜこぜに耕作」⁽³¹⁾するといった状態をも意味する。

要するに、フリーエが農業における分散細分を非難するのは、それが、個々の農家を孤立させて利己主義に陥いらせ、また零細経営をさらにいっそう分割細分^{せつぶん}することによって、農民にはかりしれない経済的、技術的不利益をもたらし、それによってかれらに救いがたい貧困を強制している、という点にかかっている。

(四) さらにフリーエは、文明社会における農業そのものの欠陥として、耕作技術についての農学者および農民の無知をあげる。かれによれば、文明社会の「農学者は一つのことを獲得するのに十のことを失っている」⁽³²⁾。かれらは、理論の完成のみに気をとられて、実際上の効果については無頓着である。そのため「森林、資源、気候が急速に衰えている。われわれの農業制度には理論上の完成と実際上の悪化だけがみられる」⁽³³⁾。まことに、「農学栄えて農業滅ぶ」とフリーエは警告するのである。しかも農学そのもののさえ、きわめて未熟な状態にある。もともと「農業は諸科学の基礎」⁽³⁴⁾であり「農業は無限の知識を必要とする」ものであるから、「完全な農学を構成する諸方法のわずか二〇分の一を総合することさえ、農民にとっては不可能である」⁽³⁵⁾。しかるに「公表された理論によれば、現在、農業におけるあらゆる経済、あらゆる理性の欠如、すなわち方法と知識の欠如は明白である。パリの郊外ではバレイショを耕作することを知らないのである」⁽³⁶⁾。このように、文明社会の農業における技術や経営の拙劣さは、農民の無知によるものであるとともに、農学者の理論的未熟さと実際的知識の欠如によるものと、フリーエはきめつけるのである。

(四) さいごに、農業そのものの欠陥として、生産労働における魅力の欠如と農民の消費生活における貧しさがあげられる。フリーエはいう。「現状において、農業は社団的調理室のあの美しい特性に對立する二つの欠陥によって影響されている。一つは売買すること、やむをえないことによって営まれる嫌惡の情をもようさせる労働であり、もう一つは有閑者だけに御馳走を食べるのがゆるされていることである。耕作者はその仕事に對する特別の魅力によっても、仕事のやり方についての秘密本能 (ocbaie) によっても、また生産物の分配にかんする論議によっても、興味を起こさせられないでいる。」要するに、「われわれの農業のメカニズムは、生産に應用される密謀や秘密本能の欠如によって、また有閑者だけにかぎられている肉欲的な洗練の欠如によっても、あらゆる意味でへしまげられている」。(37)

以上、フリーエの社会思想体系のなかに、農業問題がどのように内包されているかをみた。フリーエにとって、農業は富の主要源泉であるから、農業を組織し、その生産力の向上をはからずして理想社会を実現することはできない。しかるに農業は、文明社会において幾多の欠陥をかかえている。商業、とくに商利貸資本による農業収奪、肥料不足、休閒地の存続、農業労働および農民の消費生活における魅力の欠如などがそれである。フリーエのこの指摘は、第一節において明らかにした産業革命期のフランスの農業問題を、かれがはっきりと認識していたことを示すものとして注目される。

さて、文明社会における農業が以上のような欠陥をもつのだとすれば、「社会全体の幸福」を実現するためには、何よりもまず農業問題を解決しなければならぬ。フリーエは、かれの理想社会の基礎細胞を構成するフアランジュの生産組織を説明する過程において、同時に、農業問題解決の方法を提示する。

第三節 農業生産協同化論

ファランジュに表徴されるフーリエの未来社会は、生産と消費にわたる完全な協同社会であり、これはこれについて異常なまでの情熱をこめて詳細に語り、ファランジュの中心となる共同宿舎、ファランステールの設計図や、その建築費さえも計算しているほどである。しかし、われわれは、ここでフーリエの未来の物語をこまごまと紹介するつもりはない。ここでは農業生産の協同化にかんするかれの議論に耳をかたむけたい。というのは、今日、わが国において進行しつつある農業協同化の発展に対して、かれの議論が何らかの有効な暗示をあたえてくれることを期待するからである。そして、さらにわれわれが注目したいことは、農業生産の協同化をおしすすめることによって、フーリエが、文明社会の農業生産の構造を変革しつつ、農業生産力の向上をはかるうとしていることである。このフーリエの意図を第一節でのべた当時のフランス農業の進行方向に照らしてみるならば、それは明らかにフランスにおける農業革命をめざすものであるといつてよからう。われわれは、以下において、これらの諸点を論証してみたいと考える。

さてすでにのべたように、フーリエの未来社会では、製造業は従属的な部門であつて、主幹産業は農業である。したがつてそこでの生産労働は、とうぜん農業労働が主体となる。もちろんこの労働は協同組織のもとで行なわれる。ところでこの労働は、神によって人間にあたえられた情念を満足させるような労働、すなわち魅力的労働 (*le travail attrayant*) として組織されなければならぬ。フーリエはこれについてつぎのようにのべる。

「協同労働 (*le travail sociétaire*) が、人々に強烈な魅力にあたえるためには、それは、

現在、われわれに労働を非常にいやがらせている不愉快な形式と、あらゆる点で異ならなければならぬ。協同の勤労が魅力的となるためには、つぎの七つの条件を満足させることが必要である。

(一) めいめいの労働者は、賃金によってではなく、配当金によって報酬をあたえられる組合員であること。

(二) 男女、子供の各々は、資、本、労働および才能の三つの能力に応じて報酬をあたえられること。

(三) 勤労に従事する時間は一日におよそ八回変えられること。農業または製造業の職務を実行するのに一時間半もしくは二時間以上も熱中してつづけることはできないからである。

(四) 勤労従事は、自然に協同しあう、またきわめて活発な競争によって好奇心を起こさせ、かつ刺激しあう仲間たちといっしょに行なわれること。

(五) 工場と農場は労働者に優雅と清潔の魅惑をあたえること。

(六) 分業は、各人を性と年齢に応じて適当な職務につかせるよう、最高度にすめられること。

(七) この労働配分において、男女、子供のそれぞれは、労働権、すなわち、誠意と適性を証明しさえすれば、気に入った部門の労働を選択していつでもこれに従事できる権利を、完全に享受すること。要するに、この新秩序において人々は、現在および将来のために最小限必要な幸福の保証、すなわち、かれとその家族にたいしてあらゆる不安を取り除く保証を享受するのである。」³⁸⁾

以上は協同の生産労働における原則ともいふべきものであり、フリーエの農業生産協同化の思想は、これらの原則のなかに集約されているとみることができると。そこで、各原則について、フリーエ自身の見解にしたがってさらに若干のコメントを付しておきたい。

(一) 賃金制度は、完全なファランジュの成立する前の「試験的ファランジュ」(phalanxes d'

essent)においては部分的に存続するが、将来は急速に消滅する。フリーエによれば、賃金制度は文明社会によって労働者に強制された制度であり、したがって人間の幸福に障害をもたらすものである。

(二) 文明社会の賃金制度にかわって、フアンジュにおける社会的余剰の分配は、資本に対して十二分の四、労働に対して十二分の五、才能に対しては十二分の三の割合で行なわれる。ここで才能 (talent) が重視されていることは、セーやサン・シモンらの産業主義者たちが能力 (facultés) を重視するのと類似しており、産業革命期の社会気運を表現しているものと考えられる。しかし、三つの能力中、労働が最も重視され、資本がこれについている。

なお資本に対する分配を認めているように、フリーエは、私有財産制を否定せず、したがって各人における貧富の差を容認する。かれはたんに財産相続制の修正を主張するだけである。すなわち、「相続財産は子供に三分の一ないし二分の一、養子に四分の一、友人、妻、傍系親族に四分の一の割で再分配される。」⁽³⁹⁾

(三) 労働の変化は、人間の十二の情念のうちの、変化と対照を好む輕薄本能 (Papillonne) を満足させて、労働を魅力あるものにするためにぜひ必要である。フリーエはいう。「勤労においても、娯楽におけると同様に、変化は明らかに自然の欲求である。どんな快楽でもたえまなしに二時間以上もつづければ飽満、乱用におちいり、器官を鈍らし、快楽を磨滅させる。……もし快楽でも二時間のたのしみのちに、なお変化を必要とするものだとなれば、労働は、それ以上にこうした気晴らしを必要とする」⁽⁴⁰⁾

(四) 競争意識をもち、刺激をあたえあう仲間と協同して勤労に従事することは、人間のもつ十二の情念のうちの、対抗を好む秘密党派本能 (Cabalistie) を満足させるために必要であるとフリーエ

はいう。なぜなら、「この本能は人間の手腕を二倍にし、その能力を拡大する」のみならず、さらに「すべての組合員の間の友情のきずなを強固にする」⁽⁴¹⁾からである。

(五) 工場と農場の設備を完備することが、労働を魅力的にする第一の条件である。かれはいう。「まず農場と工場を豪華にすること。設備が貧弱、不愉快であって、どうして勤労の魅力をそそるだろうか」⁽⁴²⁾

(六) 分業 (la division au travail, l'exercice parcellaire) は、労働を魅力的、能率的なものにするためにも、また人間の熱狂と混乱を好む混合本能 (Composite) を満足させるためにも、必要である。このばあい、分業は仕事の性質と各人の好みに応じて編成された、小集団によっておこなわれる。農業労働についていえば、「土地を鋤で耕したり、それに施肥したり、土地を改良したり、かきまぜたりすることは、各人にとって多くの異った職務であるから、それらの職務について、いくつかの部門別集団が充当されることになる」⁽⁴³⁾ また農業労働において、男女、子供によって異なった仕事割当てられる。男には主として「森林や灌漑の労働」が、また婦女子には小家畜、家禽、野菜畑、および婦女子だけがなしうるその他の仕事」⁽⁴⁴⁾ がゆだねられる。

(七) 「労働権は基礎的権利であり、唯一の有用な権利である」⁽⁴⁵⁾

以上のような、協同の農業労働組織をもって営まれる農業は、それではどのような農業であるか。フリーエによれば、協同社会においては「地球全体が、あたかもただ一つの株式会社に属しているかのように、耕作が普遍的に配分され、各郡、各県、各地方が、計画的に完成の状態に高められる」⁽⁴⁶⁾。そこでは灌排水の事業や大気を清浄、温暖にするための植林、および極地まで耕作圏を拡大する事業が行なわれる。そこで栽培される作物についていえば、まず小麦はあまり栽培されない。というのは、

調和社会の「食生活」(système de subsistance)においては、パンはあまり用いられないからである。その理由は三つある。第一に「パンは製造に骨が折れ、人々にとって魅力が少ない。」穀物は家畜や家禽の飼料に適するが人間の食料にはまづくて不適である。第二に「パンは産業的魅力に乏しく、耕作したり、刈り取ったり、脱穀したり、こねたりなど、パンの生産や製造にかんするいっさいの労働は、きわめて魅力が乏しい。」第三に「パンは：：毎日製造しなければならない」から「不経済」である。⁽⁴⁷⁾パンに代わって、調和社会においては、安価でおいしいジャガイモが主食となり、さらに、食生活の多様性にもとづいて、そこではつぎのような農業が行なわれる。「要するに調和社会は、家畜、家禽、牧場、果樹園、菜園をいちじるしく増大させていき、文明社会の農村にみられるあの広大で陰気な小麦畑を大いに減少させるであろう。おびただしい家畜は多量の肥料をもたらすから、調和社会は、こんにち播種されている土地のわずか三分の二を耕作しながら、文明社会がその二倍の土地で収穫する穀物よりも、もっと多量の穀物を刈取るであろう」。⁽⁴⁸⁾

以上、フリーエの農業生産協同化の思想を、ファラジュ、あるいは調和社会における農業労働組織および農業生産組織をつうじてあとづけた。フリーエは、そのような形で文明社会の農業―農民問題を解決し、これを発展と富裕の軌道にのせようともくろんだのであった。かれがここでのべている未来の農業労働組織は、かれの未来社会の消費生活がきわめて奇怪な形式でのべられているのとくらべると、むしろ正常であるといつてよい。とくに農業を魅力的にするためにかれが提案している労働組織には、こんにち問題になっている農業生産共同化あるいは協業経営においても、なお十分、参考になるものが見いだされるようにおもわれる。また未来の農業生産についてフリーエは、穀物生産から畜産・果樹生産への生産構造の变革、および粗放経営から集約経営への経営方式の転換を主張して

いる。そしてこの点でわれわれは、かれの農業思想が、フランスにおける農業革命を推進しよとするものであること、すなわち農業革命思想であることを、あらためて確認するものである。

第四節 農村社会計画論

フリーエの農業思想の本質を農業革命思想と規定することによって、本章におけるわれわれの主要課題は、ほぼ果たされたといつてよいのであるが、さらに、現代的観点からわれわれの注意を引くのは、かれの農村社会の計画にかんする思想である。

このばあい、「農村社会計画」の内容を、ここではたんに、農村の社会的、経済的形態あるいは組織にかんする計画として理解するにとどめる。以下、この観点から、農村社会計画かんするフリーエの思想の基本的と思われるものを、いくつか拾いだしてみたい。

(一) 農村社会計画の基本理念 フリーエのめざす未来社会においては「調和」(Harmonie)と「均衡」(équilibre)が実現される。いいかえれば「調和」と「均衡」こそ、かれの社会理想である。したがってそれは、とうぜんかれの農村社会計画の基本理念につながるものとみてよいだろう。かれはいう、「社団的調和 (1^{re} Harmonie sociale) は人間の産業的運命である。それ以外に人々の不幸を救済しうるよりすぐれた原理上の努力はまったくありえない。」⁽⁴⁹⁾ 「均衡は社会的メカニズムの目的である。」⁽⁵⁰⁾

(二) 農村社会の景観 「農村は美しい流水をもち、丘で区切られ、さまざまな耕作に適し、森林を背後にもち、かつ大都会からあまり遠くはなれていないが、しかも邪魔ものをさけるのに十分なところにある。」⁽⁵¹⁾

(三) 農村社会の人口構成

フリーエの協同社会は、農業を主幹産業として構成されるから、もと
もと農村社会そのものである。したがってそこでの人口構成は耕作者がもっとも多数をしめることにな
る。そのほか副次的産業である製造業の従事者や、若干の資本家および自由業者が存在する。すな
わち、「フアランジュ」は、少なくともその構成員の八分の七を、耕作者および製造業者としてもつた
ろう。のこりは資本家、学者および芸術家によって構成されよう。ただしかれらは、八〇―一〇〇家
族の農業者、製造業者にかぎられた小規模で単純な調和社会にあっては、必要がないだろう。⁽⁵²⁾ フ
アランジュの人口は、小規模のものは四〇〇人ぐらいであるが、平均して三〇〇家族、一、五〇〇―
一、六〇〇人ほどで、多くとも二、〇〇〇人をこえないものとされている。この人口は、人間の十二
の情念の組み合わせと、一フアランジュがもつ一、五〇〇―一、六〇〇ヘクタールの農地の生産力に
もとづいて算定される。一フアランジュ当たり二、〇〇〇人以下の人口が、協同生活にもっとも適し、
かつ生産と消費が均衡する人口であるとフリーエは説く。

(四) 農村社会の建物および施設

フアランジュの住民はすべて広大な共同宿舎（フアランステー
ル）において生活し、その宿舎と各種の作業場とは広場をはさんで完全に分離される。共同宿舎は各
種の大きさの部屋に分かれており、またそれは広い中庭をもち、そこには温室、噴水、池あるいはブ
ールが設けられ、多数の樹木が植えられる。フアランステールの周囲には、劇場、教会、病院などが
建てられる。広場をはさんだフアランステールの向い側には、大小の作業場、および各種の農舎、畜
舎、倉庫などが設けられる。農地はフアランステールおよびその付属の建物の周辺に配置される。隣
りのフアランジュとは陸海の交通路によって連絡される。⁽⁵³⁾

(五) 農村社会の生産構造

協同社会の生産業はさきのにべたように農業であって、穀作よりも果樹作

や畜産に中心がおかれる。製造業は農業の補的産業部門で、農業にくらべて四分の一の労働時間が投下される。この比率が保たれないと、産業の間に不均衡が生じ、文明社会の混乱が再現されよう。

「製造品の過渡の消費によって、人々が快適な農業への従業からはなれたり、あるいは、人々が、無限の魅力をもつ農業よりも、魅惑の程度が限られている製造業に従事するために、その労働時間をさくならば、均衡はこわれてしまうだろう。」⁽⁵⁴⁾ このように製造業が農業より軽視されるのは、協同社会の製造品は超耐久財であるので、大量に生産する必要がないためである。このことはまた、フリーエの、ケネーの重農思想を思わせるような、つぎのような考えによるものである。「調和社会における真の富は、食料の種類の最大限の消費と、衣服および家具の種類の最小限の消費にもとづく。」⁽⁵⁵⁾

(六) 住民の生活保証 フランジュでは住民のつぎのような要求を完全に保証する。「わたしはここで生れたのだ。だからわたくしは、そこで行なったあらゆる労働にたいして、わたしの労働の果実を享受する保証を認めよと要求する。わたしはこの労働を行なうのに必要な用具および生活必需品を与えてくれることを要求する。」⁽⁵⁶⁾ つまり、フランジュの住民の労働権と生活権は完全に保証される。

フリーエの農村社会計画思想は、ジイドの指摘にならうならば、「田園都市」(Cités-Jardins)を予告したものとみることができる。⁽⁵⁷⁾ ただし、この田園都市は、詩人たちの夢を満足させるためのものではなくて、文明社会の農民の貧困を解決するための実践的手段として、フリーエによって構想されたものであることに注意しなければならない。

結 語

フランス産業革命期の農業問題が、貧農問題と構造、あるいは生産力の問題であることを確認しつつ、フリーエがこれらの問題とどのようにに対決しつつ、かれ自身の思想を構築しているかを検討してみた。われわれの結論によれば、かれは、産業革命期のフランス農業の動向と農民の実態を正しく認識し、この認識にもとづいて、フランス農業の生産構造を变革し、その生産力の増大をはかり、そのことによって貧農問題を解決しつつ、同時に、理想の協同社会を実現しようと企図したのであった。かれの思想を時代おくれの古びたものとする従来の諸見解に反して、われわれはかれを、フランス農業革命の思想的代弁者と規定することによって、その思想的、歴史的役割を高く評価する。さらにまた、かれの農業生産協同化の思想は、今日も、農業協業経営の発展に関心をもつものにとって、きわめて示唆に富んでいる。また、現在、荒廃しゆく農村に深い憤りを感じ、その将来を憂慮するものにとって、かれの農村社会計画論は、やはり一つの暗示であるようにおもわれる。

註

- (1) Charles Gide, Charles Fourier, pages choisies, Paris, 1932, Introduction, pp. XII-XIII.
- (2) Théorie des quatre mouvements (Oeuvres complètes de Ch. Fourier, t. I, Paris, 1841) p. 308.
- (3) Hubert Bourgin, Fourier, contribution à l'étude du socialisme français,

Paris, 1905, p.2. ミヤケンカ『フリーエは協同組合の父也』(Paul Lambert, La doctrine coopérative, Bruxelles et Paris, 1959, pp. 28~29) よりミヤケンカ『フリーエの協同組合が農業協同組合いぬる』より注意してなる。

- (4) E.S.Masson, Fourier and Anarchism (The Quarterly Journal of Economics, Vol. 42, No. 2, 1928, p. 261)
- (5) Daniel Villey, Petite histoire des Grandes doctrines économiques, Paris, 1954, p. 172.
- (6) Georges Dupeux, La société française, 1789~1960, Paris, 1964, p. 115.
- (7) M. Augé-Laribé, La révolution agricole, Paris, 1955, p. 107.
- (8) Cf. A. Chabert, Essai sur les mouvements des revenus et de l'activité économique en France de 1789 à 1820, Paris, 1949, p. 48.
- (9) Albert Soboul, La question paysanne en 1848, La Pensée, No. 18, 1948, p. 58
飯沼・坂本訳『資本主義と農村共同体』一九五六年、三二一頁。
- (10) J. B. Chomlart de Lauwe, L'industrialisation de l'agriculture (Revue d'économie politique, 1961, No. 6, pp. 754~755)
- (11) Octave Festy, Les progrès de l'agriculture française durant le premier Empire (Revue d'histoire économique et sociale vol. XXXV, 1957, No. 3, p. 291)

- (12) M. Augé-Laribé, op. cit., pp. 124 ~ 125.
- (13) Henri Sée, Histoire économique de la France, t. II, Paris, 1951, p. 129
note 1.
- (14) René Gonnard, Histoire des doctrines économiques, Paris, 1930, p. 459.
- (15) E. Silberling, Dictionnaire de sociologie phalanstérienne, Paris, 1911,
p. 11.
- (16) Oeuvres de François Quesnay, éd. Oncken, Paris, 1888, p. 337. 島華・夢山訳
『クネー全集』第三卷「一九五二年」一四六～一五。
- (17) H. Saint-Simon, L'industrie, Oeuvres, t. XVII, p. 13.
- (18) Nouveau monde industriel et sociétaire (Oeuvres complètes, t. W, Paris,
1845) p. 4.
- (19) E. Silberling, op. cit., pp. 99 ~ 100.
- (20) Théorie de l'unité universelle, t. II (Oeuvres complètes, t. W, 1841)
p. 92.
- (21) Sommaires et annonce du Traité de l'unité universelle (Oeuvres complètes,
t. II, 1841) p. 242.
- (22) L'unité universelle, t. II, p. 319.
- (23) Sommaires et annonce, p. 135.
- (24) Ibid., pp. 136 ~ 137. 島華・夢山訳『新説の義を以てする利とるる』の物と人の関係の
ノートの

指摘する利子よりも低い。「大土地所有者は5%までで借用することができたが、いっぽう農民は一五%まで支払わねばならなかった。」H. See, *op. cit.*, p. 129.

(25) 商業に対するフリーエの非難は、つぎのような個人的経験にもとづく。旅商人だった若いころを想い出しながらフリーエは、一八二〇年にこう書いている。「わたしにとって一つのリンゴは、ニュートンにとってと同様に、計画の一指針となった。二月のバリのレストランでわたしといっしょに夕食をとった一人の旅行者が、高名に価するこのリンゴに、一四スー支払った。ちょうどそのとき、わたしはこれと同じリンゴ、あるいは品質も大きさももっと上等のリンゴが半リール（「リール」は四分の一スー）でつまり一四スーで一〇〇個以上も買える地方から出てきたのでした。わたしは同じ気候の地方の間でこうした価格のちがいにひどく驚き、産業機構のなかに根本的無秩序があるのではないかと疑いはじめた。そこから四年後に産業的集団の連系の理論、したがってまたニュートンのやりのこうした宇宙運動の諸法則をわたしに発見させた諸研究が、生まれたのでした。」Publications des Manuscrits, t. I, p. 17. citée par H. Bourgin, Fourier, pp. 53~54.

(26) 最近、産業革命期におけるフランス商業資本（金融貴族（haute banque））にかんする注目すべき論文があらわれた。古賀英三郎『フランス資本主義とオートバック』一橋大学『社会学研究』第六号。

(27) L'unité universelle, t. IV (Oeuvres complètes, t. V, 1841) p. 99.

(28) Ibid., p. 99.

(29) L'unité universelle t. I (Oeuvres complètes, t. II, 1843), p. 21, t. II, p. 128.

(30) L'unité universelle, t. II, p. 12.

(31) L'unité universelle, t. II, p. 482.

(32) Sommaires et annonce, p. 187.

- (33) L'unité universelle, t. II, p. 320.
- (34) L'unité universelle, t. IV, p. 168.
- (35) L'unité universelle, t. II, pp. 12~13.
- (36) Nouveau monde, p. 484.
- (37) Ibid., p. 139.
- (38) L'unité universelle, t. II, p. 15.
- (39) L'unité universelle, t. IV, p. 452.
- (40) L'unité universelle, t. I, p. 147.
- (41) L'unité universelle, t. IV, p. 399.
- (42) L'unité universelle, t. I, p. 147.
- (43) Nouveau monde, p. 79.
- (44) L'unité universelle, t. IV, p. 98.
- (45) L'unité universelle, t. II, p. 122.
- (46) Ibid., pp. 94~95.
- (47) L'unité universelle, t. IV, pp. 565~566.
- (48) Ibid., p. 568.
- (49) L'unité universelle, t. I, p. 21.
- (50) L'unité universelle, t. II, p. 115.
- (51) Ibid., p. 427.

- (52) Ibid., p. 431.
- (53) Nouveau monde, p. 123 et suiv.
- (54) L'unité universelle, t. II, p. 210.
- (55) Ibid., p. 209.
- (56) L'unité universelle, t. II, p. 130.
- (57) Ch. Gide et Ch. Rist, Histoire des doctrines économiques, 4^e éd., Paris, 1922, p. 294. 宮川貞一郎訳『経済学説史』上巻、一九三六年、三五ページ。

産業革命という経済社会の変革期におけるフランス農業の現実を、この時期の社会経済思想家たちがどのように認識し、その進むべき方向をどのように予告したかを説明すること主題としながら、第一章では、この時期のフランスの代表的な社会経済思想の基本性格の相互関係を明確にすることにとめた。そして、この第一章を前提として、第二章では、産業主義思想を代表するサン・シモンの農業思想を、また第三章および第四章では、反産業主義思想を異なった側面からそれぞれ代表する、シスモンディとフリーエの農業思想をとりあげた。

サン・シモンについていえば、かれは、スミス、セー流の産業主義の視角から、諸産業の全面的開花をはかることによって、純粋産業社会をフランスに確立しようと企図した。農業の面においてかれは、一方では貴族の大土地所有者に表徴される封建遺制を徹底的に排除することによって、また他方では、国土の総合的開発と農地の流動化を促進することによって、借地農を中心とする企業的農業の育成をはかり、これによってフランス農業を「産業化」の路線上に位置づけようとしたのであった。そしてこの「産業化」は、一面において農業における資本主義経済の発展を意味するとともに、他面において、それが組織的、計画的に行なわれるべきだと提唱されている点で、自由主義を基調とする古典的資本主義のわくを越えた、むしろ今日の産業時代を、あるいはさらに社会主義的産業化を予告するものであったといえる。

シスモンディの農業思想は、自作農主義思想として意味づけられる。サン・シモンの農業思想が経済学的認識を欠いた経済思想、というよりむしろ社会思想、あるいはシュムペーターのいう「ヴィジ

ン」として表明されているのに対して、シスモンディは、かれの自作農主義の農業思想を、現実の農業についての経済学的認識にもとづいて展開したのであった。かれは産業革命期の農業問題を貧農問題として認識し、この問題を解決する手段を、ヨーロッパ諸国およびアメリカにおける農業経営制度の比較検討にもとづいて、土地改革の推進と土地所有権の確立による自作農の広汎な創設という、政策的措置にもとめたのであった。そしてかれがこのような自作農主義を主張するのは、自作農経営が、過剰生産恐慌を内蔵する資本主義経済において、生産と消費、富と人口を均衡せしめる機能をもつ、と考えるからにほかならない。しかも自作農経営は、土地所有権に基礎づけられていることによって、その他の経営様式よりも、いっそう安定的に農業生産の拡大をはかることが可能であるとシスモンディは主張する。かれは大革命によって創出されたフランス分割地農民の成生のうちに、自作農経営の発展を予告したのであった。

フリーエの農業思想は、シスモンディと同様に、フランス産業革命期における貧農問題との対決をうけて構成されているとともに、さらにまた、シスモンディが等閑にした、フランス農業の低位生産性についての認識にもとづいて構成されている。かれは農民の貧困と農業の低い生産力を規定している主要因を、農村に吸着する商業・高利貸資本の存在、広大な休閑地の存続、農業生産における肥料の欠如、農地および耕作方法の分散細分化、農学の非実際性と農民の無知、農業労働力の魅力の欠如などにもとめ、これらの障害をとりのぞいて、農業の発展と農民の生活の安定をはかるために、農業生産の協同化や農村社会の計画化を主張したのであった。

以上に要約したサン・シモン、シスモンディおよびフリーエの農業思想の内容は、フランス経済史研究と社会経済思想史研究の両分野に対して、いくつかの問題を提起しうるのはないかと論者は考

える。

まずフランス経済史研究に対して。大革命以後および産業革命期におけるフランス経済史研究の主要課題の一つは、「典型的なブルジョワ革命」にもかかわらず、革命以後において、フランス資本主義がなぜ急速な発展をとげることができなかったかという、いわば歴史のパラドックスを説明することである。このパラドック説明の鍵の一つは、論者の見解によれば、フランス農業の特質にもとめられ、しかもこの特質は、サン・シモン、シスモンディおよびフリーエによってすでに確認されていると考えられる。かれらの見解を総合してのべるならばこうである。

革命以後におけるフランス資本主義の発展の緩慢さは、農業生産力水準の低位性にもとめられ、そしてこの低位生産性は、「典型的ブルジョワ革命」にもかかわらず、革命以後にもなおみられる貴族的大土地所有―封建遺制の存続、領主経済の時代において形成され、革命によって法的に固定化された分割地制度の存続、信用制度の不備による商業・高利貸資本の小農民への吸着、それらによって生み出された農業技術水準の低さと農業資本の払底などにもとづくものといえる。以上の諸要因のうち、とくに一九世紀初頭における封建遺制および商業・高利貸資本の実態の究明は、今後におけるフランス経済史学の課題たりうると考えられる。

つぎに、従来の社会経済思想史研究における定説に対して、小論で追求したサン・シモン、シスモンディおよびフリーエの農業思想の内容と性格は、二つの修正を要求する。第一はサン・シモンおよびフリーエを「空想的社会主義者」とみなすマルクス・エンゲルスの規定である。「空想的」という規定自体、すでにきわめて非科学的な規定であるが、サン・シモンやフリーエの思想が、たんなる机上計画であり、現実と切斷された空想によって構成されたものだという意味であるならば、明らかに

誤りである。かれらはフランスの経済や農業の実態を明確に認識し、この認識にもとづいて、そこでの問題を解決する手段として未来社会を構想したのであった。ただ、マルクスが未来社会をくわしく語らなかったのに対して、かれら、とくにフリーエは、こまごまと未来社会の青写真を提示したというだけである。それは程度のちがいにすぎない。もっとも、マルクスが資本主義経済の発展法則を、資本運動の論理として解明しようとしたのに対して、サンシモンとフリーエは、こうした経済理論を媒介とせず、かれらの思想またはヴィジョン、あるいはせいぜい社会理論をもって、まともに経済社会の現実を把握しようとした。ここでは、近代資本主義との対決におけるかれらの理論的立ちおくれが目立つ。しかしこのことは、かれらの思想を「空想的」と規定することとは別の問題であろう。

小論が従来の思想史研究分野の定説に対して要求する第二の修正点は、シスモンディをもって「ロマン主義経済学者」とするレーニンの規定である。論者はこの規定に対して、シスモンディ経済学は、ロマンティックな懷古趣味とは異なるものだとして反論したい。かれはフランス革命の成果に立って、しかもこの成果をいっそう徹底させるために、より広汎な土地改革を推進して自作農経営の創設をはかり、この経営を中心とする農業生産の発展をのぞんだのであった。かれのこの展望は、その後のフランス農業の発展の基本線にもそうものである。もっとも、かれがのぞんだように、フランス農業の発展が緩慢なものであったことは、先にのべたとおりである。かれが農業のみならず経済全体のゆるやかな発展をのぞんだのは、かれの経済学のロマンティックな性格によるものではなくて、急速な経済発展―不均衡発展よりも、ゆるやかで安定した経済発展―均衡発展を信条とするかれの経済学の間人中心主義的性格によるものである。

以上、小論の成果を要約し、それがフランス経済史および社会経済思想史研究においてもつ意義に

ついで私見をのべた。

さいごに、この研究が論者自身の農業観―農業思想の形成においてもちうる意義について一言したい。おそらく人は、サン・シモン、シスモンディおよびフリーエの農業思想を研究することによって、研究者自身はいったい何をもとめているかと問うであろうから。

農業思想の研究が、論者自らの農業観を形成するための一つの媒介であることについては、すでに「序説」においてのべたとおりである。しかしながら、ここでの究研が論者自身に何をもたらしたかについては、今は全面的に答えるべきときではない。論者自身の今後における研究成果がそれに答えるであろう。ただ、誤解のないように一言するならば、論者の現在の農業観は、ここで取り上げたサン・シモン、シスモンディおよびフリーエの農業思想のいずれでもないと同時に、それぞれが論者自身の農業観のある一面を代弁しているということである。それぞれの思想家の原典からそれぞれの思想の本質を再構成するばあい、すでにそこには、論者自身の素朴な農業観にもとづく価値判断が介入していることを、否定することができないからである。

しかし、なお人はこう問うかもしれない。相異ったいくつかの思想を同時に、ひとりの研究者がもつことが果たして可能であるかと。ここで取り上げた三つの思想についていえば、それは可能であると答えたい。論者はサン・シモンとともに、語の固有の意味での産業主義に立つ。農業もまた他産業と同様、ひとつの産業として育成されなければならないと考えるからである。さらにサン・シモンとともに、それが企業的農業として育成されることを期待するものである。しかし、イギリス的な意味での企業的農業としてではない。日本農業の企業化、産業化は、シスモンディ的意味での家族的農業経営であるべきだと考えるからである。しかし、シスモンディのように、家族経営がつねに自作農で

あることを意味しない。従来の意味での自作農主義は、すでに時代おくれである。個々の農家が個別経営のわく内にとどまっている時代はすでにすぎた。フリーエのいう農業生産の協同化が、真剣に考慮されなければならない時がきている。しかし、協同化をさらにすすめて、フリーエが主張するような消費生活の協同化による個別農家の解体を支持するつもりはない。イスラエルのキブツが日本農業に育つとは考えられないからである。「家族労働力を主体とする個別農家の生産の協同化と、それにもとづく農業の産業化、企業化。」これが三人の思想家をとおしてわれわれが学びとった日本農業へのヴィジョンである。ただし、ヴィジョンは、シュムペーター流に言えば、あくまで「前科学的認識」以外のものではない。ヴィジョンや思想は、現実のなかで検証され、それとの対決においてのみ普遍化されるべきものである。それを果たすことは論者の今後の課題である。

〔付記〕 本研究は、柏祐賢先生の不断の激励と御指導によって、はじめて完成しえたものである。先生の学恩に報いる道は、今後における学的精進以外にありえないとの決意を記して、感謝の微意としたい。